

歌沢能六斎の都々逸本

菊池真一

歌沢能六斎の都々逸本のうち、『端唄部類』と『新撰どゝ逸大成』とを翻刻紹介する。判読不能文字は「？」とした。パソコンで出ない文字は「」とした。清濁は原本どおり。振り仮名は一部を除き省略した。

编者歌沢能六斎（萩原乙彦）は、文政九年（1826）生れ、明治十九年（1886）没で、著作権は消滅している。関西大学図書館蔵本は、著作権の切れたものであれば、自由に翻刻してよいとのことである。

今回翻刻するのは、次の六点である。これ以外の都々逸本については、次の機会に譲る。

- 一、『端唄部類二編』（万延元年）
- 二、『端唄部類四編』（元治二年）
- 三、『新撰どゝ逸大成前編』（万延二年）
- 四、『新撰どゝ逸大成後編』（万延二年）
- 五、『新撰どゝ逸大成後集前冊』（もんく入前編）（安政七年）
- 六、『度独逸大成後集之後冊』（文句入後編）（安政六年）

以下、翻刻。

一、『端唄部類二編』（菊池所蔵本）

端唄部類 二編（表紙）

端歌部類

松延文庫（見返し）

哇部類二編の序

おのれ妬婦のあらひにあひてその角なすかたつむりの家をうしなひしとき
いかにせんわが身より出たさび刀さして行ても定めなき世に

と口ずさみてさそらへの身になりしは去年（こそ）のなつ水無月のことにし
てはやひとゝせをすきぬれどもいまだはかなき夏むしのひとりさみしく日を
ふる折から一書肆はうた部類（一才）てふ書の三編詞集を予に乞へりさば
れそのふみは初編よりしておのれけみせざるものなれば文句のあやまりすく
なからざるよし嚮に予があらため正しつるそでかゝみてふ書のはしにかきし
るしてなじりしを今はたその集に詞編をしもとめらるゝことのしばしばな
るにぞもだしかねてうべないかつその書肆のまにまにこの編はまづ都々逸を
のみ抄出しぬこゝにいたりて漫然としておもへらくそもそも（一ウ）歌沢
一流の改正おのれに帰依する時なるかな去年はその集をそしり今年はこの集
をつぐわが身もまた去年の鴛鴦のごとしの羽ぬけ鳥とやつるゝがことき嗚呼
定めなき世のならひにぞありける

庚申晩夏日

隆興堂主人

鰥寒翁

歌沢能六齋誌「(二才)

目録

いろはしり取 四十七章

つじうら 六十四章

文句入 九十一章

内 義太夫

常磐津

富本

清元

長唄

新内

一中

歌沢「(二ウ)

雑 さまざままざり也 八十五章

前文附

字あまり

文句入

言葉入

通計唄員 二百有七十七章

目録了「(三才)

(絵)

其角が五元集に

三味せんや寝まきにつゝむ臯月雨「(三ウ)

端唄部類二編どゞ逸の部

歌沢能六齋集

いろはしりとり

いつかほころぶ蒼の花のかほにほんのりさくらいろ

ろんはないぞへさつしなさんせぬしゆへけふびの此しらは

はづかしいとていはずにあればゑゝもじれつたいおたかひに

にくい秋風まよひの果はあなめあなめのすゝきの穂

ほれた中でもがまんはできぬよぎをかぶつてすかしの屁「(四才)

へんなことからつい遠ざかりしらぬかほとはつみなひと

としまざかりをしらはのまゝでくるふするのも親のばち

ちゑんちかづき皆かりたをしこゝろがらからこのふざり

りんきらしいがいはずにあればすへがどふやらおほつかぬ

ぬしに二日もあはずにぬれば風のくさめも気にかゝる

るいがともとてあの子と君はもゝとさくらの顔とかを

をもひまはせば此身の泣(なき)もめくるいんくわの車の輪

わざとけなして又あるときは「(四ウ)むねてのるける深い中

かほりゆかしき蒼の梅もやかてひらけはちる浮世

よしあしを定めがたなき身のなりゆきと水の流や浪花渦

たにんがましいおまへのしうち心おきなくしておくれ

れいのかんしやくもう是切(これきり)といふは出たらめみんな嘘

そふてふたりがくらせぬならば死んであのよでうちをもつ

つらいつとめの座しきをひいて今しやしうとで又きがね

ねんがとゞいて手いけとなれば朝ばんたのしむ床の花「(五才)

なさけしらずが待身をしらでけふも来ぬとは何じややら

らくなやうでも多くの客のきげんとる身は気かいたむ

むりな義りづめむたいなくときいやといはれずとふしよう

うそか誠かさつはりしれぬさきでもしれまいわが底井

あどばたの桜あぶなしおちてはいけぬしめてかゝたさらしぬの
のんでのまるゝくせなしにしな捨てしまをうこの酒を

おし鳥と人にいはれた二人が中もひよんなことからひとりなく」(五ウ)
くやしい思も男のふじつほんにもつれたむねの綾

やかましい世間しらすがおかやきもちでなんの益ない人の邪魔
までど来ぬ夜はついかなしやくでどくとしりつゝ茶わん酒

けさの別はいつよりつらいなげかじれつたいきのふけふ
ふくささばきに手かげんおぼえほれたこゝろを茶通箱(さつづばこ)

こゝろがらじやとせけんのひとつにゆひさしされるもおまへゆえ」(六オ)
えんりよするのははしめのうちよいつか心もうち明て

てんにいやならなぜかうなつた今さらいやとはほんにまあ
あきもあかれもせぬ其中を義理でわかれる其つらさ

さらりと切たと人にはいへどかげじやみれんでしのびなき
きいて北野の梅とはおるかさても見事な花の眉

ゆふべのうつりがまださめやらて又寝うれしきけさの雪
めなみやさしき小いその浜へじれてぶつかるあだを波

身から出たさびつきはなされて」(六ウ)今は野中の破(やれ)かゞし
しみじみとつらいつとめのしんぼつするも心がらだかおまへゆえ

えんと時節をまつともしらすさきは平気なかつ思ひ
ひさしいものだがむしづがはしるかつておくれよさつま芋

もしひよつとかはりやせぬかとあんにてぬれどわざとじらしてうたぐらせ
せたいかためてかた気になつて酒ものまねばいるもせず

すへにかうした世間へかざる花もたがひの実意づく」(七オ)
つぢつらの部

大銭をなげてしるべしなみは白かたは黒
乾下乾上

坤下坤上

死なざやむまいおまへのうは氣としに不足もないくせに

震下坎上
さみだれ心をしつめなんしまてばかんろの日があたる」(七ウ)

坎下艮上
親けうだいでもたのみにやならぬ主をつえとも柱とも

乾下坎上
こへはすれども人目があればやうじひとへがまゝならぬ

坎下乾上
なんぼしあんのほかとはいへど義理をしらない人でなし

坎下坤上
きれる心はみじんもないがさがふじつで此しまつ

坤下坎上
ほどもきりよつもいゝぶんなしでそのうへ手がたしん抱人(ぼにん)」(八オ)

乾下巽上
やめばそれかかつひだまされてえゝもじれつたい虫のこえ

兌下乾上
垣がかたけりや犬さいいらすひとは心のもちしだい

乾下坤上
夜なべ朝をき人あいそつをよくすりやまひ込福の神

坤下乾上
わるくいふならいはしておきなあんなものには用はない

離下乾上
はれてそひ寝をまつちのお山どふぞ願ひのあらひがみ」(八ウ)

乾下離上
じれたり泣たり気をもみぬいてやつとふたりであらざたい

艮下坤上

たとへにもあるまけるが勝よかんにんぶくる緒をしめな

坤下震上

うはきうぐひす梅をばすてゝとなりあるきのもの花

震下兌上

三千世界にひとりのおとこつわ気をされてもすてられぬ

巽下艮上

今さら心を入れかへたとて立たうき名がきへはせぬ」(九才)

兌下坤上

わが身でわからぬ我身の心とんだはづみで此しだら

坤下巽上

かげはさしても只みるばかり手にはとられぬ水の月

震下離上

人のおちめはしらないかほをするがせけんのひとつね

離下艮上

義理をおもへばうわ気もできずさけをのんても酔もせず

坤下艮上

だましたものよりうかうかのつてだまされた身がうらめしい」(九ウ)

震下坤上

いまに見なんせもうほどもなくひだりうちはでくらしまず

震下乾上

宜(いゝ)とおもへばためにはならずためになるのは気がすまぬ

乾下艮上

ほれたどうして気らくなくらし小そでぐるみであさねほう

震下艮上

わたしやおまへゆゑえんどう豆じやないか胸に一はいたへはせぬ

巽下兌上

かきの朝がほたよりにされてからみつくほどちから竹」(十才)

坎下艮上

ところ定めぬあのうき草はけふはあちらの岸に咲

離下離上

いのちをすてるはてんからかくご死ぬまでゑんをばきるものか

艮下兌上

梅とさくらのいる香をくらべ中をすましたいと柳

巽下震上

ぬしは御店へわたしはうちでまゝごしらへしてはり仕事

艮下乾上

世間の口は身うちのなげきはぢもおもはぬ義りしらず」(十ウ)

乾下震上

かわいけりやこそりんきもするに別れるほどならやきはせぬ

坤下離上

ほれたどうして夫婦になれば家内和合でとみさかゑ

離下坤上

せけんしうどが口やかましくいらざるおせはをやきたがる

離下巽上

内のしんせうこやそふならばにようば大事にするがよい

兌下離上

たとへ気まづいしうちをしてもむねをころしてゐやしやんせ」(十一才)

艮下坎上

はかない此身はのきばのむしよひと夜つられてなきあかす

坎下震上

こくらかつても気ながにとけは長くつなけるゑんの糸

兌下艮上

またもなくかといはしやんすれどなかせるおまへがむりばかり

震下巽上

うわ氣したとて何すてよふぞほれてていしゆにした男

乾下兌上

月にむら雲花にはあらしとかくうき世はさはりがち」(十一ウ)

巽下乾上

女房だいにしにするのはよいがしりにしかれちやいがおちる

坤下兌上

心たゞしくもちさへすれは神も仏もすてはせぬ

巽下坤上

氣をもみ出してはからだにさはるなにも時節とあきらめな

坎下兌上

義理とふんどしかゝれぬものとふだんこゝろでたしなみな

巽下坎上

女こゝろはつるひやすしほれたがあてにはならぬもの」(十二オ)

離下兌上

さとられまいぞとかくしてぬれどうかとのろけが口へ出る

巽下離上

糸のみだれをわたしのこゝろとくにこかれぬ此もつれ

震下震上

親をすこすにていしゆをすてゝ今じやきらくなたんなどり

艮下艮上

人にやがまんでみれんはないといふてこゝろてないてゐる

艮下巽上

いつまでないしよであられるものはやくふうふになるがよい」(十二ウ)

兌下震上

くろうつするのはてんからかくごいきなていしゆをもつからは

離下震上

いきで美男で利こうな人もかねがなくては世ははれぬ

艮下離上

もと木こひしくうらきをすてゝねぐらうしなふたびすゞめ

巽下巽上

しんのこひじもあわねばさめるましてとうぎの花じやもの

兌下兌上

ふじの山ほどいゝたてられてゆめの間ほどもあひもせず」(十三オ)

坎下巽上

ふみしやわからぬ心のたけをねものかたりにして見たい

兌下坎上

せくなせきやるなうき世は車いのちながけりやめくりあふ

兌下巽上

女房されとはわしやいひはせぬさらでしあんはないかいな

艮下震上

人がきいたら切れたといふて情(しよう)はたがひのむねにある

離下坎上

とけたしごきを手に持ながらおもひ出してはひとりごと」(十三ウ)

坎下離上

はなればなれのすまひをすればたがひにうたがふことばかり

以上六十四卦」(十四オ)

義太夫の部

おとゝいこいとほぢやけんなことは「白木や」(そりやきこゑませぬオ三きんおまへとわたしがそのなかは)けふやきのふのことかいな

めぐりあふせはしづはたおびよ「夕ぎり」(伊左衛門さんわしやわづらふて
などふにしめるはづなれどせんやくとねりやくとはりやあんまでやうやうと
いのちつないで此とふりまたくしのはもいれぬかよ)とくにとかれぬむねの
あや「(十四ウ)

かうもしたらとしあんはすれど「いざりせんべつ段」(つきそふわたしは
女子の身ちからにおもふぬしの身は)こゝろにまかせぬ親がゝり

恋に上下のへだてはないが「すしや」(たとへこがれてしぬればとてくもる
にちかきおんかたに)しあんのほかの又しあん

もとゆひの切てしまへば根も葉もないが「白木や」(そりや聞へませぬ才三
さんおまへとわたしがそのなかはきのふやけふのことかいな「(十五才)や
しきにつとめたそのうちにふつと見そめてはづかしいこひのいろはをたもと
から)それをわすれて?ことば

きるにきらぬ悪えんなれは「おひやノ段」(わたしも女子のはしじやもの
はらもたつしりんきのしやうもまんざらしらぬじやなければともかわいゝとの
こに気をもませわづらいでも出よふかと)どぶかしなよくするがよい「(十
五ウ)

人目しのんで恋ぢの関を「梅川」(それはつれしづいびんせつさりながらわ
たしがとゝさんかゝさんは京の六条のじゆずやまち)こへてたふげの又くる
う

心がらからうは気なぬしに「おかさき」(ア、コレ申もふなんにももふしま
せぬ顔は見ねどもいひなづけのおとこもつのがうるさゝにやしきをもどつた
そのときからあまになる気だけさ衣けふいちにちに気がかはりそめちがふた
るかね付のものしらは「(十六才)とすみぞめに染なをしてもはがしても
おもひそめたるほんなうの)わたしでわたしの気がしれぬ

のぼりつめたる二かいのはし「(てらこや)あすのよたれかそへちせんら
むつめ見るおやこゝろつるぎと死出のやまこゑてあさきゆめみしこゝちし

て)いまさらめがさめあきらめた

鷹にとらるゝことゝはしらず「廿四孝」(こんなどのことそひふしの身はひ
めこぜのくはほうぞと)いぬぼねおつたが口おしい「(十六ウ)

やぶれかぶれと身は三味せん「あだち」(おねがひ申奉るいまのつき身の
はづかしき父つゝやはゝさまのお気にそむきしむくひにて二世のつゆにもひ
きわかれなきつぶしたるめなしどり)くろつするはづ親のばち

常磐津の部

親けうだいにも見かへたからは「かつら川」(はづかしい事いはしふる
のちぎりもあだまくら)もつどふなつてもきれはせぬ「(十七才)

いふたひとことほぐにはならぬ「おかめ」(きくにおかめめはなみだぐみそ
りやおまへなにをいはしやんすしうげんをしたといふばかりでそれなりにあ
のさはきこゝろのしれぬわたしゆゑ)ほかにしあんをかしのかへ

ずつとさし込その手をおさへ「せきの戸」(おかほを見るよりぞつとして身
にこたへ後生ほたいもどこへやらすてゝ二人がひとつ夜着まくらならべてね
たれども)此ひる日中ばからしい「(十七ウ)

花をねぐらにひと夜のゑにし「三ツつる」(そもやうきねのはじめより身
のうへしらず気もしらずうは気どうしのなかかいな)朝はとりさへなみだあ
め

夜の明ぬ国もあるふにはてせはしない「一ノ谷」(せめて名残に御顔をひと
目見せてと云こへも)なさけしらずの明からす

夫婦けんくはわ其夜のうちに「うとぶ」(なにつたかひのそのよふなさゝに
よふてのそらことと)「(十八才)うつてかわつた泣ねいり

はら立まぎれに寝たふりすれば「うとぶ」(さすがいはきにあらざればすて
もおかれずたちどまり)「コレ風をひくなとゆりおこす

じつにしあんのほかとは是か「三つのあさ」(きやくにせぬよのつれしさを
うかぬかほしてかくしつまなぶられたさのものすきはきはづかしいしやない

かない)まよふわが気のきかしれぬ

じれつたいほどおもはせぶりな(いなかもじやと思ふて)(十八ウ)から
にあんまりなぶつてくれめすなりたいそさまのやうな美男おとこのくせとし
ておなごたらしのすてことば(こちも木竹じやないわいな

袖からおちたる文とりあげて「せきの戸」(これ此やつにはじめからきせつ
せいしをと리카はしふかいおかたがありながらかくしておいて又わしに)い
るよいへんじもあきれるよ

あふてうれしくわかれのつらさ「しのぶつり」(にせのかためとだきしめて
つい手まくらの)(十九才)そゝげがみ(あゝもじれつたい明のかね

富本の部

しらぬよめにわらはゝわらへ「かみぢ」(ぐちなおなごにみれんな男よく
あいばれのじつくらべよいはひぞりて夜中のくせつないてしのぎのかうがい
もおれてわかれのきぬぎぬに(ぬしと朝寝がして見たい

秋のあふぎと身はすてられて「小まち」(うらみながらもいとしさ)(十九
ウ)をふかくさのはなすゝきつゆもおきいにわすられずこれまでまいりさむ
らぶぞや(つらい恋ぢにくるふする

ほんにおもへば二人が中は「おきく」(そのみづくきのふでののはのちげおし
からぬこゝろのたけをかきくもりあとやさきなるふみのあや(きるにきられ
ぬ身をつまり

すぐるたもとを又ふりはらい「タきり」(さりとてはかみこざはりがあら
いあらひげばやぶるゝつかめばあとにしはすめつに「二十才)ん(かはり
はてたる人こゝろ

とふあきらめてもあきらめられぬ「三かつ」(あけくおもふていまするとき
いてとびたつうれしさに手をあはすればそのてをと(むりなねがひも恋の
よく

秋の夜風が身にしみじみと「若木うり」(いろをねがひのはなすすきまねけ

ばそれとおもひぐさ草かりふへにあらねどもきみがいるねにさそはれて(す
彖にまつむしねもほそく)(二十ウ)

義理にからまれ別ちやいれど(かはすことのはむつましくありしそいねのい
もせがはうき世をわたる花いかだはなればなれになるとも(す彖はひとつ
になるわいな

たまにあふ夜の其嬉しさは「小紫」(ほんにしみじみうちあけていへはまた
やしきそだちのこのやばにまだやへ梅のかゝのこり(そでにあまりしはつか
しさ

高いおかたにほれまいものよ「廿一才」(かわるまいぞやはらじとおふせ
うれしくいらへさへ(ごめんあそばせむぢまくら

なれぬ世帯にたかひのやつれ「おちよ」(目もとしほよるちりめんふた彖
まはりのかゝへおび(まだしちぐさかあるわいな

いけんいふのはおまへのやばよ「おきく」(まことをはゝ此さちはおやの
まゝにもならぬがならひ(義理もせけんもいるものか)(廿一ウ)

清元

にくらしいほどなぜ此ように「明からす」(あふた初手からかはいさが身に
しみじみとほれぬいて(こゝろで心がくちになる

夜の明ぬくにあるならふたりですんで「おちうど」(おもひなをしておや
さと彖つれてふうぶが身をしのび(つもる思ひをはらしたい

さとられまいとて気がねをすれば「廿二才」(落人)(とこやらしれるひと
めをばかくせどいろか梅がはなちりてもあと花のなか(ぬしをあんじてし
やくのたね

せまいせたいにくつ付合て「きせん」(わたしやおま彖のまんどころいつか
くはほうもいちもりとほめられたさの身のねがひ(二人なかよいおひなさま
泣て心でこかれてゐるに「おはや」(うわきうづへす梅をはすてゝとなりあ

るきのされことに「廿二ウ」(実のないのもほとかある

なぜか四五日たよりもないは「ごん八」(あひた見たさはとびたつばかりかこのとりかやうらめしや)氣にもかゝるよからすなき

金がものいふうき世のならひ「明がらす」(きのふのはなはけふのゆめいまはわが身につまされて)ばかにされるが口おしい

まづしかなければまこともしれず「落人」(やほないなかのくらしにははたもおり候ちんしこと)「廿三才」(いまはたがひのじつくらへ

かうなるからにはわたしも芸者「小ぎく」(しかもそのとき此うちでぬしに始めてあいの手も)ひくにひかれぬ事(ママ)ある

むすんだゑにしがどふとかれうぞ「お半」(みんな女子はいつせうに男といふはたゝひとり)うきなたつのもいとやせぬ

たとへ三年あはねばとても「二人奴」(たかひにむねをうちあけて氣もあひほれのすいたどし)すへはめうとなるわいな「廿三才」

長唄

青柳のかげにみだるゝこのあらひがみ「紋二郎」(いつかうれしきあふせもときみにやたれかつげのくし)はやくゆひたい丸まけに

むりな願ひのしほだち茶だち「小原女」(こひにはやせのさとそたちのきのすだれのゆかしさはたまだれかみをとりあげて)やせが目にたつむねの癩

(廿四才)

わすれるじふんに姿をみせて「あづま八景」(はるかあなたのほとゝぎす)きてはまよはずつみつくり

恋にこがるゝわたしのこゝろ「さぎむすめ」(ゑんをむすぶのかみさんととりあげられしうれしさも)おもふ事わけくへでぬ

心がらよりやみぢまよひ「もゝよ車」(もゝ夜かよへどゆぶづきのかさにふるゆきつもるゆき)恋のおもにをなく千鳥「廿四才」

驚のかたことまじりをあねきかしやんせ「あはしま」(きみははるさめつめのはなかほりゆかきねやの戸に)ゆかしいねいろじやないかいな

あめのふる夜は寝てからさきの「老まつ」(いとしかはいわみんな男はいつはりじやもの)まつとしらぬかほとゝぎす

なにもしらないわたしへぬしか「花くるま」(しのぶの山のしたもみぢうすいはいやよこひごろもむすぶゑにしは)「廿五才」(かみさんの)おしへさんしたさゞめごと

人のそしりも何はゞかるふ「とも奴」(とけてねた夜はゆるさんせア、またのうきながどふなると)かたときあはずにゐられふか

口から出まかせ氣やすめばかり「おかね」(こよひかたゝにおいそのもりとへんじしがらきまたせておいて)用があつたもよくできた

あはづにこがるゝ矢ばせの舟よ「ふぢ娘」(かたいちかひの名山に)「廿五

ウ(身はうつせみのからさきやまつ夜をよそにひらのゆき)わたしやかた田のかたおもい

露のなさにこちやぬれそめて「諷まつ風」(月のくぜつかほたるのりんきもつれもつれてとけかねる)みたれごゝろのもの思ひ

新内

やつれさんしたおまへの姿「だきがしは」(いんぐはなものになれそめておもはぬくろ)「廿六才」(くるしみを)みんなわたしがつみのもと

かんがへりやかんがへるほどせけんへたぬし「わかれじも」(ふつゝりおもひきろふそとたしなんで見てもなさけなや)義理も人めもむぢやになる

ひとこえはそれがあらぬかすがたは見えず「ふぢかつら」(なつの夜の蚊やりのあとのうたゝねにさしきさしきもじづまりて)おほろつき夜のほとゝぎす

ぬしと二人で世たいをもてば「廿六才」(尾上いだ八)「手づからわたしがまゝたいてうちのものよこちの人あすはどふしてこふしてと)どんなくるふ

もいとやせぬ

かうなるからにはとうなるものか「同」(まつこちへおじやと床の中しばし

ものをもいはざりしが(「口」首にのしをばつけておへ

うは気はおとこのつねじやといふて「日高川」(それほどいやなみづからを
女房にもとぶとなせいやつた)「それじやあんまりふ人じやう」(廿七才)

実もまこともつくしたはては「だきがしは」(それはぬこの手を思ひきりい
つしよにしんであの世にてながうそふのがたのしみぞや)「無分別なるくさの
つゆあだなくぜつをわらはゝわらへ」(「らんでぶ」)「まアしたにおいんなんし
アゝいたいわへエゝこのきちげへめさあこぶとつさりとすはつたがさいこの
すけ」(ママ)

あすか川ふちが瀬となるつき世の中に「タギリ」(そのぬしはかはらねどか
はつたは「廿七ウ」)「おれが身のうへ」(たづねてくれる人もない

茶だちするの目人目をしのび「花の井」(すへのゑにしをまつち山せうでん
さまにぐはんかけて)「そふて見たさの神だのみ

とくとしりつゝあはれぬつらさ「きくノ井」(ふるいなじみとならしばのも
ゆる思ひをひやぎけに)「しばしわするゝうさはらし

一中

わかるるがたがひの為じやとせうちはしても「廿八才」(「小はる」)「しよせ
んこの世はかりはげの恋につき身をなげしまだ」(いけんいはれりや直つもの
人の悪口何いとおうぞ「小まち」)「きみゆへならば此いのちなにかおしまん
おしどりの」(つがひはなれずくらしい

やばないけんがきかれるものか「よし原八景」(にほのうきねの身ながらも
あだにあはづのせいらんとこゝろでとめしぬつとけに)「かよい出してはやめ
られぬ」(廿八ウ)

義理にからまれそはれぬならば「黒かみ」(「しよせんこの世はかりわけの恋
につき身をなげしまだかくこきはめしこゝろをばぬしになにとぞつげのく
し」)「はやくあの世であらせたい

こゝはどどこだとかこやさんにきけば「よし原八けい」(「つつほんいちの大門

口」)はるかに見ゆるは秋葉さんの常どつめう

まぶもなければつとめもできず「けいせい」(夜ごとにくもるとつろつきの
へぬはしんきともし火」(廿九才)「をけしてねときおひひもを」(むすぶゑに
しのうらざしき

にかいせかれてかなしさつらさ「よし原八けい」(「ふけて青田にこかるゝほ
たるれんじまできてかやのそと」)「なんでこんなにまよひした

まづしいくらしを何いとおうぞ「あさま」(千も二千もさん千もせかいにひ
とりのおとこじやとたのしむ中のわかみどり)「二人が中さへよけりやよい

しれつたいこへはすれどもせうしの内で「廿九ウ」(「ゑのしま」)「すかたは
見せずほとゝぎすおもはせぶりはたれやらがこひのこゝろをうつせがい」(門
にあるのをしらせたい

のかずは出世のおじやまになるふ「同」(おもはせぶりはたれやらが恋の心
をうつせ貝)「からかいづらもほとにおし

ちわがつのりてくぜつの果は「吉原八けい」(あらしははれてひとしぐれぬ
れてあふ夜はねてからさきの)「まつにかひなき明がらす」(三十才)

歌沢

ゆふべのこん夜でさぞつらからふ「けさの雨」(あれねなんすかおきなん
し)「さほどねむけりやこぬがよい

たまたまあふのに気つよいしうち「くぜつ」(くぜつしておもはせぶりなそ
らねいり)「ほれたよはみでちらされる

青柳の風のまにまにふかれてゐれど「恋すてぶ」(なみのよるよるいさり火
のもゆる思ひのくるしさにきゆるいのちと)「三十ウ」(さつさんせよをうち
がはのあじる木や)「みづにくらすがもの思ひ

世間でもほめていられる身を持たながら「ほんに思へば」(ひとのそしりも世
のぎりもおもはぬこひのみつせがは)「摩でもさしたか此しまつ

ちよいとしたことのはつみで切てはみたが「ゆきとも」(屏風をこひのなか

だちにてうとちどりのみつぶとんもと木にかへるねぐらどり(三十一才)まさるうら木があるものか

むりな縁じやとしりつゝほれて「あは雪」(つき名をいとふ恋のなかみたれしまゝのびんつきや義理といふ字はせひもなく)気からもとめてくるうつする思ふやうにはならぬがつき世「花になく」(おもひはおなじあいたいのくものまぎのいさりふねながれしだいはいかせしだい)えんとじせつをまつがよい

気やすめとむねに思へどうれいことば(三十一才)「ひとこと」(わすられうものかわすられぬうそにもいふたをじつにして)はやくもちたいあらざたい

はらを立たりたゝせてみたり「みじか夜」(のこるくぜつのあさなをしむかひのちよきはすてをふねそのまゝけふもみつゝけとたがひにつのる恋のじやう)ほんにたのしい気まゝ酒

からかひにはらも立ぬにおこつて見せて「玉川」(つもるくぜつのそのうちにとけししたたのもつ)(三十一才)れがみ)なかせてそれから中なをり心がらよりつき川竹の「身はひとつ」(ながれによどむうたかたのとけてむすぶのかりまくら)男ゆへならせひがない

はうたは古くよりつたはりし文句多くまた近年の新うたといへどもつたえきくのあやまりにて義理をなさぬもん句ありけるをこゝろづかて唄ふもの多かりさてはこゑうつくしくふしたへなりとも身かた(三十一才)言をのぶるをもて聞くるしく心ある人にはわらわるべし就中「身はひとつ」「二」きみにあふ夜のかちまくら「云々是誤也此唄はむかし大川の三ツまたに茶屋など繁昌して在ける時に作りたる唄にてもとは文句長かりしを近年闕文してふし付まてなをしたれどその人文章のまなびなき人ゆゑにいまのごとくわからぬ唄にせりけるかゆへに即改て「とけてむすぶのかりまくら」トせり夫「うた

かた「トは水の(一字分空白)のことなりされは(一字分空白)とけるといふにかけてこゝろ」(三十三才)とくるとし「こゝろのとくるより深きゑにしを「むすぶ」トいふより むすぶとし「かり枕」はその座のころび寝なりさて「むすぶ」トいふことはこれ則末の文句「雲のおび」トいふへかけたる文字なり文章の法あらまし斯のごとし又「わが春の」に「おきごたつ」トいふは誤なり沖の石といふべし是まつ身はつらくなみだに袖もかはかぬトいふ意なり人こそしらねかわく問もなしといふ古歌ヨリ出たる文句なり此外にあやまりを改正したる文句いと(三十三才)多かり予が手集の哇本(はうたぼん)を閲してしるべきのみをさはれ近日哇改正の一書を著して蒙昧のまどひをさまし且他流のわらひを防ぐべし世の人わが流儀中に人なしとなさし給ひぞ

端唄人之もんに嗣周みてとゝ逸中へ私言をしるす

編者 能六齋(三十四才)

雑

人まへは理くつがましくならへて置てかげじやいつしかなかなほり死なは死ねよと氣づよくいへどもしやとあんじる胸の内ふつふついやだと口てはいへどじつはみれんて切られぬ右三章はみれんなる夫婦中を評せり

びんのほつれは勤じやほどに目かど立ずとかんにんしやんせよせばよかつたついたことていまさらくやしい此しだい(三十四才)じれつてへこだはつきりいひな夢にしるとかそりやならぬ今さらみれんが何あるものかこつちに見かへたものがあるいやになりんと此せつ句まへちりんとたのめどかただより

ます花のねたましく且うからのためト藻にすむ虫のわれから望みてまだ若くさの折に結びそめにし夫何がしにわかるゝとき

孝をたつれば人情がすたる」(三十五才)「こゝろふたつに身はひとつ
又

つまに別れし后(のち)いくほどもなく老たる母もみをくり果つされば生が
いを寂静(じやくぢよう)にをくらはやと思ひしかど夏むしのひとり淋しい
世をふるはさすがにて玉くしげふたり寝の床のつらめしきまゝに小夜衣をな
ん二重衣とはなしつ

さそふ水あらばいなんと悔やんだとても色香がちつてはかひがない」(三十
五ウ)

又

楽天のからうたに一生の苦楽他人による

意地のない見さげた女といふかもしらず「タきり」(よくもなければ身が
たゝぬ)犬になるとも大どころ

かゝるされ言を口すさめるも年久しく先夫がつくえのほとりにはべればなり
かの勸学院のすゝめ蒙求をさへづるたくひならまし

歌沢小てふ事

今は大何がしの妻 するす」(三十六才)

いまだたらちねのもとに在ける頃ひそかにある人へおくる

わたしや年わかまだ親がゝりおもふお前は女房もち

芝新ばし

唄女小とく

とし頃になりてやしなはれし人のまがつみにかゝりければ見過すべうもあら
で仇し花は咲しつれどもこゝろのじみをなん楽(たの)し侍る

はやく染たいわたしのねがひいつまでしら齒で置のたへ」(三十六ウ)

下谷すきや町

唄女たい

こは何ひとの懐にして在けんひとひらの紙に書ちらしてありけるをさきつと

し浅草のちまたにてひらひければそのゝちさまさまの手集中に抄出したるを
またこゝにもしるし侍るはおのれがこゝろにゆかりのあればなり見る人ゆる
したまひねかし

編者 能六齋

名前のごとくしるす」(三十七才)

字あまり

いるができた。あのまアとしてそれはマアめつそふも。ないいまどきの娘
こどもはゆだんがならぬじや。マアないかいな

けふは末よふか。あはねばならぬはなしがあるにマア。じれつたい身はかご
の鳥ア、ものめなさけでもしかくのだ

おかしくもありわらはれもせずそれはマアなんであるふともらいのてうちん
もちが屁をひつたのではマないかいな

わたしがこゝろは辻うらないでしんそん亥の卦にあたつて」(三十七ウ)ま
ぬけな性でとにはけんこん狐でのみあひいつでもむゑきなことばかり

雪は白うて十五日のおほさまはまアるいありよ見てぎねんをしらしやんせ」

(三十八才)

内じやはなせず出合にやゆけず親のある身のじれつたさ

あどけないのがかわゆひけれどしよしんすきるもじれつたい

かうなるからにはどふなるものかいつそつれ出し旅かせぎ

あゝもしれつたい何をしてみても女房とかせぐよふな事はない

あの人のためにならぬとしつてはいれどどふもよされぬ恋のよく

二日あはねばとりこしぐるふ風のくさゝも気にかゝる

人にいけんもしかねぬぬしが人にいはれる此しまつ」(二十八ウ)

さむい夜風に身をすりよせてうれしなきにかなく千鳥

もともとうは気でかうなりながらうはきするなも能できた

ほれてゐるのをしつてはあれどお気のどくだがおことわり

よそふと思へと又かほ見ればどふもみれんで立かへる
だいてねまつに嬉しい春のたからふねこぐ初まくら

鬼に女房がなられちやこわいいろはしないとおきらめた
つき草のところ定めぬうわ気なおまへどふもこゝろがわからない」(三十九
才)

なまじ声をばきかせておめておもはせぶりだよほとゝきす

かみはきつても二世までかけた深い糸にしをきるものか
色になる身のゆかたもぬいすはだじばんの夏の富士
いちにちどころかたゝ半時も顔を見なけりや気がふさぐ

なまじなま中いづもの神のむすびはなしがなさけない
こんな歎もおもへばほんに結ぶの神がうらめしい

ほれてくれずはなま中こんな気がねくろうはせまいもの

まゆは三日月はだえは雪て」(三十九ウ) たのみすくない花どころ
しらつゆやむふんべつでも草葉がたより恋のうき身のおきどころ

巻紙のへるに付てもわが身を思ふはやくねんきをあけくれに

ありと見て手にもとられぬあのかげろふはぬしのこゝろとおなじ事

芦とかりねのひとよさなりと逢てはなしがしてみたい

草の葉のつゆはわたしがなみだのしづくそれにおまへは秋のそら」(四十
才)

末はとげぬといはれた事もあればひと花さかせたい

朝の蚤とるねまきのすがた久めの仙人死ぬだるふ

なべにみゝあり徳利が口よちよくとはなしもできはせぬ

ないてゐるのを面白そうにはたで見えてゐるかこのむし

恋のしよわけもしらはの娘思ひありげな手まり唄

梅の匂ひをさくらにこめてしだれ柳に咲せたい

忍びごまかけてくどいてできたるおまへばちてもあたらにヤ切はせぬ」(四

十ウ)

あのふみを見たなら早く気をもませずと」しん内」顔なぞ見せたがよいわ
いな」(ことは」(コウてめへのこつちやアな」(長うた」(きをもみぢがさし
かはりのとのごにみさをたてかさもあいあいがさのすへかけて」(そはぎやま
まい此くろウ)

やつれすがたを見るたびごとに」清元」(なみだでもんでそりおとすむかふ
かゝみに小むらさき」(新内」(うつせばうつる顔とかほ」(四十一才) わた
しゆへじやとくやみ泣

はでに見せてもこゝろはじみよ」(富本」(いやなきやくにもひよく」(さおも
ふおこのやまどりの」(清元」(やばないなかのくらしにははたもおり候ち
んじごと」(うた沢」(ほそたにかはでぬのさらし」(やがてくがひをあらひは
り

たまにきたのにもうねるのかえ」(うた沢」(ふけてひとこゑなく」(四十一
ウ) (ほとゝぎすアレきかしやんせ是もうし」(しん内」(ゆふべはさぞおたの
しみそりやそのはつさ」(一中」(たのしむなかのふかみとり」(こゝろしらす
かじれつたい

旅は道づれ袖ふりあふも」(うた沢」(のぼり下りのおつゝら馬よさてもみ
となたづなぞめかよナアエまごしゆのくせかたかこゑで」(まご唄」(おまへ
さんとならばとこまでもヨヨゝ引」(四十二才) (ことは」(ヤイうぬどふし
やアがつたおんな馬ベイみやアかるとまめベイねいやアがつてはらでこのウ
つゝばりやかるあるきやアがれドウドウ」(おつなはづみの草まくら

さみだれのある夜ひそかにかうしのさきで見ればうれしい月のかほ
船のめいもいつとけそめておまへしだいのながれの身
わたしや春のに芽さしのわかかなあをいあをいと人がいふ」(四十二ウ)

かうすりやかうしてかうなることとしりつゝかうしてかうなつた

ころんだときいておうやがとはいへど其くせ寝てゐてしたそふだ
まへがみかきかきア、じれつたい空にしられぬふけの雪

そはぎ死ぬるとはじめにヤいつてのちにヤわかれてかさねづま
三年男をたつたといへば寝てすることにはかまやせぬ
つたふなみだにまくらのかみがぬれて二人がまたぬれる

ないてまつ夜にふけゆくかねは明のとりより猶つらい」(四十三才)
たはむれと思ひなからもつい手まくらにぬしのこゝろを見たれがみ
朝がほの花のやうなるおまへの気まへ日ごとひごとに気がかわる
いろをしようときと大きにおせはせけんしうとがやかましい

気にもかゝるよさくらの花の風にちるとはなさけない
柳々で世をおもしろう受てくらす身がくすり

朝顔のからみ付竹引くくはなされて花がうつむきや露がちる」(四十三才)
どふもじれつたいかほ見ぬうちは用もなんだか手につかぬ

風もふかぬにみの毛がうごくのつべらぼうのおばけがきはせぬか
色かへぬ松のみさほのしんぼうするも雪のふらずはしれもせじ

おなじながれにさて住ながら鷺はあねむる鶉はあさる
あめはふり出す家根の薪はぬれるせなかのがきはなくわしやこげる
やばないけんをいひたかないが是もとしゆへせひがない

かんくりちがひでおまへをうらみいまじやめんぼくないわいな」(四十四
才)

あかい切(きれ)かけしまだのうちはなぜかこゝろも定まらぬ
はたらきかなけりやいきでもいゝ男てもいまのむすめははなつまみ
いろけよりくいけとよくばるいやしいじんき名をとるふよりとくをとれ
佐用姫のまことなくともお染かお半ないしおきぬの実意ほど

端唄部類二編と逸の部了」(四十四才)

(広告)

能六齋先生集

哇部類 三編

此集は戊午年間以来の新唄并にケレンの唄且大津絵其外三下り二上りのさは
ぎ唄ならびに新文句入のかへ唄等数百章載たり

同 四編五編 近刻

此集は初編二編に誤の俣載たる文句を改正して再出シ且新唄を加へたり
人形町通り松嶋丁

伊勢屋庄之助板」(裏見返し)

二、『端唄部類四編』(関西大学図書館蔵本)

関西大学蔵本(H91.93 / U3 / 24a)によつて翻刻する。

端唄部類 四編」(表紙)

都々逸之部

松延文庫」(見返し)

みち奥の十布の管菰七重に美(み)えを。つくるとし増のはでもやう。小町
の姿しばしとて。心すみだの花見の三弦(しやみ)は。波にさかれたうかれ
ぶし。いきな二上りさん谷堀後すがたを見めぐりの。神に誓ひの羽重子(ひ
よく)連。そしらぬふりの雨のあし。たがしら髭やいほ崎の。森の下露そで
ぬれて。桜は花の薄緑。葉柴けちかき渡し守。いざこととはん武士の。世に
いさましき都鳥。恋しき中のひと思案。まじめ鳥の三つひとつ。友を待ちの
山のはに。返る小船や家根船の。中に勝れた水調子は。どんどんいつの何誰
(どいつ)が声かと

花のもとにて 露光誌」(一才)

いの部 乾为天

いろの初わけをしらない意けん通ひだしてはやめられぬ
入相をかねて待身は軒ばの蜘蛛の糸のもつれも気にかゝる

いつそりん気のつのもはやし突てやりたい人がある

いろのいの字をふたりでおぼへ「清元おそめ」(なにやらそうへかいたのをそなたに見せてとふたれば恋といふ字といふたのをむすびはじめのこの「じやと」思ふ間もなくけふかぎり

いろけづいたよアノほうづきも人めなければちぎられる」(一ウ)

いつの間にやらアノかきつばたひらきそめたるうつくしさ

いろになれとはそりやうそらしい「ときはづ」(いつたいそさまの風俗ははなにもまさるなりかたちからのまゆずみ青ふしてまたとあるまいおすがたで)じつにまことゝおもはれぬ

いつかいつかと人目をかねて思ふばかりもこ半とし

いわにせかれてながるゝ水も末にやまとまる滝つ川

いへばどぶやらさいそくらしいはねばかへさぬかした金

医者様が小首かたげて二にさじ投てやつれ姿を見るつらさ」(二オ)

今ぢやひかれぬ六日のあやめのほりつめたる恋の意地

色の世かいをさらりと捨てこれから夫婦でともかせぎ

ろの部 天風 (かう)

ろんはないぞへほれたがまけよどんなむりでもいわしやんせ

ろくに咄しも聞ないうちにかうとさとるも恋のちえ

ろうかづたひに人めのせきをあげてあふ夜はほつといき

はの部 天山遯

春の浮気についさそはれてさくや深山のおそざくら

花を見すてゝアレかへるかり」(二ウ) 余所へ仇ばなさかす気が

花の色のついさめはてゝあだな浮名がちりのこる

はたでどの様に笑をとまゝよ「清元山かへり」(おやがしかるがせつかん

しやうがほれたとのさがすてらりよか「常はづつづぼ」(おく山のさいかちばらのなかまでもおまゑとならばどこまでも)そふて見かへす人の顔

はなしごゑさへかすかになりて更(ふけ)行聞のきりきりす

花はさくらと誰しもいへどぬしにます花外にない

花をかざりて化粧はすれどみさほの鏡はくもりやせぬ」(三オ)

はやく苦界をめで度かしくかへすがへすのないやふに

春のよめなの摘のこされて秋は野菊の花ざかり

はれて逢れぬ二人がうき身「うばたま」(にかいせかれてしのびあふ)っ

らい恋路も心がら

花はもたねど山椒を見やれまことありやこそ身を結ぶ

這ば立たてば歩行(あゆめ)と養(そだて)る親をすてゝおまゑにじやう

たてる

はつ音鳴せたおまゑをすてゝ「常はづしづか」(見わたせばよものこずへ

もほころびて梅がゑうたふ驚の)なんどとまるうもとのえだ」(三ウ)

はれてあふ夜はあすあることゝ思ふ間もなき仇ざくら

にの部 天地否

にげた藪蚊のアレにくらしひ打にうたれぬアノ寝顔

庭の小松に我身のこゝるとけて嬉しきはるの雪

にくいしまつとふつふつすれとあへばかわゆくなくなるいんぐわ

女房もちとは知てのことよほれるにかげんがなるものか

にても似つかぬ縁ならよしなかもとあひるは直(ね)かちがふ

にせとちかひしふたりが縁のきれた夢見てしやくとなる」(四オ)

にこる心をつわべへ出さずぐつとすました手とりもの

女房の角は陰莖で折れもしやうがに朱でゆふへは床のばん

ほの部 天沢履

ほれちやあれとも言だしにくいどふか先からいへばよい

ほつとひといき一ぶくおくれさしてはづかし蚊屋の月

ほれてわたしがほめるじやないが「清元おちうと」(こんな氣にしごとりのおしのつがひのたのしみに)なぶられたいのが身のねがひ

ぼた餅のくせにきなこをこてこてつけて併(しか)も能見りや獅子ッぱな」(四ウ)

ほぐにする氣のせい紙じやないがやぶれかぶれも恋の意地

程もきりやうも勝れたおまゑ外に穴でもなけりやよい

ほどでたらして手くだでもんで「とみ本長せい」(あだといるとは恋むらさきのつゞやはたちはいろざかり)いろは楊枝のかけながし

ほれたお方にまたほれられてこんな嬉しい事はない

ほれた性根を見すかされてかやみとよわみへつけこまれ

ほんに間のよい今宵の首尾と「???いり」(ゆびでちよいついで目でしらせ)はれちや逢れぬ恋のやみ」(五オ)

程もよければ男もよくてそれで金もち女房もち

星のあふ夜も鵜わたしなぜにわたしにそれがな

ほしのかつほど男はあるに月と見るのはぬしばかり

ほれて通へば田まちの犬がないてわたしに氣をもたす

ほつとため息嬉しやゆめと覺た目で見るぬしの顔

への部 天雷无妄

へいぜいわたしが意見もしたがわかれのつらさに今のしぎ

屁の様な願ひとわらはゞ笑へおさつで喰しやうがして見たい」(五ウ)

平家の一門みなかとなるわたしやりん氣で鬼となる

嘔(へど)の様な面(つら)してくそどきやう女けさもおへやで屁をたれた

へりもふまないこい茶の中でふくささばきのくろうつする

との部 天水訟

遠くはなれてくらすも浮世まゝになるまで待しやんせ

どぶあきらめても今宵の雪はぬしの来られぬ知らせか

遠山の花と詠(ながめ)てへだてゝぬれど風のたよりも氣がもめる
泥水と何かきたなく言んすけれどきよき心は秋の月」(六オ)

とうざからせてしんぼつさせて末にやひとつになる覚悟

遠くはなれてゐる悲しさに浮氣をされてもせひがない

泥にや咲ても江戸むらさきはいろにやねづよいかきつぱた

とぶざからせてしんぼつさせてためて一度にたんとゝる

どぶで若いときや二度とはねへに其氣でやらかす此うわ氣

鳥の鳴まで口舌はしてもわかれともない雪の朝

鳥が鳴てももしやと出てこぼす葉末の露の玉

どてらかゝへて質屋のうちへ」(六ウ)「詞」(コウばんとうさんちよつと二朱かしてくん「ナニこれはそうはつきません」ヤアサむりでもどぶぞかしてくんねへ「マアおまちなさい」清元おそめ」(ばんとうはじつと品を見て「アレまたあんなむりいふてこんなどてらは二朱やつかぬ詞どうあつても

か「そでよりわきが切てゐるひどい物を持てきておまゑの心はそうしたもの

か)どこも焼穴こげだらけ

遠ざかるかやそれ女郎花はてはわたしを秋の風

とてもそはれぬ事とはしれど「清元あけがらす」(どぶしたゑんでかのひ

とに)しみみほれたが身のいんぐわ

時とじせつと世のことわざに雨となる日も風となる」(七オ)

ちの部 天下同人

ちわがこうじてけんくわで返し跡であんじる今朝の雪

ちればこそいとゞ桜はめでたい物とさとりながらもつらき雨

ちよつとごらんよアノおし鳥がこれ見よがしの夫婦づれ

千代をむすびしアノしめかざりともにしらがの松の雪

千代をむすびしアノしめかざりともにしらがの松の雪

千代をむすびしアノしめかざりともにしらがの松の雪

ぢれてかへるをはしごでとめて雪がとりもつ中なをり

茶にする心はさらさらながぬしは茶にする雪の水

ぢれたふりして見返りやなぎ花が袖ひくゑもん坂」(七ウ)

ちよいとお待よ着物をおくれ屏風のから子が見るわいな

ちわも口ぜつもモヲいひつくしんの咄しに夜が明る

ちよいと吸つけすいがらはたきこんなに詰つたふたりの身

ちからづくでもいかなぬしをのせてひかせるくちぐるま

りの部 兎為沢

りくつづくめに意見をしても曲りかゝつた恋の意地

りんきぶかいかやきもちなのか「とみ本松風」(ことばとかめやむなづく

し鳥がうたへはわかれがいやではなれともない中直り) ほれりや誰しもくち

が出る」(八オ)

りん気らしいが言はねばならぬぶたれるは覚悟のまへの事

利非はともかく女のじやうでしゞうそはずにおくものか

りはつなりやこそ女のむねでいわの清水て袖ぬらす

りこうなやうでも女はをんなもしやそうかとだまされる

ぬの部 沢水困

ぬしの心は田毎の月よどこへまことがうつるやら

ぬしのなさけで苦になるとしのくれてうれしき花の春

ぬしにりん気の角でもはへりやいつそどうしやう道成寺」(八ウ)

ぬしをかへしてまたねの床のうつゝともなきものあんじ

ぬれて色ます若葉のもみち末にや浮名のたつ田川

ぬしに逢ふ夜はよいひざくらよつもる咄しも山ざくら

ぬしか来たかか雨戸を明りや月か笑ふかゆれる水

ぬしのまことは枯木の花よあてにしないで待てゐる

主は紅葉で気もちりやすいわたしや末まつ色かへぬ

ぬるま湯をぐつとひと口くちからくちへ暑いばんだとほつといき」(九

オ)

ぬしは浮気でアノ吹ながしわたしや正気でのほりつめ

ぬれた事からつい苦にやんでむすめ心の五月雨

ぬしの心をこちや白ぎくよとゝかぬ苦勞をつくり菊

ぬしの心と今戸のけむりかわりやすさよ風しだい

主とわたしはひやうたんなまつたしか鹿嶋で縁むすび

ぬしが船ならわたしが水よ中のよいのも風しだい

るの部 沢地萃

るいは友とて身につまされてのろけばなしに聞上手」(九ウ)

るりやあさぎのさく朝顔も色はかわれどねはひとつ

をの部 沢山咸

をつて見たいと心をこめてきけば主ある山ざくら

おぼる月夜が忍ぶにたより晴て逢れぬ中じやもの

思ふ念力岩をもとふすそはれまいとは氣のよはい

思ひとゞいて夫婦となつてはれて月夜があるきたい

おつなかげんて結んだ中を風がぢやまする糸柳

おとこ啼とてこのマア苦勞」しん内らんでう」(しやうばい事はうわのそ

ら」(十オ)どふか思案はあるまいか

おなじ花でも秋さくはなはじみでまことをたてとふす

おまゑの事ではコレこのやうにてうしはづれに苦勞する

おいしい人の関所をこしてぬしに逢夜はあらし山

沖じやかめとわたしをいふがすみだ川では都どり

おいらんが小首かたげてきせるを杖にとけぬ姿は雪のさぎ

思ひから崎じせつをまつち首尾を待身の流しぶね

お互にしれぬが花よ世間の人にしれたそのときや身をかくす」(十ウ)

およばぬ事とは初手からしれど折て見たさの庭の花
おまゑふねならわたしは水よ中のよひのも風しい
思ふとふりにねがいもかないじつに嬉しい身のくわほう
わの部 沢火革

わたしが花ならおまゑはさくらほんにさくらは仇なくさ
わたしくれたけぬしやしら雪のつもる思ひで苦勞する
我がほれりや他(ひと)も如(かう)かと邪水のぐちてかた時はなる事
もいや

別れのつらさとめては見れどあとであんじるうちの首尾(十一才)
わたしが思ひの十分いちも思ふてくれたら嬉しかる
わたしがねがひを聞てもおくれ(ときはづ)(おまゑとだかれてねるなら
ばおさつや好ないしいしを誰が物したる悪(にく)らしい)恋ゆへらいせも
こらえます

わたしがまことをしらぬかなんぞほかに見当(みあて)のまとはない
わたしが朝からばんまでおしをかぶり(とみ本くらま)(大みそかもく
わんじつもも引がけの旅がぐらわれとかはれる道芝(獅子のまねして世
をわたる

わたしやくれ竹おまゑはすゞめ雨のねぐらが縁となる
わけも内証の目つまを忍び(十一才)あがるはしこのだんまつま
わたしや出ぎらい芝居もいやよじつはじやうぎかはれ着なし
若い男に気をもみちばの後家の浮名がたつた川
わかれわかれと人には見せて水に浮艸根はひとつ

わたしが梅ならぬしやうぐひすよ(うた沢のくるし)(ほうほけきやうの
やくそくもじつにうれしいじやないかいな)枝にをりをり来てとまる
我はゆたかとゆだんはならぬ花にあらしのあるならい
わるいこゝろをさらりとやめて鬼もほとけになるならい(十二才)

かの部 沢風大過

かへらねばうちは不首尾と胸にはしれどとまる心は恋のじやう
如(か)うなるからにはどきやうをすへなかみなり野郎はふりつける
考て見てもわからぬ夜ひる通ふ恋は思案のほかじやもの
かへらしやんせと口ではいへどむねに嬉しきさの雪
かたいわたしを浮気にさせてとうぎの花とはあんまりな
神にちかいてもあいたいゆへに「清元山かへり」(めぐりめぐりておほやま
のせきそんさまの引あはせ)あへばたがひにぐちばかり(十二才)

かつら男に此身をまかせむねを明石のうらずまぬ
風のたよりにまかせて逢ふてうれしなみだの落葉川
かゝ見ぶとんに誠をうつしぬしをちからにうきつとめ
かこの小鳥にほん音をださせ今さら舌をば切れことば
かべに耳ある世の中なればかくしあふせる事はない
かへるつばめにくる雁がねに(とみ本)(ふみのたよりですましても)あ
わぬこゝろのやるせなさ

かこの鳥とはまがきのおしよくわたしや小見せのきりぎりす(十三才)
かむろみどりも時さへ来れば松のくらの八もんじ
顔にやまよはぬ姿にやほれぬとかくさくらの花ははな
寒苦しいてはる花さいて未はみをもつ谷の梅

風に木のはのちらされたのもかきあつめれば籠の中
門の犬にも用あるたとへあいそづかしをせぬがよい
風にもまれてたゞよいながら岸へつくかよあま小船
雁(かり)の文さへもう返されて今はたよりもなしの花(十三才)

よの部 離為火

夜の明ぬ国も有なら二人が住でつもる咄しがして見たい
呼かへす熊が谷(ゑ)桜はいきぢもつよい心によいのはたがしら

宵はまたせてれんじの月のふけてさしこむ胸のしやく
宵の口舌に夜中の手くだ雪もつもるか恋のやま
宵に笑つて朝なくこゝろそれはしんじつほれた情

四方に雲なく朝日はのぼる何を鳴やら驚ふたつ
能(よく)もわるくもおほきにお世話「清元ごん八」(おとこなかせしお
もかげを)「わちきがめがねでほれた人」(十四才)

よそへ引るゝ事ともしらでひとり子の日のぬしをまつ
よくも思はぬ男だけれど人にとられちや腹がたつ

よくよく心でりやうけんしてもきれる心は出ぬわいな
よくなやうだが女子のぐちは「ときわづしんおつま」(かみかみさんへね
がひをこめ一日なりとめうとなつておまへのようにたやゝうんで)川とい
ふ字に寝て見たひ

よくじやなければなる事ならば仇てまじめな人がよい
よるとさはるとおまへのうわさ聞てうれしい胸のうち「(十四才)

このそでとかるゝ帯ともしらでける我身の糸こゝろ
たの部 火山旅

たとゑ咲ても浮気な風に心ちらすな廓(さと)のはな
たもとにすがつて涙をおさへ「うた沢」(男心はむごらしい女心はそうじ
やない)わけをひとときかしやんせ

旅の情にちぎりし恋は星のひと夜の根なし草

玉だれのうちぞ床しきアノ花車めぐり逢ふ日を神だのみ
たとへねんきがますともなんの「しん内からす」(どうしたゑんでかのひ
とに)しみじみほれたが身のいんぐわ「(十五才)

たつはろつそくたゝぬはんきおなじ流れの身じやけれど

たよりない身に便りがで来て「長うた」(あかますゞりのふでずさみこゝ
につらさをしるしけり)もとめましたよひと苦ろつ

たゝく水鶏に松ふく風よふせて妻戸にをとづるゝ
他人の世事にはのられぬものよしんせつごかして舌を出す
宝ぶねして二日のまくら夢の嬉しやみなめざめ

たがひに独り身何はゞかるふはれて女夫(めうと)になるがよい
たがひに思ひがかさなる手先「(十五才)人眼ふせたる哥がるた
たしなんで見ても何わすられう日かづ立ほど思ひだす

れの部 沢雷随

れいのやぼめとおまへのこゝとくぜつするのも恋のよく

れんじがしらめばおへやへ気がねすそにかくるゝ長ろつか

れんぼする身の心のうちは「うた沢」(ひとのそしりも世のぎりも)す
てゝはかなきもぬけ鳥

れん哥はいかいはうたと思ひ引にひかれぬ三味のこま

れんじ明てはまつちの山に心がらすの鳴ばかり「(十六才)

その部 沢天夫

添寝した夜は枕のしたへそつとさしこむ窓の月

傍へ寄る浪引袖がうら月に丸寝がはづかしい

そもやふたりがその馴そめは「常はづおふさ」(ふみでくとかず人たのま
ずこゝろで実をうちつけに)思ひをもふてけふのしゆび

添ふてそわれぬ中でもないが年(ねん)のながいがまち遠い

夫よりして夜明がらすについ起されてあかぬわかれのほとゝぎす

それとさとつて聞みゝたてりやまたも水鶏かゝばかな「(十六才)

添寝した夜の寝巻の帯はとくとかれぬゑんむすび

そのまゝたがひにつひうたゝねの夢が涙のひとしあん

そしてうらみた文までかゝせぬしにせかれた客のたね

添にやそはれず死ぬにはしねずぎりといふ字でないてゑる
そつとのぞひてめつまで知らせばんにおいでとこ手まねぎ

それとさとして小窓を明りや月は葉末のほととぎす

つ の 部 火 風 鼎

つらきうきめにわしやあふみ蚊屋ぬしにつられて夜を明す」(十七才)

月の出ぬ間にそと忍ばんせはれちや逢れぬことがある

月は晴ても明りがたらぬくらいわたしの胸のつち

つもるとは嬉しの森かよ上手(うはて)の雪に船のこたつのさしむかひ

月ははれてもおまゑのこゝろ闇の礫であてはない

月の明りで文をばよめどあはれぬつらさは胸がやみ

つもりつもりしこ宵のくぜつとけて嬉しきけさの雪

つもる思ひをぬしや白雪のとけて常盤の松の色

つきはてらてら窓からさすが」(十七才)どこに住やらかただより

月にむら雲苦界もおなじひと夜のうちにも照くもる

月雪花をば三すじの糸にのせてながめる仇文句

月にむら雲花にはあらし思ふお方は女房もち

露の情の色かにそみていつかあふせをきくばかり

つもる恋路の心をあかしくて嬉しきゆきの肌

露の葉ごとに照りそふ月はどこへまことをうつすやら

月もほのかに雲間をまれて晴てふたゝびぬしのかほ」(十八才)

露にうかれて来る蝶々も風がぢやまする世のならい

月の下行アノむらくもは「ときわづ将門」(おぼるけならぬおぼろぞめ)

よその見る目もかくすだろ

つれてのかんせ深山のをくにふたりくらすをたのしみに

月も入さの山のはがくれ身につまさるゝ鹿の声

つきぬ名ごりにたゝぼうぜんとあとで氣のつくたばこいれ

ね の 部 火 水 未 済

ねがひとゞいてヤレうれしやと思やおまゑのまた浮気

ねぐらさだめぬ蝶鳥さへも」(十八才)花の色香にや引される

ねんの明(あく)日を待ほどならばお部屋でおまへをせかしやせぬ

ねじめさためておへやへすわり年(ねん)のますのもおまへゆゑ

寝てもさめてもおまへの姿恋の情かよ目に見ゆる

ねんの明のをゆび折かぞへほつとひと息目になみだ

念がとゞいてうれしきあふせつもるはなしの跡やさき

寝まきひとつで側はなれずにぬしにもたれてくらしたい

寝てはかんがへをきてはふさぎこんなつまらぬ事はない」(十九才)

な の 部 火 地 晋

ないてぬずともどきやうをすへてなれし廓(くるは)をあとに見て

なくもぢれるもふさぐもおまへ気げん直すもまたおまえ

ないてくれるな涙で家根のもるほどそなたにはまりこみ

なくもぢれるもふさぐもつとめこれが苦界の一チ三三三

ながざなるまい野に住かわづ水に逢ずにぬられうか

なががよいとてゆだんをするな「とみ本おしゆん」(すみとすゞりのこい

なかをたが水さしてぬれぎぬの)とんだあくまがぢやまをする」(十九才)

なみだもろいと山葵にまでもあまく見られる身のひごろ

永い年季をかみ一まいにふうじられたる身のつらさ

ながいねんきを口やくそくでおやもゆるさぬつまさだめ

撫つさすりつ大事にされてうちに寝るときや柏餅

なくになかれぬ今宵のしだら「清元山かへり」(おやがしかるがせつかん

しよが)ほれたお方がよさりやうか

情うる身のアノつぢ君も宿へかへればおかみさん

ないてうれしいゆふべにかわりわらつてせつない此ざしき」(二十才)

なまじ互にあらたまるからおかしく人の目にもつく

内証はできても世間があれば媒人（なかうど）たのんで御こん礼
ないて咄せばつとめとなぶりこれが笑ふてさ（ママ）なざりよか
らの部 火天大有

らくをふりすてわが心から知らぬ他国でくるふする

らちもないこと又いひつものりそれを手にして切（きれ）る気が

楽なくらしものぞみはないがいはなれて友かせぎ」（二十ウ）

楽なやうでもあまたの人の気づまとる身は気がもめる

らちもないことさもぎやう山にないてじれたり笑つたり

むの部 火沢（けい）

むかふかゞみのたばこの煙りちよつと中をば通り雲

結ばれし糸にしの糸ほどふしぎはないよ今はからまる床のうち

むすめ心のたゞひとすじに星へ手向の恋の糸

むかしや馬道今かこの道通ひくるわの恋の道

むすんだ俣なる枯のゝすゝきにくい夜風が身にしみる」（二十一才）

胸に釘打て替つた親への意見ぎりと情はつらいもの

梅のむすめに柳のわかしゆを雛女びなのさくら色

むかふもいやならこつちもいやよてんからむしがすかなんだ

むねに手を置筆取直し「とみ本こいな」（文のたよりですましてもあはず
にゐれば気にかゝり）どうすりやまことがとゞくやら

梅にうぐひす竹にはすゞめわたしやおまへをまつばかり

むらさきやこうこうでおしだしやよいが主によく似て覚（さめ）やすひ

結ばれた胸の思ひもさりとと」（二十一ウ）けて主にあぶぎの風の糸

梅と竹とをならべて植て千代に八千代に花の兄

むりな願ひもわしやかけ糸のぬしをまつりの星今宵

梅にうぐひすぬしにはわたしはなれぬ中じやとあきらめな

梅ぼしの様な親父もその前方は花をさかせしすいはて

うの部 火雷噬（かう）

うは気ものだといはりよと俣よ「清元山がへり」（よつ谷ではじめて逢ふ

た時すいたらしいとおもふたがいんぐわのゑんのいとぐるま）めぐりあふた

もいんぐわどし」（二十二才）

うそもまこともみな覚やすひかわらないのがじつとじつ

うそと知りつゝ気やすめ上手ふいとのります口ぐるま

うちの苦勞や気がねもわすれ世界ちがひの四ツ手かこ

薄き糸にしかひとえの花にとかく来て吹仇あらし

つつし植たる花にもやどをかりにくるわの蝶こてふ

浮名たつみと八まんがねもよそにとめたよ朝しぐれ

浮て花さく水草なれど底の大根（おほね）はきればせぬ

うちじやもてるが遊じやもてぬ」（二十一ウ）女郎（ちやうる）かいをば

やめにした

鶯の声も聞ねば月日もしらぬ深山住居（ずまゐ）もぬしゆゑに

うたぐりぶかひとさげすまるゝもみんなおまへのためばかり

ういたつとめで情はうれど心にかげがねじやうもある

浮名たつみの小窓を明てぬしの来るのを松の風

嬉しがらせつまたおこらせつわざはいまねぐも口がもと

うるさすぎるとあいそがつきるりんきぶかひもほどにしな

嬉しい中にもこわいさんが分（ぶ）ほれたお人に新まくら」（二十三才）

うかれさわぐは千鳥のくせよおしはつがひの浪まくら

うそと知らずに百夜も通ふ穴のないのに気がつかず

うそと知りつゝもしやと思ひまただまさるゝも恋の情

うたにひとふしこ声の小さいおかほ見たさのしやうじし

ゐの部 震為雷
いつかあぶみの山ほととぎす恋にこがれた仲の町

いやなせりふも恋路のやみにまよふたがひのうんの月

いつもかわらぬたがひのしうちいやみつらみも恋のじやう」(二十三ウ)

今はたがひに人目をしのび「清元おちうど」(やばないなかのくらしには

たもおりそるちんしことつねの女子と言はれてもとりみだしたるしんじつ

が)やかてはれたる女夫(めうと)中

いやになりんこお部屋のこゝとひやくもせうちのくそどぎやう

のの部 雷地予

のぼりつめたをしやくりにのつてきれてくやしき風の糸

のろけしやんすなその口ほどは先ぢや思はぬつわきもの

野べに飛かふ蛩しやないが「うた沢はぎきやう」(きみをまつむし夜毎に

すだく)心がらゆへ身をこがす」(二十四オ)

後はたがひにまことゝまこと初手は浮気が小だのしみ

のこりをしさに跡見おくりて月をあいてにひとりごと

軒に巢をくふつばめでさへもしん苦しのいて添とげる

のとへ出るほととうなすおさつたべて見たいか身のねがひ

軒をならべしアノ松かざり松と竹とに木かもめる

おの部 雷水解

おまへいやならつんつんさんせわたしやわたしでじやうたてる

おいものおでんてしうとゝむすめみそをつけたかやつちよるね」(二十四

ウ)

おれも男たくちではいはぬ胸にはだんだん末の事

おつなはりからつかうなつて今じや人にも気がねする

沖のしら帆を待品川であわやかづさのかただより

おつなでうして心のこまのくるつてつないた三の糸

おまへ木性にわたしはかねよきがねするとは知れた事

思ひさだめて切文かけどとかく涙で字がにじむ

思ひきれとは死ねとのなぞか「清元おそめ」(おとこゝろはそつしたも
のか)じやけんもたいていほどがある」(二十五オ)

くの部 雷風恒

くらしいひわけはれたときいてすこしあんどの明りさす

ぐちをいふのもおまへの為よしらずば仏てくらしたい

くるわはなれて素足をたびにはやく世帯がして見たい

雲の絶間をまれ出る月にさへて聞ゆる紙ぎぬた

苦界する身にまことをいはせ」とみ本たゞのふ」(まことあかしのうらみ

なくそしてあかすがじつのじつの)うそはおまゑに先こされ

くもりがちなる心もしらずうわのそらだよ澄)さへ)る月」(二十五ウ)

くろふするがの高根の雪よとけぬ思ひに身をこがす

くるわの桜も見あきてはやく見たいおまゑの寮の菊

くめどへらない汲ねどつきぬ井戸の水性うわ気性

呉竹の欲をはなれて操を守りほかのこの肌しらす

くもに頼んてしばしがあいだ月の光りがかくしたい

くろふするの元よりかくこゝうた沢のほり」(糸とる手はざちんし

と)しても何所(どこ)まで添とげる

くもりがちなるもなかの月ははれて連れぬ辻うらか」(二十六オ)

くろうするのだからだにさわる「清元きせん」(なみたつむねをおしな

で)やるせなみだの茶わんざけ

やの部 雷天大壮

山家そだちと笑はゞわらえ吉野はつせは花どころ

やつれすがたでかうしにもたれ月の面(かほ)見りや思ひ出す

山ほどつもりし思ひのたけを雪のあしたのむかひ酒

ゆうゆうと月が晴ればおまへが曇るなぜに今宵はかうだろ

やばにしていきぢを春の淡雪ならでま夫に解(とく)るではらがたつ

やすいやうだがかんがへ見れば」(二十六ウ) 気がねするだけ高いもの
山吹の色に迷ふて浮名はたてど当ざの花にはみながらぬ
やがて夫婦となるみのゆかた思ひそめたもむりはない

やみの千草に宿かるむしも月にこがれて鳴あかす
やくやもしほに身をこがれつゝぬしをまつをの浦の茶や
やねでさわぐもやかたにのるもどれもにたりのすゞみ船
八重の山吹はではさけど末は実のない事ばかり

やきもちらしいがいねばならぬたとへどの様(よ)にぶたりよとも
(二十七オ)

やよいなかばに粧ひかざり隅田や上のへ花くらへ
やくに立うがさてたつまいがおれもおとこだ末を見る

まの部 雷山小過

まわしびやうぶの鴛どりながめひとり寝るならうちへねる
まゆ毛落したわたしの顔は青葉がくれのおそざくら

待がつらいかまたるゝ身にもつらい吹雪の四ツ手がこ
待がつらいかまたるゝわしがうちの首尾して出るつらさ

まこと明すにうたぐりぶかひ「常はづげん太」(まくらのしたへやる手さ
へ」(二十七ウ) つとめにはなればからしひ(これでもうたがひしやんすの
か

松の太夫(たいふ)といはるゝ身でもとはかむるのみどりから

まゝになる様でならないからはいづもでもめでできたのか

まゆ毛落してざしきを引てきげんとるのもぬしばかり

俛になる様でならぬがうき世笠来てくらしな人こゝろ

廻しびやうぶのたおれた縁で「うた沢」(ふつと見かはすかほと顔)とな
りどふしのおちかづき

まゆ毛かくした雁がねびたひアレサかへ名をよびなんし」(二十八オ)

待もつらむもおとゝい来なもつらいつとめの中にある
まるに井の字の白井の水にあらいあげたる小むらさき
まくら引よせまた寝の床にぬしの姿の夢うつゝ

けの部 雷沢帰妹

けさもけさとて柱であたまあいたかつたとめになみだ

けいせいはどこで鳴てもろうかて笑ふわしに鳴のはほんになく

けいせいも元は素人しそうな娘うそも実も人による

今朝もけさとてお部屋のこゝと寝ごとゝおならを気をつける」(二十八
ウ)

けんばんの札をけつづられどきやうの音じめどふか糸道つくだろ

けんくわしてせなか合せも夜風がしみて寒くなつたと申直り

けいせいに誠ないとはそりやけいせいにつそいふお客の口ぐるま

ふの部 雷火豊

ふりつけられたる夕べのしやくのはらを直して笹の雪

ふたつない気で迷ふたものを心しらずの水の月

ふられたばかりか雪にもふられうちじや親父がくびをふる

ふつとこい茶の口切そめてむねのふくさがさばかれぬ」(二十九オ)

ふらばふらんせおまゑのくせよわしがなみだの五月雨(さつきあめ)

筆はかわいやはなれてあても「しん内夕ぎり」(しらかみにかくふみのつ

てへんじとる手もこゝろせき) 恋しゆかしのたよりきく

ふられた跡で又照らされて狐のよめ入じやあるまいし

ぶたれたゝかれ其手にすがり「しん内ふぢかつら」(わたしがつよくさか

らはゝすいなおまへのおこゝろがかわりやさんすであるふがの) 訳をいわね

ばわかりやせぬ

ふられたうらみにコレおいらんとぶつとひとつの置みやげ」(二十九ウ)

ふたつ来たよりひとつが床し花にゆるるゝ蝶の夢

文のうはがきや薄墨なれど中に恋事が書てある

ふられながらもまだうぬぼれてたまにやひとりて寝るもいひ

ふたつならべし此まくらばし渡りに船とはこのこと

ふたりが糸にしはアノ輪罫(わかざり)よ丸く結んでとけはせぬ

ふかくなるほど人目をしのぶ(とみ本おしゆん)(たゞずむのきはめおぼ

への)たしかこゝぞとせきばらい

ふぢと筑波が何似るものか思ひ思ひの山のなり(三十才)

ふつて来るとはいゝ辻うらよとふぞぬれたい我おもひ

夫婦親子の中よいうちはほうこ人までつとめよい

ふざけさせるは男のせいよ女に鼻毛をのばすから

ふぎりさへせにや世間はひろいたとへまづしくくらしても

ふところが豊ならねば万事につけて行とゞくとはほめられぬ

この部 巽為風

この雪によう来なましたと互につもる思ひの深さをさして見る

子をとろ子をとろ此子が目つき赤い仕かけのゆきの肌(三十ウ)

氷る硯にいきふきかけてこぼす涙にしめる筆

こたつやくらで恋路の角力アレサ人目の関がじやま

心せかずにさめないやうに松と竹との末ながく

格子ほそめに何のたまはくしろめが恋する雪の中

恋の初瀬のつぼみのさくらいつか夜露にほころびる

この世で添はれぬ悪縁ならば「常はづおつま」(アノ寺まちをでぬ先はわ

たしひとりも死ぬかくこ)はすのうてなで新世帯

これかあれかと迷ふてゐてはいつも定る事はない(三十一才)

恋のしがらみせきとめかねてきれて流るゝなみだ川

恋を信濃の木曾路の橋よあやふいとこころが色の味

心さだめてあいさつしやんせ「しん内明がらす」(どうで死なんすかくこ

ならさんずの川もコレ此様に二人手を取諸共に(「常はづおはん」)ほれたがいんぐわかんになんしていつしよに殺してくださんせと)それじゃ男もおよばない

こゝろの竹やのかしからわたり二度の花見で夜を明す

恋しゆかしいおまへのすがた寝てもさめても夢つつゝ

心にかわりはゆめさらないが(三十一ウ)すねて見たいが恋のよく

小鍋立雪のあしたのあつゞけ酒もかぶるどきやうの三ツぶとん

えの部 風地観

江戸の夜たかは難波(なには)のそらかそわぬながらもひと夜づま

糸りにつくのも操のひとつつまるころはぬしのため

酔ざめの水にすました口舌のもつれ腹のそうじのかんびよする

ての部 風沢中孚

蝶とちどりは兄弟なれどやんまとんぼはかたきどし

手なべぐらしをいとほぬ気ならふたり気まゝに寝てくらそ(三十二才)

手なべさげるはおろかな事よどんなひん苦もぬしのため

手づるもとめておくりしふみが今は浮名のひやうばんき

てつぼうの玉のおとづれ気もとびだう具ぬしのはなしはからばかり

亭主がぢやんこで女房がどんで始終どんぢやん大さわぎ

天きや晴てもわたしのこゝろなぜかうつつくもりがち

手ぬぐひまふかに格子を覗き「タギリ」(あはずにいんでは此むねがすま

ぬ心のうちにもしばしすむはゆかりの月のかげ)(三十二ウ)恋につき身の

小くらがり

あの部 風山漸

青いすだれのうちからのぞく花がめにつくさくら草

あいそが月夜が秋られやうがいま更科よくきればせぬ

あつくないたるわたしでさへも雪の夜道は身にしみる

秋が来たとして苦勞をしたが丸くをさまるけふの月
淡雪と書て送りしアノ玉づさはとける心の恋のなぞ

あれさおよしよ見られちや悪い花を折なとかいてある
青柳の糸のもつれが「(三十三才)さらりとつけて嬉しさふだよ月の顔
仇なすがたのよい山ざくらどうか手いけにして見たい

あかぬ恋路に引とめられて袖にわかれの花の露

あアモぢれたや空とぶ鳥は「とみ本まつ風」(あの鳥さへも女夫(めう
と)女夫の諸つばさ)ゆくにや行れずかこの鳥

あれ見やしやんせアノ雁がねもいとしかわいのめうとづれ

あんなすなをな柳でさへも風にかたよる意地をだす

あきもあかれもせぬ中なれど義里といふ字てないてゐる「(三十三ウ)

あやめかきつばた似た中なれど今は目にたつ花せうぶ

あぢきないぞや草ばの露の風にちるとはいぢらしい

秋の蝶さへつがひでくるふあれも旅路のめうとづれ

紫陽花のはなによく似たおまへのこゝろかわりやすさの色ぐるひ

あへば別れとさてしりながらかへしともなや雪の朝

秋の夜寒を身に打よせてあわぬきぬたのむらひやうし

さの部 風天小畜

酒がいわするこゝろのたけをうけてこぼすはなさけなや「(三十四才)

桜の花さへくるわに住めば夜のつとめをせにやならぬ

五月雨の闇に迷ふも恋路のならいつか晴間を松の月

さん俵かぶせられたる水仙さへも寒苦しのいて花がさく

咲た花ならちらねばならぬうらむまひぞへ小夜あらし

酒もやめようたばこもよそうやめてやまぬが色のみち

さきは主もちたよりは知れず行て見たいにやかこの鳥

相模下女なら立(たて)にもふるがふるもふられぬほれぐすり

さみせんのばちのあたりでふつつり「(三十四ウ)切れてくるふ引出す三
の糸

澄(さへ)る夜の池に浮寝のアノおし鳥がたつてにごさぬ池の水

小夜更て月にうかれしアノほとゝきす逢たい見たいとこかれなく

咲たとてあてにならぬはおまへの花よ草の花さへ実とはなる

五月雨のある夜ひそかに小窓を明けりやそつと出てゐる月の顔

さだめなき身を定るからはともにかせて添とげる

さだめないと時は時雨のことよまたも紅葉に気をもます

廓(さと)の意気地で今までよんでなんで浮気を出すものか「(三十五
オ)

さえりや猶さら浮気の月をわたしやたのまぬ胸のやみ

さつしておくれよ花ならつばみばんじいたらぬ事ばかり

酒を嫌ふてぼたもちや喰へど恋とさくらにや下戸はない

さいけんを取て投たす女房もりん気文なら角てもはへるたる

き

きの部 風火家人

きみとわたしはひよくの鳥よ苦ろうしながらはなれない

聞も咄すも人目をかねてせなかわすみすゝみ台

切(きれ)る覚悟でかぶりはふれどいつかむすばる風の糸「(三十五ウ)

きりぎりすきりぎり切られて切籠の鳥「とみ本むしうり」(ちぐさにすだく

むさし野のあぶみにあらぬくつはむしいなごすゝむしこがねむし馬おいむし

のやるせなやわれはおよばぬみのむしなれどちよとなかでこひに身をやつ

れはてたるきりぎりす(おやは草葉のなかでなく

君をまつらにひれふるわたし心づくしの小夜の雪

気ばねくるふもあふたのしみと思へば寒さもいとやせぬ

氣にいらぬ風もあるふとおきやくにいはいはれふるにやふられぬ床のうち

(三十六才)

きりも意気ぢもみにつまされて今はたがひに忍びなき

気やすめ聞ても嬉しく思ひ(とみ本)(どうで女房にもちやしやんすまい
わたしばかりがほれてあてうそのへんじを誠と思ひ)かげじやさだめし笑ふ
だる

着ものくひさきぢれては見れどぎやくと言はれてうす化しやう

きりこどつろのうわべのかざり腹も実(み)もないこころよし

きりぎりす鳴や霜夜にはるなが見せもおまへゆへじやと目になみだ

ぎりも人情もけふ此ごろは(三十六ウ)すて逢たひ事はかり

来てはわたしに無理いふ紅葉しかとさだめた事もなく

木(き)の実や木のもとままれて落てぬしのなさけで拾はれる

ぎりの一字とせけんの邪まにへだてられたる窓の月

ゆの部 風雷益

ゆめで見めぐり来るかとまつちあへばこころもすみだ川

行つもどりつ心であんうち不首尾もあんじられ

ゆきの夜も川といふ字のによう房をすて行様(ゆくよ)なおまへにはほ

んぼつ(三十七才)

夢になりとも知らせんものと娘ごころのものあんじ

雪をかむつて寝てゐる竹を来てはすゞめがゆりおこす

雪はちらちら待夜はながしエ、もぢれツたいちやわん酒

雪のたるまとおまへの心こけるたび毎丸くなる

雪もいとわず通ふてくれるぬしをひとり寝かさりよか

雪のふる夜は身にしみじみとつもる思ひにぐちばかり

雪が降つむねぐらの木々へもどる小鳥が枝まよい

行かれて人に宿かす主の花も(三十七ウ)朝のわかれば袖の露

夢の浮はし渡りにふねと思ふにかいなき此はやせ

雪の中にも梅さへひらく人もじせつを待がよい

行暮てこゝの二階をわしや宿とせば花は今宵の太夫職

雪の庭ぐち誰がふみはけて二の字くづしの下駄の跡

床しいおかたと文書そめた墨も恋路のかけすゝり

雪が降てもぬしさへ来ればさほどつらいと思やせぬ

雪が取もつ今宵の首尾はぬしとちんちんかものなべ(三十八才)

めの部 風水渙

めぐり逢ふ日もまたあるふかとほとけだのみの身のつとめ

あふとやくそくおよびもないが(ときはづ角兵へ)ありのおもひもてん

とやらどふで女房にやならぬけれど(せめておそばでみやづかへ

めでためだが三ツかさなれば庭につるかめ舞あそぶ

めくらへびじやと世のくちなはも後の手だての山かゝし

めん鳥が時を作つておん鳥鳴かすわたしや主ゆへなきあかす

みの部 坎為水

水ももらさぬその中々を(三十八ウ)月の影もるまくらもと

三日月のまゆげ落して雪解のふじの花の笑顔にまよはせる

未練らしいか遠のきながら見るもさくらのひとけしき

見さだめたかなければ心のまゝになんぼ矢たけに思ふても

水の流とわが身のうへはどこにとまるあてもない

峯の吹雪にとゝかぬ恋は仇な風にもちる浮名

見すてさんすなわしや鳶紅葉からむたよりはぬしばかり

みれんらしいか切りたいほんのらざのがれの口ふさぎ(三十九才)

水をあけてもため直しても活(いけ)て久しきものじやない

みれんなやうだかばたんはばたんほかに見かへる花はない

しの部 水沢節

しんぼしなんせ雪間のわか菜やがて嫁菜の花がさく

忍び足して閨の戸あけてそつとたち聞むしのこゑ

忍ぶやくそく誰(た)が水さして氷る妻戸のつらめしい
じみな恋中誠とまこと雪のしら鷺目にやたゝぬ

しら紙に染て臙なまいらせ候は恋のつぼみの筆のさき」(三十九ウ)

思あんするほどしあんは出ずにたまに出るのはくちばかり
始じうそつしたりやうけんならば今が思案のきめどころ

忍びあふ夜はきぬたの音もいつかみだれし月のそら

じぶんの心がじぶんでしれぬ「清元明からす」(あふたしよ手からかわい
さが身にしみじみとほれぬいて)もとめて苦るふをするはいな

じつをつくすも不実をするも心ひとつの先しだひ

じつと抱しめ目とめを見あい「常はづおつま」(めいどへいそぐたびごろ
もうすきちぎりの八郎兵へ)「四十才」こゝろで鳴てもわらい顔

じゆうになるとて我俣するなみつればかけるが世のならい

じせつ待りよかアノ梅さへも春をまたずに花がさく

ゑる障子におもかけのこす閨にうれしき月の梅

ゑの部 地水師

エ、モうらめしじやけんな人と思ひながらも切れられぬ

ゑんはいなものおほしにめくらいつ所になつたらひとりまへ

エ、モじれつたいとなりの三味よ人がふさぐにアノさわぎ

酔ふたしやつつらつくづく見たら「(四十ウ)はくそよだれにすじだらけ

ひの部 地風昇

ひとのながめとなる身はほんにつらひかなしいかこの鳥

ひよんな浮気をするのも楽なゑよう過ての菜(さい)このみ

びいどろのきれいな人物ばつちりわられし酒こぼしたひなの前(まい)

人目ありこそ三すじの糸でひいて聞せるわしがむね

人がそしればわたしもそしるかげで逢たびなくばかり

人目しので手折りし花も今はざしきの床ばしら」(四十一才)

百(ひやく)たびいふても主ある身では「とみ本」(くどいふのがおま
へのくせよなんぼその様にせかしやんしても)みさをたてたひこゝろざし

日に増(まし)はんじやう家とみさかえ上下そろふてむつまじや

ひと筋にぬしを便りにわしや咲花よ外にちる気はないわいな
人目せかれて明りをけして月に見らるゝかくし文

ひやうぶの中をば覗いて見たらあしか四ほんでちくしやうめ

人目ありやこそわたしのこゝろめかほてしらせそのつらさ
久しく逢ねばすがたも顔も」(四十一ウ)かわるものかよこゝろまで

ひろいせかいがせまくもなるがよこに車の恋のみち

広い世界におまへとわたしせまくたのしむ窓の月
人もかうかと身に引くらべなみだもろいも恋の情

人はしら糸まだしら絹の深くそまりしこむらさき

びんのほつれをそとかきあげてやつれ姿もわたしゆへ

人目石州芦屋の釜にしゆびを松風茶たてむし

引よせてじつと見つめる柳の芽からほろりとこぼせしひと雪」(四十二

才)

もの部 地山謙

もしもこのまゝ逢れぬならば「ときはつせきのと」(いやとよ我は恋)る

もはやぬぎすてゝうば玉のすみの衣のたらちねの後の世願ふほだい心かしき

の道でさむるふぞや(ほかのこの顔も見ず

百夜通ふたさてなさけなや「しん内明がらす」(たとへ此身はあは雪と共

にきゆるもいとほねど此世のなこり今いちど)あふてうらみが聞せたい

もくさんがかうもはづれて先手をこされ人の助言(ぢよこん)もうつてが

へ

もつれかゝつた恋路のはりはうでやちからでいくものか」(四十二ウ)

せの部 地火明夷

せかれた主より苦界のふちのわたしや年季の水がます

世事もせけんももふ捨小船切れてながるゝ涙川

せめてわたしの半ぶんほどと思ふてくれたら嬉しかる

せうじびつしやり出て行跡はとがなききせるをたゝきたて

せたいかためてヤレうれしやと思やおまへのまた浮気

先(せん)の女房を去らした跡へはいる不実じや末とげぬ

千里ひと飛恋にはうときとらの威をかるのらぎつね(四十三才)

すの部 地沢臨

炭にたとへりやおまへはかた木おこりやわたしもあつくなる

すいなむま味はやぼにはしれぬ「しんない」(すいなすいほどはまりもつよく)しんそこほれてはものがない

末の末までもつれてとけてむねの柳に恋の風

すぐる月日をかぞへて見れば年が明たら九十九髪

すいなおまへにたらわぬわたし末のとげやうはづはない

すへのとげない縁ならよしくふる身のかいもない

すいもあまいもせうちのうへで(四十三才)そんなわからぬりんき事

すゞり引よせ書墨いろも恋の手くだのひと趣向

すねたそぶりも常はの松の操たゞしき春の色

すねた梢を手くだとやらでおつにからんだ藤の花

末を思へば夜はしづしづと心ぼそさや秋の月

水仙の雪にをされてうつむく形(なり)りもとけてやさしき花の色

末のやみ夜はわししらねども晴して見たいはけふの月

すまぬこゝろを初雁がねの鳴て明石のうらみ事(四十四才)

すいたどふしは目もとでしれる(「これはしたりめんばくないモウこれま

ではいくたびかもらいおふかおふかと口まではそろそろでけたれどいひだし

かねておりましたどふそじおまへにゆめになと「しらせたいとおもふから

「ママアアしるきやのばんとうさまともいわれる身があさくさのおぢぞうさまへ七日のあいだばたしまぬりをいたしまたわいなイヤ申おぢぞうさまへこれはわたしがいんぐわでござりますどふそ此こひかないますやうにたつたいちどでよござりますまたはせうせうはんぶんでもしはんぶんでもかんにいたしまするといつしんかけてねがふたらサアサアおぢぞうさまのこりやくといふものはイヤもふとんとあらそはれぬものじやわいおまへさまがわたくしにそれほどまでしんじうたつてこんやのむこがいやじやとはコレアうれしいぞへかたじけない「わたしがわるけりやあやまるふすねずにおこまはんこいちやのほつをむひてくださんせ「これいなアこれいなアア、わたしやさつきにかふをあはせておがんでばかりおりますわいなア」くどくやうでは出来はせぬ

隅田のさゝらをアレみやこ鳥ほんにあづまの春げしき

端唄部類四編どゝ逸の部了(四十四ウ)

(広告)

はうた部類 初二三編出来

歌沢能六斎正譜 五編近刻

哇糸のしらべ 初二三編出来

隅田了古拳編 四五近著

端唄稽古本 初二三編出来

大本形歌沢正律

滑稽笑談伯 初編近刻

菊葉亭露光作 年景画

画本早学 初編二編

墨塘了古細画 三編近刻

玉蘭画通 初編二編近刻

玉蘭齋貞秀筆

元治二乙丑歳仲夏

東都人形町通松島町

松延堂 伊勢屋庄之助梓（見返し）

三、『新撰どゝ逸大成前編』（関西大学図書館蔵本）

関西大学図書館蔵本（和装／911.655／U4／2-1）により翻刻する。

都々逸 前篇（表紙）

新撰どゝ逸大成前編

歌沢能六斎集

当世同寿梓（見返し）

行水の流は絶えずして、しかももの水にあらずと、鴨の長明かいはれしは、どゝ逸ぶしのこと也けり、五六十年以前より流行して、今に至て廃ことなく、その文句はしかも旧のもんくにあらず、日々新作の詞花言葉、意は詩歌にとらずといへども、詞賤しきをもて同席せられず、仮令をなじ流の身なれど、全盛三分の娼妓と、小菟一枚の辻君なるべし、爾（さ）れば都鄙老少男女、どゝいつうたはざる（口ノ一オ）通客なければ、諸家の秀作多かりけるを、こたび新古のわいだめなく、撰集して大成と号け、且加ふるにわが連中の、新作をもて補ひしはしかも旧のもんくには、あらざらましと云れん為のみ
万延二酉孟春

隆興堂主人

鰥寒翁谷峨述（口ノ一ウ）

目録 唄員通計七百三章

正述体（ありのまゝうた） 唄員三百四十章

おもふよしをうちつけにうたふ也たとへば

たまにあひ嬉しいちよんの間わかれたあととはつねになほますもの思ひ

寄物述思（よそへうた） 唄員二百六十七章

ものによそへて思ひをのぶるなりたとへば

めくる因果の車のわたしひくにひかれぬ此しだら

名所地名 唄員九十六章

ところの名によせてこゝろいきをあはず也たとへば

ぬしにわかれてそれ辛崎の夜ごとなみだの雨ばかり（口ノ二オ）

（絵）

まれにあひ見しうきねのところにゆめなさましぞかねのこゑ

この図は元禄十二年の印本「糸竹大全」に載る所の摸写（うつし）也右の文句当世なげぶしとあり其ふしも手もことなれども唱歌においては今のごゝいつにうつしてうたへり（口ノ一ウ）

新撰度独逸大成全

歌沢能六斎輯

正述体（ありのまゝうた）

孝を立れば人情がすたるこゝろふたつに身はひとつ
早く染たいわたしのねがひいつまでしら齒でおくのたへ
そんなに己（おいら）を疑るやうじやそなたのこゝろもきまるまい
髪もゆふまいけせうもせまいかたの付までむすびさげ
うたゝ寝のさめてためいき心のもつれ人にやはなせぬ此しだら（一オ）
末もとけない気安めならばよしておくれよ今のうち
是といふきずもあるならあきらめやうがあくまでぬけめの無いお人
ぬしの冷酒ひやりとするよきつとこれからよしなんし
たまたま逢ときやめもとがうるむ泣にもなかれぬ人のまへ
義理をかいても斯（かう）なるからはあくまで女房にもつこゝろ
人にやいはれぬわたしの病灸もくすりも水の沫（あは）

ひとり寝る夜も枕をならへひとつはぬしとだいて寝る「(一ウ)
ほとにひかされついうち解て人にヤいはれぬ此くろう
つらい勤の辛防とげてらくなそひ寝がして見たい
そはれぬ縁じやとしりつゝ惚て死んでもそはずにやゐられない
わたしゆへにはおまへにまでもくろうさせるがいぢらしい
わたしヤ年わかまた親がゝりおもふおまへは女房もち
逢たい見たいは山々なれどこゝろにまかせぬ親かゝり
友達にわからぬ男のつくり名かいて心でたのしむ縁むすび「(二オ)
あふは別のはしめといへど死ぬまでわかれてなる物か
今のくろうに百倍まそがそふたうへならいとやせぬ
きたたお方のお顔を見ればふさぐこゝろが恥かしい
ふとした事からついのりがきて今はかた時わすられぬ
切(きれ)るかくこて斯(かう)なるものかたとへうは気で出来たとて
しれちやならぬとかくして居れど思はずのろけが口へ出る
見まいと思へとつにお互に顔見合してはしらぬかほ
逢ていはふと思ふたことも「(二ウ)いはでわかれてあとくやむ
りんきらしいと言んすけれどだれかこななにぐちにした
もしやさうかと悪察(わるずい)まはし口うらひくのもほどにしな
わるく言れりヤともどもむりにけどられまいとて悪くいふ
ぬしをかへして又寝の夢にまくら抱しめたためなみだ
内でしつけぬ此水しわざそれたおまへのこゝろから
たまにあふても人目があればつもるはなしもなくばかり
しつてしらない顔さるゝ程こゝろくるしいものはない「(三オ)
かわいさうだよきはどい間にもめかほしのんで逢にくる
しのびあふてもはかなきあふせばこのんでも身にヤならぬ
待もせぬ客はくれどもまつあの人は声もまたせぬじれつたさ

為を思ふていけんをするに腹をたつとはなさけない
もとを正せば他人と他人あらひだてすりやぬしのはぢ
つまらぬ事からうたくる物のわけをよくきゝヤ恥かしい
をからしいと心を付て見れば目につくことばかり「(三ウ)
あんじなさんなよおまへを置いて外にうはきをするものか
たまにきてさへ咄もてきず顔でわらつてむねで泣
末はとうかとあんじるやうでてんからいろになるものか
うつゝ心で柱にもたれ起てゐながらぬしの夢
せつかんもなんのいとをふ命もやつた男ゆへなら苦にはせぬ
癩を押(おさへ)し其手を押へぬしのたんきで此やまひ
ぬしのあるのに命をかけてまよひそめたが因果づく「(四オ)
恨いふのもすねるも泣もみんなおまへがさせるわざ
たよりすくない此身の上としてゐながらにくらしい
茶だちしほだち火の物だちてやせたもみんなぬしのせへ
思ひ切とはむかしのことよ今さらいけんはやばらしい
おもふわたしに思ぬおまへどふでうは気はやみやせまい
人のいけんも火水の責(せめ)もなんのいとをふ恋のいぢ
腹たゝせぐちをいふのもみな実ぎからたふぎの花ならかひはせぬ「(四ウ)
おもふ心のとゞいたこよひはれてうれしきひとつよぎ
あふて嬉しきわらひの種が朝はなみだのたねとなる
末はどうかとあんじるやうな浅いほれやうをするものか
はらが立ならどふなとさんせおまへにまかせた此からだ
むかふ鏡にやつれた姿誰ゆへこんなにくろうする
絵にもかゝれぬ互のまこと一所にならいでおくものが
人目多さにたまたま来ても顔見るばかりでじれつたい
女子(おなご)たらしのおまへに惚て「(五オ)今じやいへないくろうする

梶の葉うらへ書名がしらも人に見られてはづかしい
帯もとかいであふ身が嬉しそへばなんでもない女房

こんな心にしたのもおまへ今さらあきてはかわひそふ

うは気せうばい笑はれながらこゝろの錠まへあけはせぬ

鶏(とり)にわかれたむかしのからだ今じやいつまで寝てもすむ

跡の為だとかへして見ればはなしが残てまゝならぬ

うはきなおまへにまじめな私むすびちがひのあだ縁(縁に)し(五ウ)

なみだもろいは女の常かわざとじらすとしりながら

火ばし持てもおまへの名の字ふだんこゝろにたへぬから

遠くはなれて待身のつらさ鳥の影さへそらだのみ

今朝の夢見によるこび鳥こゝろうれしきねずみ鳴

たよらない身にたよりができてもとめて苦労をするはいな

筆にいせした心のたけをあへば何やらくちこもる

あんじるなやがてくろうをさせたもしたも寝ものがたりの種にする(六

才)

文をやつても只かたたよりわたしや是ほどおもふのに

雨はよいもの昼さへそばへよつて居れども邪魔がない

今さら互にうは気もできヨウかたいかいなに入ほくる

ちよいと逢ねば心もすますあへばひかるゝうしる髪

かくすほど猶人にもしられ浮名たつほど切はせぬ

くろうするのはてんからかくごいきな亭主をもつからは

人めしので逢ひきしたも今しやはなしの種になる

ほれたお方に又惚られて(ママ)(六ウ)

ほれた性根を見すかされてかやみとよはみへつけこまれ

としより過ると笑はゝわらへわたしにヤ大事な内の人

おもふとほりに願もかなひ実に嬉しい身の果報

親兄弟にも見かへた人をあひつにとられてなるものが
格子の内からそれとはしれど人のみるめにしらぬふう

さうした浮きがある程ならばなんでこんなにぶたれよう

切もせずあふもならずの身であるならば神や仏をたのみやせぬ(七才)

手なべ提(さげ)てもあの人ならば欲をはなれて恋のよく

かはる枕になさけはうれど心をうらぬがぬしへぎり

いたらぬわたしが心のくろううはべばかりをはでにして

はなしもきかずに又癩癩のやけじや理道もわからない

此ころはなみだもろいとわらはれぐせがついてふさぐもぬしの事

土地はもとより世間はなほもひろくさせたいこちの人

をそまきながらも辛防さんせトいふてなみだにむせかへり(七ウ)

蚊屋を出てから又みる寝顔かうもゆかしくなるものが

二日あはねばとつこしぐるう風のくさめも気にかゝる

人のほめるを亭主にもてばうれしいながらも気がもめる

今のくろうも染ましやんせぬものがたりの種にする

きゝわけがないとわが身でしつてはあれど思ひきられぬ恋のよく

むかしの馴染(なれそめ)からふたりしてのろけあふのもたのもしき

義りといふじにわしや別れるれどすへであひましよ弓のつる(八才)

かあい男をかへさにやならぬにくい鴉とあけのかね

実もまこともつくしたふたり今さらうは気をするものが

惚たがむりかよ心も顔も男にヤやさしいつまはづれ

ぬしはいゝ気なもう寝なんすかわちきのこゝろもしらないで

いひ度ことは山々あれど顔みりやさうは口へ出ぬ

物思へとやばんしの事にやさしいからして忘れぬ

うは気せうとはしりつゝ惚てくろうするのも心ながら

たらはぬくちても女子(おなこ)は女子(八ウ)すへのくゝりははじめか

ら

いつそ死でと思ふちやみれどいのちありやこそ末もある

ばかよ頑(たはけ)とそしられながらおもひきられぬ恋のやみ

わたしは変つた心もないにぬしはくぜつ(くぜつ)のいひがゝり

実もふじつとなる身のつらさをくる茶やにもきりがある

縁も時節も誠かたよりあだやうはきでそはれふか

お部屋へ気かねもおまへが大事せじもつとめもぬしのため

たよりない身でつくした実ぬしはうはきできれことば(九才)

親の氣にிரりわたしもすいたいきで律義な人はない

切た当座はがまんもいへど日数たつほどおもひ出す

軽いしよたいもおまへと二人気がねせぬのを楽しみに

わけをいふのにまア聞しやんせいやでわかれる氣ではない

人にいけんもしかねぬ主が人にいはれる此しまつ

つらい峠やかなしいうき世こしてけふ日のあら世帯

わが惚りや人もかうかと邪すいをまはしくちなやうだがはらが立(九ウ)

氣にもかゝるが互の実はたへずたよりの文のつて

鏡にむかへばやつれた姿あいそかつきよとあんじられ

聞わけがないとおまへはいはんすけれときれるかくごで惚はせぬ

遠ざかるのはこらへもせうが人のしやくりか氣にかゝる

朝な夕なの神しんじんもぬしに災難ないやうに

友だちヨたのめば時節を待とじせつまつなら頼みやせぬ

心やたけに身ははやれどもさきへとゝかぬふしあはせ(十才)

苦勞させたりしもするからはいやだあきたといはしやせぬ

私ばかりかほうばい衆がおまへの実意をほめてある

惚たしやうこはおまへの癖がいつかわたしのくせになる
おまへいやならつんつんしやんせわたしやひとり情たてる

いやならよしやがれあきたら殺せいきのあるうちや切はせぬ

どけう定てあいさつしやんせ酒のうへだといはしやせぬ

鬱(ふさ)ぎやめに立とぼけてぬれど胸にしんくはたへはせぬ

ほつとため息枕にもたれ(十ウ)たがひに見合す顔と顔

斯(かう)なりやふたりが手ごとにやいかぬまことあかして人だのみ

何をいふにもとし若なればはなすはなしもあとや先

氣づよいばかりが男の情かすこしはなさけをかけさんせ

せくなせきやるな時節を待なおもふてそはれぬ事はない

死なばもろともかせげば共に門にたつならふうふづれ

酒はもとより上戸じやないがあはぬつらさにやけでのむ

義りと世間と人めがなけりやこんなにくろうはせまいもの(十一才)

その酒をとめておくれよ飲せちやいけぬしらふでいはせる事がある

よかれ悪かれいらざるおせはわたしがめがねで惚た人

事とすべなら親子の縁も切ておまへもたつやうに

かへりやさんすかちと待なんしはなし残した事がある

やめてくだんせつきあひ遊びかよふうちにはあつくなる

床のほてりもまたさめぬのにかうもあひたくなるものか

世帯かためてやれ嬉しやと思やおまへの又うごき(十一ウ)

そんならさうかといひたいが二日あはずにいらりうか

おくばきりきりがまんはしてもいつかをばへし糶とやら

のつきつた事をしたならなけきもせうとかばい立して此様(こんな)しぎ

かくし立していひ訳すればけつく目にたつ詞(ことば)(じり

いくらくつても思案におちぬいれざるまい人の耳

日にち毎日あふたる罰か今ははかなや遠ざかる
さういはいしやんすな全体凝性(こりせう)人がいふほどやめられぬ(十二才)

はたじや何とも思ひもせぬにじぶんの邪推でさとられる
涙もろいとおいひだけれどこれが笑つてはなさりよか
近所へ来ながら逢ずに行もじつは身の為すへの為

腹じや泣てもうはべしや笑ひほんにつとめのうらをもて
わたしや全体いちづなせいも人もさうかとひかされる

しあんしかへてみる気はないかそれじや苦ろうしたかひがない
へたな異見を聞気はないか唄の文句じや身にしてみる

いけん言などいひ人もあれど」(十二ウ) わるく聞れりやなほつる
くるしいわたしの心もくんでたまにヤやさしくしておくれ

人にはなせばわたしの恥とおまへのうわ気をひしがくし
仕うちで惚たはわたしが悪い口をきいたはおまへから

めんと対(むかつ)てむねきな異見しらをきつてもかほへでる
人のうはさも七十五日どふせいちどは言れぐさ

ほうばいづき合いびつになればあれもしやくかと気のひがみ
頼みがひないおまへの胸をどふぞたのみにして見たい」(十三才)

口へ出さねどくろうがあればどふかをしかと人がいふ
人にヤきかないおまへのそぶりじつにわたしの目にあまる

かんがへりヤかんがへるほどくろうがまそふ愚ちになるのもむりはない
はたじやまだ気も付ずにゐるにすねにきずもちや気の弱み

せうばい冥りて嬉しい晩はつねの苦がいをとりかへす
わか身でわか身がじ由にならめぢれてくひつく夜ぎの衿

相談づくなら遠ざかるぶがとひをとづればしておくれ」(十三ウ)
合せものはなれりや他人とそりや情がないうつくしづくならいつまでも

たまたまあふのにもういろいろとかはじやなん癖つけたがる
としが違ふがつり合まいがそれはおまへの迷かう上

ほかで見たのならをかしかるぶがいふにいはれぬ事がある

おまへもわたしも主あるからだどふせずへよくそはれまい
もとめた苦ろうはわたしのすいけうどんなむりでも請(うけ)てゐる
末のくゝりはしてあるけれどおまへを思へばなきわかれ」(十四才)

あはぬ身ならばあきらめよいがなまじ顔みりやます思ひ
つとめ酒をばあんまりのむなそれがしゝうは身にさばる

遠くはなれてくらすも時代(ときよ)からだ大事にしておくれ
むしをころして言れてゐるもみんなおまへをかばふゆへ

惚たよはみをみこまれぬいてねこそげおまへにぢらされる
つとめの身ならばどふしてなりとあげてたのしむこともある

おまへにあふたびわがまゝいふもつらいつとめのうめあはせ
いしゆもいこんもない客人へ」(十四ウ) つよくあたるもおまへゆゑ

文のたよりじやいなやがしれぬみれんなやうたが顔見たい
あはぬ昔とこらへもせうがどふぞたよりはしておくれ

かくれてあがれば心のひがみせうちしてゐてぐちがでる
口じやいはれずしうちじやできずぢれてふさいて癩のたね

できぬしんぼもおまへの為とつらい苦がいのうき月日
口でいはれぬぐがいのつらさをしてごらんよ胸のはり

たつたひとりのおまへを便り鬼の中でもしんぼする」(十五才)
寝がほのやつれを見つめてゐればなみだでおまへの目をさます

せまい二階で人目は多しぬしもつらからわたしやなほ
つねにやさしいほうばいまでがおまへをそねんでむかふつら

くろふさせたり気をもむ本は身から出たさびげひがない
かげで嬉しい思ひがなけりや苦がいが片ときつとまるか

年季がぞへてふさいでゐればうれしいおまへの初会口
邪けんな親だと思ふてゐたがおまへとかうなりや結ぶ神

人にやいはれずわが胸ひとつ」(十五ウ) なくもちれるもこゝろから

のろけはなしについのりがきてかくすおまへがくちへでる
らちのあかぬが月日と年季はやくふたりがあらせたい
つうなおまへにわからぬわたしなんでつじつまあふものか
そふて苦ろうは世上のならひそはぬさきから苦ろうする
やうすきかなきやさぞ腹が立これにはだんだんわけがある
ぬしのかん癩日ごろの氣しつどふできくまいとめはせぬ
遠くはなれてゐるかなしさはうわきよされてもぜひがない」(十六才)
嬉しい中にもこはいが三分ほれたおまへに新まくら
女房もちとはしつてのことよほれるにかげんができやうか
深くなるほど人めをしのび目も口ほどにものをいふ
眉を落してざしきをひいてきげんとるのもぬしひとり
親のいけんを何きくものかいぢはたがひの胸にある
友だちヲ力になに惚ようぞそはれにヤ尼になるかくこ
末のとげない縁ならよしなくろうする身のかひもない
文は逢どもわが身はあへぬ」(十六ウ) ふみになりたや一夜(いちよ)でも
末のくろうは元よりせうちどふぞ添寝かして見たい
ぐちもいふまい愠氣もせまい人のすく人もつ果ほう
かるい世帯もおまへと二人きがねせぬのをたのしみに
手なへところか喰ずにあても切(きれ)るこゝろになりはせぬ
犬がほへてももしお前かと聞のとほそを明て見る
親は此手で切文かけといふて手ならひさせぬ
おまへにまかしたわたしの体煮よと焼うとすきしたい」(十六<ママ>オ)
庭の松むしなき止たばにもしやそれかと氣がもめる
うしと見し夜もけふ日になつて見ればこひしい事はかり
見捨られゝばわしや墨染の袖とかくこをきめてゐる
たつた一言人づてならでいふて置たいことがある

鳥のそら音ははかりもせうがぬしの空寝ははかられぬ
恋に朽なん名はをしけれど今さらいぢでもきれられぬ
忘まいぞや引すへまでもかたいちかひのいれぼくる

一人寝るよの其あくる間は」(十六<ママ>ウ) いかにかんじきものおもひ
露の命を長くもがなとおもふもおまへがあればこそ
なまじあひ見てなほ物思ひしらぬむかしにしてほしい

人しれずおもひ染しがまうとやかうと浮名かたつては猶やめぬ
今くるといつてわたしをよもやにかけてもはや有あけとりが鳴く
風に吹るゝしら露よりも人のこゝろはちり安い

しのぶ恋ぢもついで色に出てものや思ふと人がとふ」(十八才)
身をなげ出してもそはねばならぬ人にはれた事もある
君が為なりやわしや野に出てわか菜つむともいとやせぬ
人目ありヤこそ飛立むねをじつところへてしらぬ顔

左様しからばしかつべらしく他人ぶりやすりや猶かあい
をよばぬこととは思ツちやあれどやつはりみれんで神だのみ
賤のをだ巻又くりかへしどうぞむかしにしてほしい

足曳の山鳥の尾のながし夜をどうしてひとりで寝つかりよう」(十八
ウ)

秋の扇と身は捨られて風のたよりもなくばかり
どうせ足(たら)ないわたしたちをすてるおまへにむりはない
あるものをないといはんす心がいくいりんきするではなけれども
待たつらさをせなかでみせてしばしがまんも恋のいぢ

初はたがひにうはきで出て今はひとりで情たてる
こちら向など引よせられてうらみつらみもどこへやら

いつそ邪見をとほしもせずにはんにおまへは罪な人」(十九才)
なんの玉のを絶なばたへるあはで苦ろうをするにやまし

客にうそをばつく其罰(ばち)かまことあかせどうたぐられ
りんきせぬのが女の道とうはきしたさのゑてがつて

おためごかしも最(もう)きゝあきたいやならいやだといふがよい
逢ばあふほと猶やるせなやたまたまあふてもすんだもの

為になる客つとめるつらさぬしに枕のばんをさせ

燈心をひとすぢへらしあちらを向てぬしはねたのかいやだねへ(十九ウ)

人のてまへはてくだと見せてじつにほれたで胸の癩

親の邪見も今では嬉しつとめなりヤこそあひもすれ

灰に書てはけす男の名火ばしのてまへも恥かしや

うはきな男がなぜ此やうにてまへで手まへの気がしれぬ

うけさせやうとていふでもないがのるけばなしもうさはらし

かはる枕のねざめのとこに亘ゝもじれつたい此からだ

血をわけてもらふた親でもわしやすてる感じやあかぬ他人のぬしゆへに

(二十オ)

是が惚たといふのかしらずいとなつかし気がもめる

わたしヤどゝ逸でまぎれもせうがぬしはお帳合おきづまり

じつも誠も皆いひつくし枕ならべて顔とかほ

あふて間もなく早東雲をにくやからすが告わたる

松もみどりを幾千代かけてすへをいわふてゐるわいな

いふて置のになぜ浅はかな口ゆへうき名がたつわいな

ぐちもみれんも沢山あれどむかふかゞみに恥てゐる

女房さらすにわたしも切ず(二十ウ)ほかにしあんはあるまいか

筆はかあいやはなれてゐても恋しゆかしのたよりきく

思ひ出すとは忘るゝからよわたしや夜の目も忘られぬ

あふてわかれのつらいを思やあはぬつらさかましである

人はこり性と只一ト口にこるもこらぬもさきしたい

ふたれる覚悟のわしや結髪色であふときヤかうじやない
腹が立ても又わけきけばのろいやうたか夫もそれ

切た中とてたよりはさんせいやで別れた縁しやない(二十一オ)

いやな座敷で笑ふのつらさないてうれしきぬしのそば

ぬしを思へばてる日もくもるひく三味せんも手につかぬ

待がつらいかまたるゝわしが内のしゆびして出るつらさ

かへらしやんせと口ではいへど立ばおどろくむねのうち

今は待身をわらはゝ笑へすへは高砂そふて見しよ

門付のしん内ぶしも身につまされてもしやとあんじるひよんな気を

わけもないことわけあるやうに言れりヤぎりにもせにやならぬ(二十一

ウ)

似たことがもしやあるかと人情本をよんでなほますものおもひ

ぐちなわたしにさばけたおまへ柳に蔦じやと人がいふ

それみやしやんせ言ないことかさきも血道を上てゐる

人に気かねもおまへのおかげ明くれくやしいことばかり

せじとつとめに涙の糸がほなかせるおまへはむりばかり

せじもいふまい気がねもせまいおまへもうは気はやめさんせ

恋のやみじはかねてのかくごはれてあはれる身ではない(二十二オ)

しあんするほど切てはならぬ今まで苦ろうのかひがない

数ならぬ身でも恋ぢのまことはまことほれたに上下があるものが

すまぬ顔色見てとる実は他人にしない惚た中

あきらめましたよどうあきらめたあきらめられぬとあきらめた

今さらにぐちもいふまいなげきもせまいそはぎ命がありやせまい

待宵のかねはつしみつわかれのとりにまさるつらさようきおもひ(二十二

ウ)

みじか夜のとりは恨まず長よのかねをうらむ心の客と間夫

いやであらふがまアきかしゃんせつらいわかれぬしのため

楽をふり捨くろうをもとめ人にわらはれぬしのそば

ひよんなことからついでしたわけに今は他人とおもはれぬ

達引づくならすみかへしても年の明までよびとげる

金じゃせかれぬそなたの気性といふてほれては数多し

ないてはなせばつとめとなぶりこれが笑てはなさりよか」(二十三才)

うわきせうばい玉やじやないがぬしにあはずはくらされぬ

くぜつした夜は鏡の蓋をあけてふさいでまたあけて

心からとてわが土地はなれしらぬ他国でくろつする

先はうはきであらふとまゝよわたしや実意をとこまでも

わたししの心にあまいはとてもなんの他人にはなされぬ

はやくやめたや通ふも呼も待もわかれもないやうに

たつた一ト夜がよみちのさはりしらざ他人でくらすだろ

夏やせと人にはいへどぬし」(二十三才) ゆへかうもくろつするのをたのし

みに

世につれて辛苦するのはいとむせぬがそはれないのかわしやつらぬ

そなたひとりに苦ろうはさせぬどんなはかないくらしでも

つらいかなしい峠をこしてなんでたやすく切られぬ

あへばさほどにはなしもないがほ見にやくろつでねつかれぬ

じれつたいほどなぜ此やうにほれたわたしの気かしれぬ

末にそふのはそりや縁づくよ当座あはずにぬられふか」(二十四才)

そひとげる人もはじめはふとしたことよほれたが縁てはあるまいか

論はないそへ惚たかまけよどんなむりでもいはしやんせ

あはれぬからとて女の操たてゝ見せましよあくまでも

しがみつくほどくやしけれどわけをいはれりやせひがない

三末の結句を「しかたがないんだからさトことばにてすてるなり

寄物述思(よそへうた)

色になるみの襦袢もぬいで素肌じまんの夏の不二

ないてゐるのを面白そふに」(二十四才) はたで見えてゐる籠の虫

鍋に耳あり徳りに口よちよくとはなしもできはせぬ

寒い夜風に身をすりよせてうれしなきにかなく千鳥

初鷺もうちきはいやよないてうれしい庭の梅

さしひきわからぬおまへのしうちながれの身ながら汲かねる

秋の風ゆへ気をもみぢ葉のそめてくやしきちりごゝろ

惚たき菊を露しら萩のつれないおまへは鬼あざみ

ぬしのうは気はもみぢの時雨夜とぬれてもあとがない」(二十五才)

三味せんのかよりほそき芸者の身でもはりといきぢてきればせぬ

そるばんのたまにあふゆへこゝろがしれぬ割て見たいはむねのうち

更て青田にこがるゝ蛸れんじまで来てかやの外

招ぐ尾花についさそはれてつゆのゑにし草まくら

心つくして嫁菜とならば今にみもち草の餅

うまく根松で抱しめのうちかずの子だからをろし初

みすぢ霞のひく三味せんや」(二十五才) さかへさかふる門のまつ

くぜつの種なし肌うち解(とけ)すかほはいつでもはしもみち

雨の雁がね枕にひゞきひとりなみだの露しぐれ

風に蚊やりの燃たつまゝにむねのほむらが猶まさる

とうした縁やらなま中染て今さら時雨にちるもみぢ

開きかゝりし寒紅梅を水あげすまして床の花

鷺きどりであつかましくも梅に来てなく鷺の声

恋のしよわけもしらはの娘おもひありげな手まり唄」(二十六才)

思ひやりにもまことはとゞくつゆにやつるゝ草の花

君をまつ葉のかんざし投てあふみおもての畳ざん

青柳の水にうつりしあの三日月はやつるゝはつだよ病あがり
ちやんと備てはつばつしくもぬしの影まつかゞみもち

うつかりと籠を出されてした切すゞめもとのくがいがうらめしい
ぎりからまれ心の竹を八重にくんだる籠細工

けふかあすかのかはいひ中も「(二十六ウ) 淵か瀬となる世のならひ
めぐる因果の車のわたしひくにひかれぬ此しだら

雪かさくらか遠山鳥のおまへはあらしのした心
のぼりつめさすほうづもなしに糸のありたけ奴風

羽子(はね)をつくづくあんじて見れば風にそれたも気にかゝる
恋の手ならひいつ書そめて筆にいはせるいろはもじ

葭(よし)と芦との節ある中へ深くさしこむ秋のしほ
心々のあの萍(うきくさ)の岸にさくのも水による「(二十七オ)

色の味をも最(もう)かみ分ておもひ切ます唐がらし
親のゆるさぬしのびの駒はひくにひかれぬ罰あたり

雁にことづて乙鳥(つばめ)にたよりどれも聞たやはなしたや
人が水さしてもいつかつい深草のつゆもいとほぬかよひみち

弓をはる駒矢をはなの春的へあたりもいかめしや
おもふお方の手をしめの内うれしいしゆびを松かさり

火のし片てに羽織の皺へそれといはずにあてこすり「(二十七ウ)
梅がゝのかほりゆかしきこゝろの竹にぬしのたよりを松ばかり

松にしので夜長の秋をあかしかねたる床のうち
はかないやうだがあの朝がほはしほみや又さく花がある

梅の娘に柳のわかしゆ月はなことの縁むすび
としのはじめのあら玉娘だいてね松やしめかさり

雨の蛸とわたしの心ひとりこがれて夜もねぬ
野べの若草嫁菜をつめば君がよながのさいになる「(二十八オ)

葛の葉のうらみつらみはそりやあだ惚よ秋風たてぬまこととし
揚りつめたるあの奴風いるもつのればのめをつく

夢に顔みて嬉しい間なくされてくやしき夜半の雁
鱒な目元に夢酔のうまみわるいとしたりつゝ過す酒

あける花火と浮きな恋ぢいゝといふ間にあとがない
堤あかれば柳の栗ちよいとぬれたる縁のはし

宝舟して二日のまくら夢もうれしくみなめざめ「(二十八ウ)
あし曳の山鳥の尾のながながし夜をひとりかり寝の仇まくら

いろの穂垣の朝がほさへも何をすねてかうしろむぎ
ふたば葵のふたりが中は人がさかふと切はせぬ

とけぬ恋でも月日をまてばいろになるもの谷のみづ
叩く水鶏もそれかとはかりまくらひとつがじれつたい

繻子の帯ほどとけあふ中もあきりやそろそろ切かゝる
梅の匂ひを桜にこめてしだれ柳に咲せたい「(二十九オ)

明ていふのに聞入なくは命やすてるそ火とり虫
男心はあのおぢさゝるよ日々にかはるがにくらしい

鏡出してもそのことばかりなみだおぼろの薄ぐもり
けむる蚊やりにまぎらしながらあはぬつらさになみだぐむ

水にまかせた萍(うきくさ)さへもすいたところて花がさく
笛の中だち目がほも恥ずしたふ思ひを口うつし

娘大事と人にも見せぬうちに色づく室の梅
こんな容(なり)して恥かしらしい「(二十九ウ) 畳いつはい松のかげ

べにで書たる此はなし文雁のたよりをまつつらさ
水を手(た)まくら楽しいめうとすいな隅田のみやこ鳥

鴛鴦(をし)のむつみとわらはゞ笑へ人が水さす透(すき)がない
むすぶあやめも心の願ひつゆにぬれるの辻うらか

心さとれとつく追羽子（おひはね）にいつか解たるしゆすの帯
わらふ唇しら梅見せて声はうぐひすまよはせる

ぬしをまつ虫こがるゝ蛩おもへば胸の火とりむし」（三十才）

門（かど）の鳴子の夜風にゆれてもしや来たかと胸さはぎ

しのぶ恋ぢは遠くの蛩目には見へてもまゝならぬ

つげの櫛はにかゝらぬ髪も人の口はにやうき名たつ

けむい蚊やりの辛防すればあとはすみよき夏ざしき

恋の中がき真葛にゆはれうらみうらみて秋の風

ござは青海蚊やりはもしほ船ぞこまくらのとまり船

わたしや呉竹おまへは雀雨のねぐらが縁となる

船のもやひもいつ解あふて」（三十才）おまへしだいのながれの身

いたら貝ない心をもつて君にあふとはあはび貝

ちよいとお待な着ものをおくれ屏風の唐子が見てるよ

風に木の葉のちらされたのもかきあつむれば籠の中

中口きかれてうたがはれたもはるの氷と解てゆく

さきは主持（しうもち）たよりはしれずいつて見たいにヤ籠の鳥

梅の娘に柳のわかしゆを雛めびなのさくら花

萩の下つゆ露ちりほども君にヤ命もをしみやせぬ」（三十一才）

風にもまれてたゞよひな岸へつくるよあまを船

わかい男に気をもみぢばの後家につぎ名が立田川

おのが身をあとへあとと田うへのやうに卑下すりやくむものはない

見捨さんすなわしや鳶もみぢからむたよりは主ばかり

辛防しなんせ雪間の若なやがて嫁菜の花がさく

うわきする筈大神宮（だいしぐ）さまも天（あま）のいは戸のあなばいり

鶺鴒にとんだよいことをしへてもらひ数の」（三十一才）子だから神のすへ

あかつきのちわは隣かあのとゞぎす鳴てこかれの今朝の雨

しのび駒かけてくどいてできたるおまへばちてもあたらにヤ切はせぬ
朝がほのからみつく竹ひきはなされて花がうつむきやつゆがちる
まき紙のへるにつけてもわが身を思ふはやく年季を明くれよ

あれ程いふたになぜまア遅いまつ葉かんざし畳ざん」（三十二才）

あはぬうらみにぬらした袖をとけて寝た夜は又ぬらす

何かしあんで気をもみ裏の糸りにさしこむかほの雪

かこの鳥をばほんねを出させどふすりや今さら切ことば

ふつつりと廊下で切たる此うはざうりたてるたてぬもさきしだい

うかれくるはのあの里雀すくな竹にはとまりがち

待にかひなきあのとゞぎす雲井へだゝる声ばかり

千々にくだけし白滝なればすへにあふせはあるものを」（三十二才）

玉のことばを錦にをりてつゝれあげたる恋ころも

思ふ念力ぜひ今一度筆のいのち毛つゞくだけ

はれてあはれぬ今宵のしまつにくい雲めが又しても

くよくよあんじて身はうつせみの心もぬけのからころも

もつれかゝりし此黒髪をといてむすぶもをりがある

さんさ桜に梅がゝこめて芽ぶきやなぎに咲せたい

五月雨のくされ縁じやとあきらめさんせ蓑ぶかたなできれもせず」（三十三才）

三国一やの白酒娘雪のはだへにふじびたる

しんぼしなんせあの梅の木も雪の中からはながさく

泣てうつむきやかんざしよりもおつるなみだの玉あられ

恋のまがきにしのぶは鳶よひとめかねては青々と

雪のはだへに桜の目もと月にいくらとうはさする

梅も柳もみなそれぞれに恋のいきぢのあだくらべ

春の野に思ひすぎ菜はおまへのうわきあんじ心のつくづくし」（三十三才）

うぐひすに負ぬ音色がたまさかあれば谷の中へもはなの兄
まてば甘露とそりや甘口なまたれるほどなら気はもまぬ
医者さまが小首かたむけ二のさぢ投てやつれ姿を見るつらさ

まてば海路の日和もあるが糸でに帆どよくのせてみな
泣てたもるな途方にくれる月は雲間のほとゝぎす

たはむれと思ひながらもつい手(た)まくらにぬしのこゝろをみだれがみ
(三十四才)

揚てきがねばお客が凧かつとめもいとめも付てある
吹ばとぶよな玉やの身でもあはぬつらさのもの思ひ
深いちぎりをかはらぬ願人はうき名を辰巳風

遠ざかるのは末さく花よ日々にくはちりやすい
泣てまつ夜にふけゆく鐘は明のとりよりなほつらい
文もやるまい返事もせまいあはれぬつらさをます鏡
油でかためた聖天さまをあらいがみとは誰がいふた

さきの折たるわしや三ツ目錐(三十四ウ)きばかりもんでもとふりやせぬ
秋がきたかよ気はもみちばのしかとれふけんせにやならぬ

しら鷺が小くびかたむけ二のあしふんでやつれすがたの水かゞみ
紫ヤこうとでおしではよいがぬしによく似てさめやすい

わたしの心は萱ぶきやねよかはらないのとさつしやんせ
石籠(とかげ)くらふかあのほとゝぎす人は見かけによらぬもの

三味せんの糸につながるげいしやの身でもひいちやくやし此恋ぢ(三十
五才)

おまへ今来てもう帰るのかあさぎ染かよあいたりぬ
とも綱はなせば身はうつる舟誰とて楫とる人もない

帯にヤみじかし襷にヤ長しながしみしかしまゝならぬ
鬼を欺くせうきでさへもこゝろに見とれてゐるわいな

日のくれ方にはおまへの方を見てはなみだにくれの鐘
門の柳のなびくを見てもこゝろこゝろで気にかゝる
源氏の巻でも桐壺はいやわたしや末つむ花がよい

事をこはさゞまとまるまいと(三十五ウ)ならばやなぎにすましたい
三は切てもわしや二世のゑんかはらしやんすなあくまで

わすれ草とて三味せんとればうたのもんくで又ふさぐ
春のよめなのつみ残されて秋は野ぎくの花がさく

とげの中にも花さく茨(ばら)よしらずに手を出しやけがをする
あやめかきつと似た中なれと今は目にたつ花せつづ

定めなきとは時雨のことよまたも紅葉に気をもませ
禿(かむろ)みどりも時さへくれば松かくらゐの八もんじ(又三十五才)

あんなすなほな柳でさへも風にかたよるいちを出す
おまへ木性(きしやう)にわたしは金(かね)よきがねするとはしれたこと

あぢきないぞへ草葉の露の風にちるとはいぢらしい
ぬしの心と今戸のけむりかわり安さよ風したい

つかれ騒は千鳥のくせよをしはつかひの浪まくら
春の草さへ秋にはかれるさかの庵の果をみな

垣にまとへる朝がほさへもとかく出世はうしろ向
秋のてふさへつがひて狂ふ(又三十五ウ)あれも旅ぢのめうとづれ

文のたよりをまつ雁よりもかへる乙鳥(つばめ)がいぢらしい
八重の山吹はでは咲ど末は実のない事ばかり

ぬしが舟ならわたしは水よ中のよいのも風しだい
宜(よう)こそき菊といはれふはづをしらぎくがほとは情ない

天の川竹ながれのつき身一夜妻とは誰がいふた
あはぬ恨も心のたけも明て氷室のとけ安

雲にせかれて姿も見せずないて夜明のほとゝぎす(三十六才)

つもる恨をいつゆふ顔とあふてはなせばすまの浦
ねても覚ても其かげろふはおもひきりつぼ尼となる

人めばかりは五月の闇にはれてあふ夜を松の風

じみなはなしにいつい夜がふけてなみだの雨かほとゝぎす

喧嘩じかけはかねてのせうちわたしや柳でとりあはず

五月雨に袖もかはかぬくぜつの中へ空でねをなくほとゝぎす

けさに別れし遠藤武者もすみのころも世をしのぶ(三十六ウ)

鬼のやうなる梶原さんもはだみはなさぬ梅の枝

ことづてを口にくはへて出てくるつばめ返事もたせてかへる雁

朝がほの花のやうなるおまへの気まへ日こと日ごとに気がかはる

君をまつ虫夜はしんしんとなさけしらすのかね叩

まねく尾花にふとたまされてつゆのなさけの草まくら

美しく咲たアノ花よくおみなへし秋かきたとてちりかゝる(三十七才)

客がきゞくと小菊に書てやればむかひのかむる菊

今はそら解くろうはすれどすへはむすばるかいの口

松のくらるといはるゝ身でもとはかむろのみどりから

ありとみて手にとられぬあの湯巻(かげろふ)はぬしのこゝろとをなじこと

ないしよの仕きせも厭はぬならば脱でこよひの貸小袖

かさゝぎのはしたない身もわたりをつけてどうぞこよひはしゆびしたい

霞むのもせの春駒よりも(三十七ウ)ぬしにあふ夜はなほいさむ

猪(しゝ)にたかれて寝る萩よりも客とねるのはなほつらい

寿老人ではわしやなければしもしかとはなしがして見たい

蠅(はい)にまはさる燈心よりもかるいおまへのそら返じ

矢猛心(やたけこゝろ)に気もはり弓のひるちやくやしい此こひぢ

庭の雪間のあの梅さへも寒苦しのいで花がさく

縁のはし姫とはいふものゝぬしが綱なら手が切る

心の底井をあかしていへど水にながしてぬしはきく(三十八才)

さわらびの握りつぶしにつみとがもない山のゑがほをはるの風

ひとすじとばかりおもひしあの朝顔もいつかかき根にわかれざき

直なわたしに横笛ふいてどこおしや其よな音(ね)を出(いだ)す

加茂のお祭わたしのことかあをひあをひと人がいふ

野への若菜と摘すてられて土におもひの根を残す

室の梅がえわしや欺(だま)されてさいたと思へばくちをしい

女郎花さく此野の中へ(三十八ウ)誰がぬいだかふぢばかま

船のかゞりとわたしの胸はみづにこかれて燃てゐる

まゝになるなら野にさく小てふ草にねるにもめうと連

思ふ木立へからんだからははなりやせぬぞへ蔦かつら

ぬしを松風身にしみみとふけてさみしいかねの声

ぬしとくらさばわしや八重葎茂らん宿もいとやせぬ

ぬしは磯へのあのみほづくしさそふめなみが数多い

心あかしのけしきはよいがぼんとたしぬくはやて風(三十九才)

神の榊とおまへのうはき先へたつので気がもめる

峯のみぢのからくれなゐに秋がきたとは気にかゝる

うすツ闇(くら)いとまがきのそばへよつてゆふがほ覗きこむ

ぬしに入(イリ)あげ身はうつせみの今ではもぬけのからゝるも

風もすきやの帷子ごしに夏もすゞしき雪の肌

やくやもしほの身もこがれつゝぬしをまつ尾のうらざ敷

沖の石かやわたしの袖はかはくひまさへなくなみだ

きりぎりすなくや霜夜の(三十九ウ)さみしいとこをどうして今ころかへ

されふ

芦のかりねのトよさなりとあふてはなしかして見たい

竹のはしらを何いとをふぞ山のおくにも鹿はずむ

岩にせかるゝあの滝川のわれてもすへに又ひとつ
雲井はるかに帆の影みへてをきつしら波たつかもめ
ちきり捨てもなほあをあとつゆをいのちの草の花
めぐりあひて見しや夫(それ)ともわからぬうちぬしははづして雲がく
れ(四十才)

衛士のたく火とわたしの胸はひるはきへても夜はもゆる
ついでした事にもことは嵐顔にもみちをちらすのか
ぬしの心と門田のいなばいつしか秋風ふいてゐる
枕ひきよせかけしや袖のぬれてうれしい床のうみ
下戸のお酒に外山の霞たゞずとやつぱりのむがよい
かぢをたへたるわしや捨小舟ゆくへもしらずにこがれゐる
をのゝ篠原しのぶとすれどわれを忘れちや口ばしる
忘らるゝ身はしかたもないが(四十ウ)それじや誓のかみよこし
しのぶもじ摺そりや誰ゆへみだれてすゞしいあらひ髪
雲のかよひぢ風ふきとちよをとめのすがたがおがみたい
いやな針なりや何しられふ蜂やあんまじやあるまいし
つたふ涙に枕のもののつたもいろづく秋のくれ
前髪かきかきアレじれつたい空にしられぬふけのゆき
せじでとまつた大根の花の小てふ二心とはたいそふな
小田のかりほにふく苦よりもあらばおまへのすてことば(四十一才)
かたい契は千万代もつるの口ばしかめの甲
鼠よくきけあのおとなしは庭の千草のきりぎりす
紅葉ふみわけあもなく鹿も秋といふ字がかなしいか
かさゝぎの渡すはしさへふつつりたへてこぬのはあきたかちらすのか
夏山につまにあこがれなく鹿よりも松のほぐしが身をこがす
春のはじめと泣ずにわかれあとでほろりと梅のつゆ

かへるかへるも屏風の中で(四十一ウ)やはりはなれぬてふつがひ
なみだふきふき其袖合せぐはんをかけぢの神だのみ
顔みせさんせや日にいく度もやさしいこゝろにいりかはり
小ぎく重てかくはなし文もてくるつがひもかむる菊
秋のあふぎと身はなるともついやちよつとで喜齡扇
かねのなる木はあのおみなへし花も黄いろに咲みだれ
眉は三日月はだへは雪でたのみすくない花ごゝろ
たとへとのよな風ふくとてもよそへなびくな糸柳(四十二才)
なかななるまい野にすむ蛙水にあはずにいられふか
五月雨のある夜ひそかにこうしのさきでみればうれしい月のかほ
白つゆや無分別でも草葉がたより恋のうき身のおきところ
草の葉のつゆはわたしがなみだの雫それにおまへは秋のそら
庭の松ぬしも梢にあのあふき風切てぶらぶら気にかゝる
とも綱のきれた此身は(四十二ウ)棚なし小舟かぢのとりに人もなみのうへ

名所地名

須磨ぬ心に夜を明し瀉かよふ千とりの声ばかり
つもる恨を庵崎とすれどあへばこゝろもすみだ川
首尾を松ちのはなしも更て跡は嬉しの森のかげ
心すみにたに気もつく鷗花を見めぐり春げしき
きりぎりす千草はなれてわしやかこの内容にかはれて夜をあかす(四十三
才)
人にやいはれぬ岩間の椈(もみぢ)すへはうき名のたつた川
撞てくりやるな浮草がねよまつちといふ名もあるわいな
岩にせかれて樋にとめられておもひあづまのすみだ川
ぬしに別てそれ幸崎の夜ごとなみだの雨ばかり
朝はひてうの田へ水かけて夜は潮来へ舟わたし

人目せきやでまゝにはならぬぬしは秋葉のうすもみち
末はめうとに業平ばしよろれしの森やしゆびの松

ぬしは秋葉とわしやしら髭よ」(四十二ウ) おもひまつ崎わたしぶね
思ひ庵崎時せつを待乳首尾を松身のながし船

露のひぬ間の朝がほならでこすにこされぬ大井川

うき名たつたの椀(もみぢ)じやないが染てちるとはなさけない
恋の綾瀬をしんくにするな今に中よくすみだ川

伽羅をたかせた二人が昔今は嵯峨ので夕蚊やり
女きんぜい高野の山に誰がうへたるおみなへし

嘘でかためた此よし原を又来てうそでさはかせる」(四十四才)

富士と筑波か何似るものかおもひおもひの山のなり

花はよしのと風雅にいへどいきなさくらは仲の町

いかに秋風たつ田といへどかほにもみぢはにくらしい
思ひこがれし身はうじはしの中をへだてゝとぶほたる

こよひみめぐり嬉しの森ようぞあしたもしゆびの松

霞ひき舟もつ木ね川にとんだのろけを請ぢ道

どんとはなした鉄炮ずよりあたるなかつの船のそこ

抱て根ぎしや玉姫いなり」(四十四ウ) 深い中田と人がいふ

人めしのぶの丘とは嘘よ四季のけしきに名が高い

水は二夕すぢ三すぢをのせてすたと綾せのゆさん舟

江のしま参りが弁天さまの貝でさいくのみやけもの

秋の夜風の身にしみじみと猪牙じや寒かる隅た川

ふけよ川風気もうき舟のすだれあぐれば筑波山

すまの浦なみ又たちかへり来てはまよはすはまちどり

あまの小船のろかいを推てすまやあかしのわび住居」(四十五才)

宇治の川ぎり夜は明はなれぜゝのあじろがみへわたる

天のはし立いくのゝ道の遠いたびちをふみのつて
わたしやおまへに気かありま山今さらいなとは言しやせぬ

末の松山なみこすともかはりやせぬぞへわがこゝろ
峯のもみぢにあかるい道ををぐら山とは誰がいふた

こよひ忍んであふ坂山を人にしられてなるものか

難波瀉みしかき芦のふしの間なりとどうしてあはずに過されふ」(四十五
ウ)

岸による波小舟にゆられ夢のかよひちさんや堀

神代もきかないおまへのうはきわたしや小はらかたつ田川

立別てはいなはの山のまつと聞てはまたかへる

みなのか川ではわしやなけれども恋ぞつもりてふちとなる

堀をめあてに漕出しゆくと人にやつげなよ此小船

赤い前たれみことな茶つみよいうち山たと人はいふ

箱根八里は馬てもこすか人の関ぢはこしにくい」(四十六才)

うしろ見するは門松ばかり五万てもひきやせぬ郭(さと)のいぢ

朝のかへりはすゝかじやないが馬がものいふた衣もん坂

商売のいとのみすしはよしのゝ川かおかほ見ながらまゝならぬ

あづま訛といはんすけれどまねて見たかる江戸の癖

前篇了

歌沢能六斎著

度独逸節用集 近刻

この書はどゝいつのはじまりを正し且其文句地色売色しんぞとしまの心いき
を」(四十六ウ) 分ち及び妓楼(じよろつや) 舟中料理茶屋あるひは祝言元
服はらをびたんじやうわたまし見せびらき其外目出たき席上にてうたふべき
文句それぞれにわかちのせたり又席によりて忌べき禁句のことはをつぶさに

しるしつ

梅暮里連中校合

江戸人形町通

品川屋久助板（裏見返し）

四、『新撰どゝ逸大成後編』（関西大学図書館蔵本）

関西大学図書館蔵本（E / 911.91 / U2 / 21）により翻刻する。

新撰どゝ逸大成」（表紙）

新撰どゝ逸大成後編

歌沢能六齋集

当世同寿梓」（見返し）

序

どゝいつは何所のどいつが唄ひ初けんとある人がものに書しは詔（へつらひ）なき詞といへども其みなもとを能もあさらぬ只これ当座の即興のみ余かねて愚考あり并（そ）はこの前編の巻末に標目を記したる節用集に書つけてんつまるところはどゝ千年万年（いつまでも）はやりもてゆく小哥といふべし

万延二年酉春日

隆興堂主人

鰥寒翁述」（口ノ一オ）

この図ならびにもんくのかきいれも前編の巻首に載たる「糸竹大全」のつゞきなりあるひは「大ぬき」といふ

涙ながらに見る玉づさはもじもさだかに見へわかず

（絵）」（口ノ一ウ）

目録 唄員通計六百十三章

雪月花 唄員百五十八章

三景によそへておもひをのぶるなり但し月ゆき花と題をわかちのしたり
雑体（くさぐさぶり）唄員四百十章

何にと片よらぬさまさまのもんくをまぜてのしたり俗にいふばれくてうのうたもこのうちに入る

問答 唄員四十五章

もんくにてとひ文句にてこたへる也男女のしるしわけをなし且しりとりあり」（五十三オ）

新撰度独逸大成後篇

歌沢能六齋輯

雪月花

月の部

月はかたむく夜はしんしんとこゝろ細さよ明のかね

及びないとはそりや気がよわいしづがふせ屋も月はさす

朝のわかれがないものならばなんのきはふ明の月

まだ宵とおもふ間もなくもう明の空雲のいつこに月やどる

待ど来ぬ夜はかたぶくまでの」（五十三ウ）月のからすや明のかね

わたしや芒の野にすむ兔こひしなつかし夜はの月

雲のたへ間をまれ出る月にさへてきこゆる紙ぎぬた

ぬしをかへしてれんじを見れば小田の有あけまだのこる

ぬしは田ごこのうはきな月よどこへまことをてらすやら

不破の閑屋にさす月よりもかくすこひぢはもれやすい

風のうす雲あの月かげを見せつかくしつ氣をます

それと見る間にあのはつ螢月のひかりでついなくす」（五十四オ）

月のうさぎのはねてはるれどこかかあいゝところがある
水の月かげ手にとるやうにみへてなほさら気がもめる

げこも上戸も気にあふやうに丸くいきあふけふの月

邪魔な雲さへさつぱり晴てまるくふたりで床の内

月はさへても心の雲がはれぬおもひで上の空

くもりがちなる最中の月よはれてあはれぬ辻うらか

一ト日あはねば持病の癩がふけてさしこむ窓の月

月にむら雲わたしにやおまへ(五十四ウ)邪魔としりつゝ切れぬ

月を友とてなく虫の音は萩の下つゆぬれたとし

かやのすき間をもる月かげにみだれすがたのはづかしき

月もいるさの山のはがくれ身につまさるゝ鹿のこへ

心しらない月夜のからすだましに鳴とはどうよくな

月がさすともしらないれんしくや中よきひよく座(いざ)

月もはればれ嬉しい世帯(しよたい)くろうしたのもかたり草

果のはてまで見たすやうにはれてうれしき月の海(五十五才)

三日月のくしをいたゞく柳のかみをすいな夜風がうごかせる

月夜がらすにヤ目は覚さねど闇のからすにものあんじ

お月さまさへ嫁いりなさる三五でだんこのこがでけた

月はすめども心はすまぬたよりながれのうきね鳥

夫婦げんくはは三日の月よひと夜ひと夜に丸くなる

月はかたむく夜はほのぼのとゑゝもじれつたい鶏(とり)の声

雪の部

雪のはだへになびきし竹の(五十五ウ)とけて身がるなわがおもひ

花に百度(もゝたび)来る客よりも雪の初会がたのましい

つもるはなしは世けんもしんと日本ばしにも夜るの雪

じみな恋中まことゝまこと雪の白鷺目にやたらぬ

雪はきへてもはなしはつもるひるになつてもかへされふか
しらむれんじにあれちらちらとながさゝなるめへさとの雪

田子の浦舟こぎでゝみなよふじのたかねの雪げしき

うきにたへぬか此雪風に初はななみだでひく車(五十六才)

有明の月とみるまでよしのゝさとにけさはしら雪ふりつもる

庭のあらしにふる雪ならでつもるわたしのものおもひ

雪のうちなるあの紅梅ももんくしのいで春をまつ

山も田はたもみないちやうに雪の夜明のぎん世界

雪のあしたのあの明がらすかわいかわいとこかれなき

雪の中でも梅さへひらく人もじせつをまつがよい

白の節句の八朔よりも今のすまひが銀せかい(五十六ウ)

降雪をふむもしいがふまずば人かとふてくれまい此けしき

花のけしきもふりつむ雪もこゝろごゝろの目のながめ

毒くはゞさらにゑんりよもないしよもあげて雪のあしたのふくと汁

ふりつもる雪の夜道をすたすたかよひとけて寝るのをたのしみに

しんのはなしに夜もついふけてうれしい雪になりいた

ことばとがめてせ中とせ中雪のさむさが中なほり(五十七才)

色の手かげんこたつでおぼへ雪もうれしき新まくら

女房かたぎで花こそ咲ぬじみなみさは雪の松

しらぬ旅寝もおまへとならば夜みち雪みち苦にはせぬ

ちよいとなりとも顔さへみれば雪の夜道も苦にやならぬ

麦のわか葉もたびたび雪におされなければ身はもため

花の部

花がちるとはおまへのせじよじつはふたりでさしむかひ

ちる花をさためなき世と哥にもよめど咲ざ(五十七ウ)なるまいはるの

風

ちればこそ花はよけいになほをしまるれくるつするのほ色の花
末もとげなん当座の花にむすぶ出雲の人じらし

酒くさいさゆで薬をつれしい手からしやくもさがりし花見ぶね

恋といきぢとたとへていはゞ梅のほひに花のつや

花におくつゆをさゝの霰こぼれやすさはきらすいり

花のいろかのうつるをみてもあんじらるゝよ人ごゝろ」(五十八才)

ゆくも帰もさくらをかざししるもしらぬも酒(さゝ)きげん

花の姿はふり捨たれどこかむかしの香がのこる

ならの桜はいろかもよいが八重といふ字がきにくはぬ

ぬしに見せばやぬれにぞぬれし雨のよあけの花のつや

とほざかる花すへつむ花よ日々さく花ちりやすい

花のゑんでもそはねばならぬどうせしじうはちるからだ

傘(からかさ)のほねにからんでふる春雨はやがてはなちるさとがよひ」

(五十八才)

冬は枯木といはれてあても今に花さく春はある

花のこずへと見る間も夏のやがて青葉になるだるふ

ぬしある花てもかうなるからは一枝をらずにおくものか

花の色うつりやせぬかとなほこひしさがましてながれのつき思ひ

十二一重と咲たる花もちれば百夜を思ひ出す

顔にやまよはぬ姿にやほれぬとかくさくらの花は花

花にくぜつのあらしのはてはおちてかさなる中なほり」(五十九才)

たまたまた来たのにあわれぬときは花もしくれてちるおもひ

花もみもあるしんみのりんきそひ寝してからことばせめ

てふよ花よとそだてし子でもつきだしやお客のせはになる

花のゑがほでみさほの松の色もかはらぬぬしのそば

あんじがほさへ花にもまさるあだがくるふをさせるたね

花も紅葉もモウあきらめたぬしのたよりを松ばかり

すなほに咄すをおまへはじれてよこにくるまのむりばかり

春の霞もみすじをひくは」(五十九才)花にうかれるこゝろいき

なごりをしげに見送(みをくる)かほへつゆかなみだか朝ざくら

土手のさくらをまた夜桜と酒がのり気(ぎ)のさんや堀

末はとけぬといはれた事もあればひと花さかせたい

さくら山ぶききりしまつゝじしんぞとしまの花ぞろひ

梅にさくらに柳はおるかぬしに見かへる花はない

花は咲ども梢の枝で手折れもせず見るばかり

降てくれるな桜に夜さめいろのさめるが気にかゝる」(六十才)

さそふ水あらばいなんとそりや萍(うきくさ)のもちまへうはきな花」

ろ

花はつぎ穂のてぎはもあればむりな縁でもそひとげる

どふせはなれぬおまへとわたし桜さめとは聞もいや

花のつゆすふてふてふさへもおまへに似たのかきが多い

人の花ととるまいものかとられたおまへのぶはたらき

今はかれ木の枝にもしやんせこゝる根がありやはなもさく

咲たものならちらすにおくれ」(六十才)ちればさくらもちりあくた

せうちして人にをらせるあの八重さくら義りほどせつないものはない

はでな色香に咲たる花はよるのあらしに散安い

花もさかせずつぼみの枝を折たわたしのつみつくり

どふでわたしはぶいきなうまれ花のあたりのあすなるふ

道のない山のさくらはいつふみわけて人が来るやらゑんしだい

花にあらしはうき世のならひどふでちらすにすみはせぬ」(六十一才)

山吹の花にをされぬくるはのさくらふるもぬるゝもはるの雨

かねは上野か浅草寺もひとめへだての花の雲

雨のさくらについぬれあふてこゝろおく山あかしあひ
しみじみのちも何をしかるふすいたゑがほのさくら色
嬉しいうちにも又はつかしきおほこゝろの初ざくら

おひき合せか観音さまかむすぶゑにし糸ざくら

軒の小雨に羽織のそでがぬれてほころぶ山ざくら」(六十一ウ)

じみでよけれど名が気にかゝるあさぎざくらの色がはり

花をこよひのあるじとたのみくれてかり寝の木下影(こしたかげ)

思ふとほりに願ひもかなひぬれてうれしき花の露

おまへに別りヤわたしはずとすみ染ざくらになるわいな

迷ひましたよぼんぶじやものを楊貴妃ざくらのあだすがた

うかれがらすがあれまいまいと花の木かげに誰かまつ

花の戸に巻て立たるそのさむしるをちよいとしき寝の仮まくら」(六十二

才)

すねつすねられ根もないくぜつかたみかはりに夕ざくら

思ひがけないゑにしのはしを花がとりもつ雨やどり

義理づめいけんでみれんもいへずとかく浮世は花にかぜ

冬のうちから花さく春を待てたのしむ庭さくら

思ひおもふてせつかく咲た花にあらしがにくらしい

娘大事と人にも見せぬうちにひらきし初ざくら

根のない花でも咲せにやならぬすへは野となれ山となれ

花にかならずむべ山かぜよ」(六十一ウ)月にやむら雲世のならひ

わが身わすれてあとさきしらず樽をまくらに花の下

大宮人ではわしやなけれどもさくらかざして山あるき

ほんに立派でつい見とれるよ花はさくら木人は武士

ぬれぬ先こそつゆをもちとへもつあくまで花の雨

かれ木にも花を咲せる餅ばなみれはわしもじせつを待ませう

むらさきの江戸の花かよすゑどの水でそだつてこぶでもひくものか」(六
十三才)

もつおかへりかと袖ひきとめておまへが立ては花がちる

こちら向(むけ)とやうしるもゆかしむかしずさみの花のかほ

ひとへさくらのうすきはいやよかさねかさねて八重ざくら

手折てくれよといはないばかり垣ごしにさく花のゑだ

どふせはなれぬおまへとわたしさくらさめとは聞もいや

さくらへだてゝふと見るすがたこひしけりやこそ見ちがはぬ

恋といきちとたとへていはゞ梅のほひに花のつや

よしのざくらの只ひとひらは(ママ)」(六十三ウ)

花はよけれどありや木が高いとてもわたしの手じやおれぬ

花の色うつりにけらしおまへのこゝろ身のいたづらもほどがある

邪魔があるので思ひもつる月はおぼろに花に風

雑体(くさぐさぶり/ざうのぶ)

雨は降だす屋根の薪やぬれるせなかでがきや泣く飯やこげる

すてる神ありやたすけるかみがなまじあるゆへ気がもめる

人の噂も七十五日くやしかうわさをされてみや」(六十四才)

まかせぬ此身をかんにんさんせ実もふじつになるつらさ

親もとへわたるまこともあてにはならぬ末にや手ぎれをとらふため

廊下で禿(かむろ)かこよりで百度ぬしをあんじて神だのみ

人もかうかと身にひきくらべやぼなりんきのちわ喧嘩

女房ざかりをしらはの嶋田にあふきがねの板がしら

けいせいにもまことないとはむかしのたとへお客にまことがありもせず

さらべおけ人にきがねが」(六十四ウ)なにいろものか立たつき名がきへ

はせぬ

こぼれ松葉にうはきな小てふつがひはなれぬ中をみて

しのびがへしをそなたにもたせゆめでありしか明がらす

道ならぬ事としりつゝはて気がもめるむりなねがひのかみだのみ

遠くはなれてくらすも時代(ときよ)まゝになるまでまたしやんせ

まはし屏風のおしどりヲながめひとり寝るならうちへねる

麦魚(めだか)もおよげばとんぼも飛に雨だれほどもながれの身(六

十五才)

程のよさそな気のよさそふなそれじやたしかにいろがある

うそもつかんせうわきもさんせころがらかなかしやんせ

むかふかゞみにやつれた顔をうつしころのくやみなき

長いくろうでけふびの世帯気のみじかいのも事による

気があへばいはずかたらずめかほでしれるくどくやうではできはせぬ

むねきな一座もおまへの連とおもやことづてせじもいふ

秋の野の花の千草におくつゆ見てもわしが(六十五ウ)なみだとおもは

んせ

かなくぎの折のやうでもゆかりの文はまもりぶくるへいれておく

月にむら雲花には風が邪魔をするのもちはのたね

めぐりあふ事もあるふと月日をすごし長い年季をつかうかと

酒のとがだといはんすけれどさげがぬしをばのみやせまい

義理やせけんとそりやいひのがれ実はいやだことわりか

たまのごげんにはや明わたるくがいしらずのむちや鳥(六十六才)

泣いたとてせかれたものがどぶなるものか泣ずとじせつをまつがよい

たいたとてこげたおまんまがどぶなるものかくはずとほしいにするがよい

あへばいつでも踏だりけたりしまだのけまりじやあるまひし

内の女房はさゝ糸のように尻もかしらも角だらけ

ぬす人をとらへてみればわが子のたとへとひつめだてすりや身のつまり

福寿草ひらいて見れば見事なたとへ床の(六十六ウ)おきもの目のなが

め

むすび玉ほどいてみればながくなるたとへこくらかつては手にあまる

さらべおけ人のうはさも七十五日この土地ばかり日はてらぬ

色とうはきをおもにこつけうまも合くちうわのそら

かこの鳥をばしたゝかだまし外へ巢をかけしらぬかほ

かあいさうだよあの子もこり性ぬけんするの目安(やす)大じ

人のしやくりで切(きれ)るはよしなやつこだこではあるまいし(六十

七才)

きたたきたたと口ではいへど水につき草根はたへぬ

あつい御心(ごしん)もまたごぬけん(ママ)きられましたか切(きれ)

られぬ

種まかぬ岩に松さへはへるしやないか思てそはれぬ事はない

滝の水岩にせかれていちどはきれ未はながれてまたひとつ

めでためたが三ツかさなりて庭につるかめまひあそぶ

まゝの川とどこにもないがながれわたりのすてことば

蛇の目からかさだてにはさゝぬ(六十七才)すひつけ葎の雨あられ

高砂の松もふうふでもるしらがまでそふを手本にするがよい

なづ菜七草たゝいたあとでひとつたゝいた下女が尻

糸ふて忘りよとふさいだときにのめばのむほど青くなり

黒いづきんで目ばかり出してはしごおりればあけがらす

匂ひ袋もしやうのですましけちなやよひのだいい

いふことを菊の酒ならくすりとなりてこひの病ひもなほるだろ(六十八

才)

ねがひの糸なら翌日(あす)にもござれとしにひとよでせわしない

ふきぬきにこいはあれどもぶく馬具かざりほんにたんこのいろけなし

糸はう柵から福神たち(ママ)もよだがたれませうひめはじめ

いなりさんよりわたしの方がすてきなごりしよと思はんせ

ほととぎすほととぎすとしてつい夜が明たぬしをまつよも其通り

すいに身が入いつくるたびもしめりがちなるうめの雨

うちは片手に目にもつ涙(ママ)(六十八ウ)

足とあしとがついなこどしてほんにこたつは恋の山

客はせじもの女郎はてうりうそとてくだのはちあはせ

ぬしのたよりと辻浦こんぶひらくそのまをまちかねる

飯(ま)もたきますつとめの身でも山がらでさへ水をくむ

おれもつらあてとは思へどもみかへる女がどうもねへ

ぬしは今ごろ駒かたあたりとしよ汁なんどでむかへ酒

月のかささして用事もない文なれどわをかけて書きや長くなる(六十九

オ)

雨はしよほしよぼかうしのかげにとてもぬれたる袖ながら

実があるならしちぐさかしなかみもきせうもこちやいらぬ

七ツでうられて十五で恋をおぼへてわたしも此くらう

いるけなひのは欠(あくび)の涙てうど椿のちるやうに

梅の匂ひを霞にこめて空にひとはけ丁子びき

雨のぬれごと浮気なとりよ月になじみのほととぎす

たらぬがちこそ猶楽みじやうまいたんぼのすり火打

ふけてかすかなあのさよ砧(六十九ウ)おつとおもひのしづのわざ

なる程だうりとうけたはよいがあとのがれとののがれ口

じようがないあけはなしとはなさけのだうり戸をたてもものもあるものを

くちも恋ぢのひとつのだうぐさつぱりすぎたも情がない

女房がかはゆるなる様(よ)になればをんなが惚ぬで身がもてる

ほんにめでたやむかしのくろう女(め)てふおてふのゆめにして

もゝしきや古きぬのこをかさねぎしても冬の夜風は身にあまる(七十

オ)

おこつた顔してついわらひだしはてはなき出すふかい中

月にむら雲花には風よ酒の座しきはきざだじやれ

きざといやみへころもをかけてけちと邪すいのつけ合せ

よけてとほせばいゝきになつてかたで風きりこひとろい(ことばすて

けちでみへッぽで出過てばかでおまけにときどきしやくをいふ

親へかうかう世間へぎりもたてゝほとよくあひにきな

じつところへ辛防すればほしも七日のしゆびがある

酒は米の水とはいふものゝ(七十ウ)むりな盃やどくになる

酒はうれひの筭といへどはいては塵より猶むさい

泪こぼして辛防すればのちはすみよくなる蚊やり

からの智恵者といはるゝ身さへ股をくゝつた事もある

色の黒いはそりやもちまへよからすは口ゆへにくまるゝ

悪くも有(あら)うがいらざるおせわすけば蓼さへむしがつく

言て見ようと口まじや出れとおよばぬ事だと又だまる

夏は来にけりみな白たへのゆかり着て出る茶や女(七十一オ)

秋の草木のしほむをみてもなみだこぼすか泣上戸

銭はなくなる女郎にやふられわが身ひとつにあきれがほ

酒のさかなはまづとりあへず秋のもみぢのにしき梅

のめどもつきない此泉川こひしかもなべやきざかな

冬の薄着のさむいにつけて人のくさめも耳につく

どれにしようか格子の先で霜のしらぎく目がうつる

利上利上にしがらみかけてなかれもあへない質ばかり

うたへうたへの声高さに(七十一ウ)枝もさかへる松づくし

よたか切見せむかしはものををまはぬむくひの此よこね

色よ酒よと身のいたづらにあはれなすがたも心から

酔ふたまぎれに投た茶わんくだけで今さらものおもひ
あけりや暮るとさてしりながらかねやからすがうらめしい
とても此世の思ひでならばじんきよと食傷がして見たい

夜着やふとんもあはれと思へわたしやひとりで床のばん
夢でなりともあはしておくれゆめじや浮名は立はせぬ」(七十二才)

銭のないときやいつでもおなじわたしや毎日秋のゆふ
いくよいくよになく声きけばちどりと思へど気がわるい
枕はづして嶋田の髪をみだしたあげくは気がおもひ

山の秋風夜はしんしんとふけて身にしむとほ砧

あぢきなぎ世とあきらめなからたれしもおかねはほしいもの
ちり取かた手に篝をもつてほれたやつらをはきよする

としてはつても若むらさきの色になりてがまだ多い
あふひまつりの噂を湯屋で」(七十二才) はなししながらくらへうま
とてもするなら絵合せよりもぬしとふたりで貝あはせ

あすは又あす朝かほとなよその日その日をかけてながし
うゆる玉苗早乙女笠は田ことの月よりなほ多い

のぼる朝日になく鶯のはつねうれしい窓の梅
のべる蒲団に枕もふたつたれと寝るのか気がもめる

ふぢのうら葉は手も届かふがむすめしらはじやつまゝぬ
なまをいはずときぎをはよしなどふせ女がほればせぬ」(七十三才)

かしはぎの枝にがさつく枯ツばよりもぬしのこゝとがそつぞしい
どふせうき世は夢まぼろしとさとりヨひらいてくさの庵

雨にやどかる軒端の下もぬれる他生の縁むすび
せどへ作つてお芋をぬいて星へたむけのひごすいき

棚の鼠のいたづら男あたり近所を喰ちらす
わたしや祭のうしではないが人のはやしにのせられる

雲はまかつがおまへのやうにくだは誰でもまかれまい」(七十三才)
ぬらりくらりと日向の蛇じやからいうき世はわたられぬ
酉のまちもつた熊手についひつかゝりけふもぶらりと日をくらす

田畑つくつて田舎のすまひほねはをれても気が安い
竹田あふみをたのんて来ても恋のからくりやむづかしい

恋の初荷を車をくりいるのとなやといはれたい
しんの夜中にふと目をさましきけばとなりの小なべ立

ほかの草木のしをれて後に松のみさほのよくしれる」(七十四才)
雪の寒苦しのいで今は花の兄きのわらひがほ

ほどやどけうにや迷はぬけれど実をつくせば闇も月
乗合の舟をまつ内ぬしやどちらへと詞かけたがゑんとなり

初夢にぬれて嬉しきアレ床の海だからふねかよふくの神
せじでまるめてくぜつでだましいまのはやりの鉄炮玉

小づまとる手で糸針もつてかんにん袋をぬへばいゝ
酒も肴も只そのまゝに」(ママ)」(七十四才)

まとまらぬはづさ出雲で氏神さまがひとりこせつをするやつす
人の文見るにつけてもかうしたことありしむかしを思ひだし

似てもにつかぬはなしはいやや鴨とあひるは直(ね)がちがふ
ぬしがあるから世間がもめる七両二分出しや己(おれ)がもの

うそとしらずに百(も)よもかよふあなのないのにきがつかず
かつがれる事としりつゝつい真につけてあとじやなぶられわられる」

(七十五才)

銭がなくなりやどちにもなるよかけた日なしを切かへる
おもひ定て切文(きれぶみ)かけばとかくなみだで字がにじむ

玉のこしにものる気であれど今にむかひの手間がとれ
ぬしとわたしはひやうたん鯨たしかかしまでゑんむすび

鐘のくやうに何つくものかわい男の目をさます

かねてふたりが死ぬのはせうちけふは友びき目がわるい

うそと遊女とつねにはいへどこれはまことよ (まる) じるし

きせうせいしは肩やへうつて (ママ) (七十五ウ)

くろろするのはからだに障るつねの持薬にへいき散

文をやるにもかく手はもたずまさかこん弱 (にやく) 玉も投られず

立てさはぐなやきもちほどはさきでおもはぬうはきもの

わるじやれさんすな強飯 (こはめし) ヤいやよきばがへりが五六人

わたしや出ぎらひ芝居もいやよじつは常きかはれぎなし

つれて逃たは薪屋の娘親がかたぎでわからぬへ

此ごろはやうすがちがふとじろりと見られ胸へうたるゝ五寸くぎ (七十

六才)

ぬぬを見こんで逢にきた己 (おれ) にだんなののろけもよしてくれ

かわいそふだよけふ此頃ははたで見える目もいぢらしい

礼義いふうちやまだたのしみよ今じやたがひにやけばかり

むりな願をむすぶの神へすへのおれいはふたりづれ

ぶたれながらも其手にすがりじやけんも時によるわいな

この頃アあきれて涙もでないすへにやわたしも共なんぎ

あいさつしだいで義りある人をよしておまへに情たてる

切てしまへば根も葉もないが (七十六ウ) それじゃくろろつしたかひがな

い

ゆふべわかれて間もなく初会いやな座しきのせじわらひ

ゑゝもいやだよじん助らしいあんな人にも出にやならぬ

しちおたふくめとかん癩おこしうてばりもひもわかるかへ

ひよつといふかと大綱きせてこわい手くだのせめ道具

わたしひとりで血道をあげておまへは平気でまぜてゐる

やさしいやうでも他人はこわいひとつまづきやむかぶづら

いちかはちかをいふのはよいがそれじやおまへを困らせる (七十七才)

せけんなかよくおまへも立て丸くをさめるさばきやく

ぐちはおよしよとつちかどうと論はないぞへ五分と五分

やさしいやうでも隔た中はどこかことばに針がある

いふにおちずにかたるに落ちていつかとらるゝことばじち

さかねじにいひくろめてもよはみがあればせうちしてゐてまけてゐる

たのみない身はついり安いこはい他人の口ぐるま

みれんをかくして逢ずにゐればはたじやさめたと焚付る (七十七ウ)

行平さんでも世に捨られてしほくみふたりがみやづかへ

若葉かくれになく時鳥月がないたか雲の中

しらでいはずによそごとらしくつらいぬけんのとほまはし

世間さはがせ手がらにやならぬなみかぜ立ずにはなしあひ

さアおかへりよと羽をりをきせてかへしやかへるか義りしらす

ことばで迷はせしうちてまるめ手だまにとられてはじかれる

たのもしい人をたづねてはなして見たらひろいせかいへ出るである (七

十八才)

さすがやり手もなみだを流しかむろが寝言に親の事

たつは蠟そくたゝぬは年きをなじ流れのすへながら

あへばいつでも気安めばかりしんのはなしをしやしやんせ

よせばよいのにもう今ごろは人のしらないくろろつする

まゝになるよでならずにあるはこいつはいづもにもめがある

斯 (かう) してこうすりやこうなる事としりつゝこうしてこうなつた

ほれたほれぬはまた初手のうちこうなりやなんだかわからない

家業だいに身を大切に (七十八ウ) しんぼしてくれ今しばし

かせぎ女房とせけんでいふになにがふそくでぶたしやんす

どふせやけだよかうなるからは親も主人もむかぶづら
日にましおかずのまづいにつけてもとの主人を思ひだす
連はいそぐしはなしはのこるをくるろつかのせわしない
西も東も南も北もいつもごぶしでおめでたい

うらや初会はつれしゆがたより今じやつれ衆が邪魔になる

金と紫やお江戸が出るむらさきやいらぬ金ほしや」(七十九才)

さいはい手にもち纏(まとひ)のまねをしてはお部やでしかられる

ほうは誰が子だ名はさゝねどもちやんに其まゝいきうつし

秋の唐なすうまいといふがさつま芋にはかなやせぬ

ぬしの心は焚(たき)そこないのめしよしんがあるよで水くさい

をりるはしこのまん中ごろでしんぼさんせと目になみだ

親のいけんもきかないわたしなんで他人のそらいけん

おもふ拙者におもはぬきでんおもはせうとは拙者りふじん

あやまりましたよもう是からは」(七十九才)おとこねこでもだきはせぬ

やいたお芋にふかしたお芋どちらのおならがくさいやら

おまへそのよにもとまでいれて中でをれたらどふなさる

火鉢ひきよせ灰かきならしかたいもちでもあればよい

さきは大ぜいみかたはひとりたのむおまへはふたごゝろ

おまへを塵末にする気はないがやりてがわたしにこはいけん

あゝもじれつたい何をしてみてもかゝアとかせくよなことはない

あちらたてればこちらがたゝぬ両方たてれば身がたゝぬ」(八十才)

内はかんど二階はせかれなんいでいふめがでるものか

百度まいりを小舟ですればさしではれぬ事ばかり

あだも是ぎりもう惚じまひひとのろけを聞もいや

お店(たな)ものでも出番の衆でもやぼとゆだんがなるものか

いきな人でもふじつがあればすへはあいそのつきるもの

春のはつ日のゆたかにさして吞ばめでたいとそのさけ
せけばやむかとおへやの小ごとおちやをひくにはましである
泣ばまことゝお客のこけが」(八十才)いろのしをくりしまい札

けいせいも元は素人ひそうのむすめうそもま事人による

いへばとふやら催促らしくいはねばかへさぬかりた物

ひとのねがひとわたしはちがふ思ひ切りたい身のねがひ

はへば立たてばあゆめとそだてた親はおまへゆへでもすてられぬ

恋に上下のへだてがないといふは不義りのかつてづく

せじもぜつづもモウいひあきたお酌するのもしやくの種」(八十一才)

胸に手をあてしあんをすればあだな人ほどじつはない

子を思ふ親となる身のおすをもしらずけふは夜ざくら月見酒

たつを引とめマアきかしやんせ市にもちつき松のうち

送る茶やでもむねきなしかたあのこによばれてなるものか

しんの夜中にふと目をさましとなりざしきのもらひなき

ほつとため息びんかきあげてかねがほしさの此つとめ

あなたこなたのお他力さまでこよひまはしがみつつある」(八十一才)

弓のつるほどせいはいらもんではりに来てから此しだら

はづれた縁とて神さまたちがいつもで塵そうをしのんだろ

人形くびとてわらふはおかしたれしも男のいゝがいゝ

にやけた男はいやみだなどゝいふはをよばぬまけをしみ

惜みやせねともわたしの亭主どふも人にはかしくい

しよたいじみてもどこやら知れる親のゆるさぬふうふとは

雨あられ雪や氷とへだてゝあれどおつればおなじ谷の水」(八十二才)

達磨だいしじやわしやなければどもおあしのないので埒あかぬ

あかぬわかれも銭金づくさにくいかあひもさとのつち

をや寝なんすかくすぐりいとたぬきを狐がゆりをこす

こすにこされぬもん日とものびばかもなければ身がたゝぬ
をしをつよいが当時は徳かねとりヲしてからいるになる
なるはいやなり思ふはならず目でもねむつてさせやうか
こがれ死だら此くるしみはしらぬほとけとなるである
夜具もしかけもみな入上（いりあげ）て」（八十二ウ）ぬしゆへ年きとつ
みがます

おへやのいけんもてづめの仕置切ねばほどけぬしはり縄
実をつくすもふじつをするもこゝろひとつのさきしだい
ほどもよければ男もよくてそれでかねもち女房もち
したしき中にも礼義がだいじもとは他人のことだもの
夫婦親子の中よい家は奉公人までつとめよい

むかふがいやならこつちもいやよてんからむしがすかなんだ
たがひにひとり身何はゞかるふはれてめうとになるがよい」（八十三オ）
ひよんなうはきをするのも楽な糸ようすぎてのさいごのみ
中がよいとてゆたんをするるとんだ悪魔か水をさす

たのむと言れりや捨てもおけぬどふかしうちをつけてやる
酒はのめどもつゝしみ深く義りをかゝねば身がもてる
だまされてねこそげむしとられたうへにつき出されるとはくちをしい

今まであたまが押れてゐたがこれから世に出て楽をする
いやな辛防する気にならばこんな貧苦をしはせまい」（八十三ウ）
金利の上りで小いきなくらしふう小おんな朝寝して
のどへ出るほど唐なすおさつたべて見たいが身のねかひ

色のせかいをさらりとやめて是からふうふでともかせぎ
ねとるたくみの胸わる女人のなげきもしらぬかほ
うるさ過るとあいそがつきるりんきぶかいもほどにしな

何かにつけて邪まするやつは河豚（てつぼ）にあたつて死ねばよい

女房がいやでうはきをしたのじやないがきれていやならすがよい」（八
十四オ）

家のはん昌よしあしともに女房ひとりのむねにある

門の犬にも用あるたとへあいそづかしをせぬがよし

自由になるとわがまゝするなみつればかける世のならひ

神やほとけをしんじんしやんせねがひのかなはぬ事はない

不義りさへせにやせけんは広いたとへまづしくくらしても

なまじ互にあらたまるからをかくしく人の目にもつく

かん癩もちでもこつちの仕よう馬のたづなに舟のかぢ

親はふせうちわたしにやすいた」（八十四ウ）いきな人ならなまけもの

ふところがゆたかならねば万事につけてゆきとゞくとはほめられぬ

しらぬ旅ぢにくるうをしても人にひと鬼はないものだ

酔たしやツつらつくづくみれば齒くそよだれに筋だらけ

角をはやしした女房の手にはいつか文がらもつてゐる

朝の蚤とるねまきの姿糸の仙人死ぬたるふ

友だちのていしゆに惚てはすまないけれどしあんのほかならぎりもかく」（八十五オ）

蟹の色事鮑のまくら帯もとかいでせわがない

すゞみや付たりおまへの顔が見たいばかりのほたるがり

ちよいとお待なきものをお呉屏風のからこが見てゐるよ

鼻毛よまれてあげくのはてにとこるてんほどつきだされ

蟻の思ひは天とはいへどふたりがねがひの遅い事

人をおもふてふと飛のけばにくやせうじに猫のかげ

ちはが過たかあからむまぶちあとで嬉しい汗をふく

あはぬ此夜はアレほとゝぎす」（八十五ウ）ないて冷つくまくらがみ

先のうわきに二のあしふめばむねにこたへる事ばかり

つるのふうふの嶋台すへてせけんはれてのながまくら

色は男のはたらきじやとはあんまり気まゝな申ぶん

女房にげいしやの勤をさせてやきもちやくのも程にしな

やきもちいふのが気にさはるならうはきをちつとおたしなみ

じつところへてへだてた枕灯とりむしからはだと肌

御被(みそぎ)まいりに手を引あふてふたりが邪魔をばはらひたい(八

十六才)

貧にくらすは覚期(かくご)のうへよ今はたがひにじつくらべ

涕(はな)ツたらしとわらはゞわらへだれより女房はじつがある

人のめはしにかゝつた中をしらばつくれるもほどがある

今となりてはお墓へかいた赤い信女がはづかしい

梅にからまる源太の尻もゑんかありヤこそひつかゝる

実がありヤこそ角をもはやせやくは女房のあたりまへ

梅のさかりにすかしのおならてうどかほりがいゝかげん

足がものいふ互のこゝろ(八十六才)こたつに柱がなけりやよい

枕ならべて寝たときよりもかけののるけがきかせたい

ばかにのぼすな女房に鼻毛尻のいとめじやあるまいし

ひとりものならどふでもなるが義りある女房がかせになる

もとからいやならぶざけちやぬない何とか言てくれてもよさそふな

女房もちとて惚まいものかさがしてのりこむ下こゝろ

惚たをせうちで気やすめらしくをつにあやなす人じらし

どふでかれはいはるゝならば義りを立るにや及ばない(八十七才)

背中あはせにくぜつの果をてんじやうの鼠で中なほり

思ひきらふといふではないがおまへのこゝろが水くさい

女房の実意もみな水の沫(あは)それほどあのこがかわいゝか

いはずはしらぬが仏であるをなましはなして此うらみ

だんだんおまへのしんじつ聞ばやいたもいまさら恥かしい

としがちかをが女房があるがほどのよい人たれもすく

しらぬわたしをなぜ惚させる来たのがおまへのあやまりさ

花の兄イといはれた梅だ(八十七才)人にけぢめをとるものが

女房に質屋くどかせむり借させてなまけてゐるのもほどにしな

身にはおひへをまとつてゐてもこたつに着てゐる綾にしき

いろのあるのを初手からしればかうしたわけにはならぬもの

うわきと言れりヤ一言(いちごん)もないがおまへに見かへる初手のいろ

屏風ひとへのわり床なればしんのはなしはのこりがち

折角のごしんせつだがまづおことはりさんみやうさがしたやめにをし

(八十八才)

娘のいろだとまだ気がつかすりこつな人だと親がいふ

男だいにするほど親をたいじにしたなら誉られふ

ひよはいからだ(かせぎ)がたらず貧苦させるがいぢらしい

およばねついてもわけありどしはわたす羽子(はご)までしほらしい

胸のむらくもさらりとはれて二人しつぽりぬれたどし

なさけなく恋しい今宵夜着をさかさききて寝やう

奴々とあだなのわたしぬしにふられちや身がたゝぬ

女房にかくしてゐるその色を(八十八才)あらけ出されちややけになる

悪法かくのも男のためよすまぬせうちのわるだくみ

といきつくづくあんしてみればどふですへにはわかれもの

気安め真うけに鼻毛をのばしかはりのでけたもしらないで

ほれた女房のある其人になんでこんなほれたらう

逆もあへねば転寝宵寝ゆめであふのをたのしみに

なんぼ惚たを見透(すか)されてもばかにされては腹がたつ

惚てゐるのをしつてはあれどお気のどくだがおことはり(八十九才)

松にたち鶴さくらに暮ようめにさへづる匂ひ鳥

ほどもよければ男もよいがしみつたれにはこまります

呑ぬせうちでいつばいついだ酒はすけたい下ごころ

しんの涙でぬらした袖をぢん助だますに又ぬらす

すへ膳のはしをとらぬはお腹(はら)がよいかたゞしや女房がこわいのか

やつかいものだよ狎猫婆(ば)ア(口を出すのがこつるさい

朝がほやあした咲のをひねつておいてぬしの(八十九ウ)ぬしの(マ

マ)寝起の花にする

松にさへつるあの鶯は茶人のなかまか風(ふう)ちがひ

くよくよと思ふちやあれどこころの鬼めが身を賣る

買氣(かふき)で女郎がかはれるものかかはれるこころでかふがよい

恋はくせものしあんの外といふは浮氣のゑてがつて

わり床のぢがねばなしをふと聞つけてわが身にひきべつもらひなき

世の中をなんのへちまとおもふてあれどぶらりとしてはくらされぬ(九

十才)

愛想もつかさす手切もとらず兄やいもとでわかれたい

おてんば娘と人には見せてないしんじみる人がある

たよりにない身で此河竹のすへの流れをくむわいな

義りづめいけんであい切ませうとくちとこころのうらおもて

炭をつぎつき火ばしを筆にあつい男のかしらもじ

枕はづして涎をたらし寝ごといいひひ屁をたれた

しのびあふにも此道ばかりやとしに似あはぬちゑがでる

流れの身じやとて蠟そく氣どり(九十ウ)そんなにこぼす事もない

ほども男もしうちもよいが金のないのが玉に疵

今の娘は佐用姫ならで石よりかたい金になる

風のとよさに切ても見たが又もむすんであげる風

こしてあげよと手を引よせて酒もたばこも口うつし

酒がこうじてふとした坐興命やるほどほれはせぬ

明の鐘つく坊(ぼ)さまの憎さ茗荷しこたまくはせたい

鬼も十七ばん茶も烹花(にばな)どつかいるかのあるものだ(九十一

才)

義りと情のふたす道はゆけばゆくほどしんの闇

よこに車を押とほしても女房にもらはで置ものか

縁が切ても心がのこり暮て見に行はつのはり

親のゆるさぬ夫婦の縁も実がありやこそ添とげる

金でかはれる苦がいの身でもほれりや素人(しると)も同じこと

山家そだちの芋堀こそも金をもたせりや旦那さま

人の惚るも何にくかるふ初手はわたしも惚た人

いつもの癖じやとせうちはしても(九十一ウ)腹がたつゆへ茶わん酒

せけんははれての夫婦となりてお礼まいりにふたり連

ほれたほの字は仏のほの字死んでもぬしはわすれない

「いやになるぜ(ことばステ)わらかしやがるといはれた義りかおまへ

じやめんびもかいてある

是はおあいだわらかしやがるよとうによかつたのがあるそふだ

いやになるぜ おあいだ よかつたノたくひはたうじのつう言也

あどけないのはかあいゝけれと初心すぎるもじれつたい

ほんになまなかいづもの神がむすひばなしがなさけない(九十二才)

ふとしたことからついい気が迷ひ人のしらない此くろう

義りとせけんがしみじみつらいあへばあはれる中ながら

いふも古いがあれじれつたい憎いからすがなくわいな

不実する気はみじんもないが先のこころが水くさい

ぎりで切てもかはせたきせうすへはたがひのむねにある

つとめする身とさげすむ人にいるとなさげがあるものか

男ばかりに気まゝをさせてほんに女子（おなご）をかたおとし

ぐつと抱しめ顔さしよせて」（九十二ウ）千代といふ口すいたどし

ぬしのかんしやく日頃のくせよそふてわたしがなほします

ぬしの遅いにわしや待かねてとがなき楊枝をかみ砕く

問答 ことば印 男 女

おまへゆへこんな苦るふをするとはいへどほれたおいらのこゝろがら

ほんにわたしも惚ずにゐたらぬしにくるうはさせぬもの

くるたびくるたび只めそめそとなくはおどすかあまへるか」（九十三オ）

たまたまくるくせ邪けんのことばすへをあんしてなくわいな

せじや気安めいはねへおれだほかにうはきもせぬおれだ

よくもいはれたうはきはせぬとことしばかりも五六人

あれは一座のつきあひあそびうらもかへさぬかひはなし

ついちやぬはせずなんだかかだかわからないのでおちつかぬ

わからないとて捨おくきならよほどためへもごしやうらく

もうあやまつたこちらをむきなうしろあはせでうそ寒い」（九十三ウ）

いとしかあいの思ひをこめてぬしへあげます此ちよこそ

いとしかあいの思ひはをなじいたゞきますぞへ此猪口（ちよこ）を

まゝになるなら鏡になつてぬしのおかほがうつしたい

おもふ事つづる鏡が世にあるならばぬしに見せたいむねのうち

峯のさくらは美しけれどわたしや麓で見たばかり

塩のあずきの大ふくもちをくさしながらもむしがすく

かぼちや治郎とおもツちやぬれとおつにうまみのあるおとこ

鰻のやうだとわるくはいへどだいて寝て見りやあつたかい

なんのかゞしと安くはしてもなくちやかなはぬ田の守り

おなじく尻とり

さらべおけけふとつまりてその気やすめを聞ておちつくどぢぢやない

いたらぬわたしが心のくがいうはべばかりをはでにして

手ふりあみがさは是此ぎまに」（九十四ウ）したがてがらかきれことば

はなしもきかずに又かんしやくのやけじや理道がわかりやせぬ

ぬけつくゞりつ其いひわけで今までばかした口のさき

きゝいれのないはいちづなおまへのきせうそれほどくやしきやどふなりと

とくとしあんをして見たあげくやぶれかぶれはたれゆへぞ

そうしたうはきが有ほどならばなんでこんなにぶたれやう

うしろゆびさゝれるしまつもおのれがふじつなんぼつとめのならひでも

（九十五オ）

もつれかゞりし此くろかみをといてむすぶもをりがある

るいは友とてほうばいまでもぐるでつきだすしたこゝろ

ろうかで切（きれ）たる此うはざうりたてゝみせるか女郎のいぢ

ちりにまじはる泥水とせいすむもすまぬもあるものか

かはる枕になさけはうれどはらまじやうらぬがぬしへぎり

りくつばるのもやぼとはしれどこけにされたとおもやこそ

そくらかはれて又ぐちらしくいぢめちらすもまゝにしな

ながれの身じやゆへ又よそほかへ」（九十五ウ）なびきやせぬかとあんじ

られ

れきれきのゑりにつくならきをもむものかつゞれなりともぬしのつま

まゝにしやがれ其気やすめもこれまでたびたびきゝあきた

たにんがましい何きやすめをおまへにたぬしていふものか

かゝあきどりがその口上をすへのすへまでわすれるな

なんぼわちきが流れの身でもいつたことばを水にやせぬ
万事わたしにまかせて置な龜の甲よりし功」（九十六オ）

おまかせ申すがおまへの氣しつ鶴の脛ではじれつたい
やばな己でも木竹じやなしさ松葉のめうとにさせてやる
それで嬉しい世間へはれて子をう実梅（みうめ）のいく千代も
以上

本編楮員（かみかず）余に嵩みたれば見るに煩はしき故に文句入の部は別冊にして又前後に分てり都鄙の通土前後を合せ需て懐にするときは争何（いか）なる席に莅（のぞ）むといへども心いき自在なり」（九十六ウ）かならず他（よそ）に見すごすべき普通の集にはあらざらまじ
隆興堂主人

歌沢能六齋誌

歌沢能六齋編集

流行哇輯目錄

哇松迺声 初編 かへうた付掌中本

全 二編 全

全 三編 全

全 四編 全

右三編四編は戊午年間以来春夏までの新うた加入」（九十七オ）

哇袖鏡 横本全一冊

あらゆる新古のはうたをあつめ且戊午のとし出たる新唄のこらす載たり

度独逸節用集 同

前編に出したり

新撰度独逸大成

もんく入前編」（九十七ウ）

同 後編

義太夫

常盤津

富本

清元

長唄

都

新内

歌沢

雑 うたひ ことば こはいろ はやりうた等さまざま入

この分前後にもらさずのしたり

右の外絵入葉本類数多御座候間御求御覽可被下候様偏二奉希上候

東都人形町

板元 品川屋久助」（裏見返し）

五、『新撰どゝ逸大成前集』（菊池蔵本）

「文句入」都々一節用大成」（表紙・題簽）

新撰どゝ逸大成 前集

もんく入前編

歌沢能六齋輯

当世堂梓」（見返し）

この集はもとより文句の新古に拘らず作意の能人情に通じたるを数千萬章えらび成してひとつのとちぶみに（な）さまく計りつ既に大成と号しかども尔（さ）では紙数いたく嵩みてすき人の玩ぶにも寔に不便なるのみならず書

肆（ふみや）が胸にも一物ありとぞよりて前後集をかくのごとく前後四冊に分てもみな是一時の手輯にして殊に倉卒の筆記なればなほ」（口ノ一オ）漏脱もすくなからず并（そ）は拾遺編にあらはして亦前後冊と（な）さんのみ

安政七庚申のとし花月のなかば沙量（げこ）なればこそ甘口なあべ川町に飯ずまひして与次郎氣どりに飯こしらへしつ猿にもをとる梅星爺の

鰥寒翁まじめにするす」（口ノ一ウ）

目録

義太夫 唄員十有七章

常盤津 唄員四十四章

富本 唄員三十章

清元 唄員四十八章

長唄 唄員三十五章

一中 唄員九章

通計一百八十三章」（口ノ二オ）

天明九年出版の洒落本「自惚鏡」「振鷺亭作」の巻中に（金）エ、く、くしよつめ（ハ）「ほうかむりをしながら」（唄）わたしやかさのしよつでさすきじやけれどおまへげたのしよつではきたがる云々とあるは今のねんねこぶしか蓋ねんねこさいさいはど、のひなびたる節といふべし

（絵省略）

こは右の自惚鏡に載る所の縮図なり」（口ノ二ウ）

度独逸大成後集前冊

歌沢能六齋輯

文句入の部

義太夫

男につくのがおなこの道よ「しち店ノ段」とどろかす胸も板えんそろそろ

としのびいでたる娘気は恋路のやみのくらまぎれ（不孝といはりよがなんのその

のぼりつめたる二階のはしこ「てらこやノ段」あすの夜たれかそへぢせんらむうめ見るおや心つるぎと死出の山こへてあさきゆめみこ「ちして」（一オ）「いまさら目がさめあきらめた

こゝろがから浮気なぬしに「をかぎきノ段」ア、コレ申シもふ何にも申シませぬ顔は見ねども云なづけの男持のがうるさ、にやしきをもどつた其時から尼になる気でけさ衣けふ一ち日に気がかはり染ちがふたるかね付の元のしら歯とすみ染にそめ直してもはがしてもおもひそめたばんなつ（わたしでわたしの気がしれぬ

人めしので恋ぢの関を「新口むらノ段」それはうれしうござんせうさりながらわたしがと、さん」（一ウ）か、さんは京の六条じゆずや町（こへてたふげの又くろつ

きるに切れぬ悪えんなれば「おびやノだん」わたしも女子のはしじやもの腹もたつしりんきのしやうもまんざららぬじやなければともかわい、このに気をもませわづらひでも出よふかと）どふかしなよくするがよい

もとゆひの切てしまへば根も葉もないが「白木やノ段」そりや聞へませぬオ三さんおまへとわたしが其中は「二オ）きのふやけふの事かいなやしきにつとめたその内にふつと見そめてはづかしい恋のいろはをたもとから）きけばき、ばら腹がたつ

およばぬ恋路としりつゝほれて「すしやノ段」たとへこがれてしぬればとて雲井にちちかきおん方にすしやのむすめがほれらりよか）とはいへ女房のあるおかた

秋の夜風の身にしみじみと「いざりせんべつノ段」つきそふわたしは女子の身ちからにおもふぬしのみは腰ひざぬけて足なへ」（二ウ）となりやつれたるふうぶがるろつ）たれをまつむし音もほそく

蹴のかぶむのかぶつならぶちな「せんだいはぎ」(なんともないとじつめん
づくりなみだはいづれとおさなきにほめられたさが一ツばいに)おまへにま
かせた此からだ

やぶれかぶれと身は三味せんの「あだち三ノ切」(おねがひ申奉る今のつき
身のはづかしき父うへや母さまのお氣にそむきしむくひにて二世のつまにも
ひきわかれなきつづし)「三才」たる目なしどり(くろうつするはづ親のぼち
すまふとりをば男にもてば「いな川」(江戸長さき国々へゆかしやんすりや
其後のるすはなほさら女氣のひとりくよくよものあんじ夫にけがのないやう
にといのる神さん仏さん妙見さまへせうじんももどらしやんして顔見るま
で)かた時こゝろはやすまらぬ

おもひ切とはむかしのことよ「ほり川」(そりやきこへませぬ伝へるさんお
ことばむりとはおも)「三才」(はねとそも逢かゝるはじめよりすへのすへま
で云かはし互にむねをあかしあひなんのゑんりよも内証のせはしられても
んにきぬほんのめうとゝおもふもの)おもひきられる義りかいな

おもひつめたる氣はひとすじに「あさがほ」(またも都をまよひ出いつかは
めぐり逢坂の関ちをあとに近江路やみの尾張さへさだめなく恋し恋しに目を
なきつづしものあいろも水鳥の陸にさまよふかなしさは)「四才」ぬしに
どぶしてあはれよぶ

そんなつれない云わけばかり「しちみせ」(おそめは顔をふりあげてそりや
曲がないどぶよくなたかいもひくいも姫ごぜのはだふれるのはたゞひとりお
やけうだいもふりすてゝこのごにつくが世のおしへ)女ていきん見やさんせ
女ごゝろのたゞ一トすじに「のぎき村ノ段」(あんまり逢たさなつかしさに
くわんおんさまをかこつけてあひに北やらみなみやら)きて見りやつれない
事ばかり「(四才)

人のいけんも火水のせめも「ことせめノ段」(さらばといふ間もないほどに
せはしないわかれぢはむかしのきぬぎぬ引かへてもめんもめんとおちぶれ

し)かうなりやなほさら切られぬ
おまへの浮氣をしりつゝ惚て「かみぢ」(なかしやんせなかしやんせそのな
くなみだがしゝみ川へ流れて小はるさんくんでのむわいな)りんきするの
ぬしのため

常磐津

ほれた性根をついうちあけて「かつら川」(はづかしい事岩はしのよる)「五
才」(のちぎりもあだまくら)もつどうあつても切はせぬ

にくらしいほどやさしきゑがほ「同」(なんにもいわずふりそでのたもとか
ざしてかほのぞき)これがほれずにあられふか

ほどがいゝからうわきがこはい「いなか娘」(こちも木竹じやなければも仇
なゑにしがむすばりよものか)しんじつなさけを見たうへで

あまへたれるもわがまゝいふも「かつら川」(ちいさい時からおまへにだか
れ手ならひせいといはしやんしておてほんかいてもらふ)「五才」たがいの
いろはのおつしやうさん(おまへのほかにありはせぬ

ほどがいゝからついまはりぎも「?」(いつかとけゆく女氣やたがひにあか
すしんじつの心に錠をかみわけて)きつと浮きをおしでない

したふねがひもさきへはしれず「五人ばやし」(ぐちなくりことあどなさに
くひさき紙のゑんむすび)むすめごゝろにやむりもない

恋の風ひきやアこゝろもせまく「せきのと」(おもひにたへかねひとふでと
かきそめしより明くれの)「六才」文のたよりをちからぐせ

月のすみだのゆふべにぬしを「たきやしや」(見そめてそめてはづかしの森
のしたつゆおもひはむねに)とけぬくろつが癪となる

わけをいふても氣ばかり引て「うとう」(千づかもあだに朽よとはあまりに
つらきこゝろざし)どうしたら思ひがはらされふ

くぜつしながらとけるも早く「まさかど」(をびかくさるゝたはむれもにく
うはあらぬうつりがに)かへしやさみしい床のうち「六才」

あきがきたのかおまへの邪見「どんつく」(なまじかつせぬはじめならおもひきる瀬もあるふのに)「わたしやししみじみかなしいよ

口へ出さねど男のくろう「いな川」(おしてははれぬもつれがみびんのほつれをなでつける櫛のむねよりつまのむね)「ないて見てあるときでないかむるだちにてはねつく娘「忠のぶ」(ひと)「にふた」身はよをしのぶいつかむかしのさゝめごと」(どこのとにそふである」(七才)

袖からおちたる文とりあげて「せきのと」(これ此やうにはじめからきせうせいしをと리카はしふかいおかたがありながらかへしておいてまたわしに)いろよいへんじはあきれるよ

ほどもきりやうも勝(すぐれ)「たおまへ」同「いつたいそ様のふうぞくは花にもまさるなりかたちかつらのまゆずみあをふしてまたとあるまいおすがたをおくげさんがたおやしきさんおふくの中で見そめたが」人のほれぬがわからない」(七才)

わかれのつらさにかみかきあげて「しのぶうり」(二世のかためとだきしめてつい手(た)まくらのそけがみ)あゝもじれつたい明のかね

七ころび八をき山ぢををほつかなくも「むねきよ」(やがて小はだの山こえて馬はあれどもかちはだし君を思へばゆへぞとよあるくものには花もみぢはなのでぐるま手をひきて)「またもぶゞきに袖ぬらす

ふとした系にしがかさなりあふて」(八才)「大江山」(二世を三世とみだれ合その夜はわかれて矢ぶみに日ぶみまたのげんに夜いくさせんとしらし屏風をこだてにかまへいまやいまやとまちかけたり)かたときあはねば気がかゝる

ぢれつたいほどおもはせぶりな「？」(いなかもじやと思ふてからにあんまりなぶつてくれめすなじたいそさまのやうな美男をとこのくせとして女子たらしのすてことば)「こちも木竹じやないわいな」(八才)

かぞへられたるものゝぶさへも「一人かげきよ」(ねびくわんを出しにして

夜ごと日ごとのかちまふて雨にもゆきのぬれ事はちつとせんぞへ申わけたらぬくぜつのしのこしを今宵はせひにござんなれ)なりもしどなき雪の朝

ぐちがかさなりまた目もうるみ「はん七」(はるの雨またちらすのもはるの雨そらはれやらぬむねの戸をあけなば人の口のはにかゝるもままよまゝならぬ今のおもひをもしほぐさかく」(九才)「とやぬれし身のはては」(むねにもちこすよひの雨

実にしあんのほかとは是か「みつのおき」(きやくにせぬよのうれしさをうかぬかほして隠しづまなぶられたさのものをずきはきはづかしいじやないかいな)「まようこゝろはわれしらす

ふけて夜風の川おとほそく「おはん」(御いけどをりもかげすきやなぎのばゝをよこにみていそげばなごりをしこうちつまにもわかかれかねの音も涙ふくみて雨ぞふる」(九才)「あやにからまるいとやなぎ

うつりやすきは世の人こゝろ「みつのあさ」(つきよは夢のやるせなくちよきは矢をいるしほどきもてうどよいころ首尾の松ふねじやさむかるきてゆかしやんせわしがきがへの此小袖)わしのこゝろもさつさんせ

きぬぎぬにのこるたがひのくぜつのもつれ「小いと」(よふそんな事いままらにいわれた事かなんじやいなぢたい二人りは云なづけうきにわかれてかなしさは)「十才)「とけぬおもひのむねのあや

いふた一トことほぐにはならぬ「おかめ」(きくにおかめはなみだぐみそりやおまへなにをいわしやんすしうげんをしたといふばかりでそれなりにあさはぎ心のしれぬわたしゆへ)「ほかにしあんをおしのかへ

なんでもつゝめば包もしようが「おそめ」(おもひをつゝむふるしきもかたにはかるきてふてふのそでにひらひらたもとにひらりひらぐけをびも解かゝりこゝろもとけたかゝへ」(十才)「をび」(人目ばかりはつゝまれぬ

しづのをだ巻くりことながら「忠のぶ」(むかしをいまになすよしもがなたにのうぐひすはつねのつゞみしらべあやなすねにつれておくればせなる忠の

ぶが(こひのしらべのもつれ糸

三味せんの糸のもつれてどうなるものか「梅川」(かほつれづれとうちまもりそれそのよふにいわんすほどの梅がはが身のつらさほれた女子のせう「

(十一オ)がにはあだなつとめをじつにして(いまは人目をしのびこまたとへどのよな水さすみて「水うり」(おいてくれこゝがなだいのあづまつ子気もはゞびろなひぢりめんはだか百くわんしよふともはつがつをなら見のがさず(わしがこゝろはにこりやせぬ

うたゝ寐してさへしびれるものを「げん太」(あすなぶられふもまゝにしてこゝろでやぼなとこいそぎしこきもわきへなげしまだまぐらの下へ「十一ウ(やる手さへ)さぞやお手ゝがいたかるふ

手なべさげるもうきよのならひ「おはな」(とかくうきよはなアいろとさけ二道かけしあき人のあめにもゆきにも打になひあたりはづれぬ上かんやかたにはもちのこしつよくちぎりかさなるいろ上戸ゑひざめしらぬ下戸のとく)やきもちどころじやないわいな

なまじ初手からやさしくなくは「あはしま」(はでやうわきのなかでさへしんじつしの二世三世「十二オ)やくそくかたき女房気はつれしかるふじやないかいな(いまのくろうはぜひがない

ゑんもゆきあふ二人りが中は「おふさ」(むぎの青葉に風あれてきのぶのまゝのびんつきはのちの人めと立よりてあいたてなきのつげのくしさしもならはぬかちはだし二人りつれたもいんぐはどし(こゝろひとすじおなじみちつもる恋路のたふげをこして「夕ぎり」(ふゆあみ笠のあかばりてかみこの火うちひぎのさらかさぶきしのぐしのぶ草「十二ウ)しのぶとすれどいにしへの花はあらしのおとがひにけふのさむさをくひしはるはみだしつばもかみかびてこじりつまりし師走の日(越すにこそれぬとしの関

あきずあかれずそひ遂たさに「白ぶぢ」(おやのかたみのでんぱたやきみなほつらつにさんしてもいとしと思ふこゝろから三とせ此かたこなさんおぼへ

てござんせういけんがましいことゝはついにいちどもいわぬのは(いとしかたとおもやこそ「十三オ)

ぐちと枕をひよくにならべ「三かつ」(アレまたやつぱりそんなこといふてなかせて下さんすなこれがせけんになりふれたいるやうはきじやあるまいしよてはしられずしらぬどしわやくなゑんを神さんがひよんなおせわの其のちにつきぬゑにしを松のもん(いろとこひとのかげひなた

むりなことじやがこりや是ぎりよ「にいな」(そりやなにをいわしやんす今さらあによいもうとゝいふにいわれぬこい中はおもひ玉子のしんたきにかけたね「十三ウ)がひのいくひろか口にましふかくなるだけは(あだな浮名)のたゝぬやう

まだいろにそまぬまゝなるしら齒の娘「宗清」(たづねきそぢのたびまぐらはやうお顔のみやこをばかすみともにたち出ていつかあふみやみのはてもどふしなのなるあさましや恋のたふげもつするとは(かほにほんのりちるもみぢ

おためごかしにたゞうかうかと「小まん」(わたしにはにたちばな「十四オ)の香にせゝられてほとゝぎすあじなおふせを松の糸のつま戸をそつとあけかけておくのしゆびをば待合の夕だち風にむなさばき(それがこつして癪となる

せうちしながらつい待わびて「おつま」(かねもろともにしのびいではる風さむく身にしむもつれなやにくやその人をやつきりきりしまつゝじくれなるのはなとみへしもあいの夢つき世のゆめとさめ鞆の「十四ウ)ひと夜あはねば気をまはし

たとへ此世はあきらめやうが「一のたに」(此世のゑんこそすくとも来世ではすへながふそいとげてたべわがつまと顔にあて身にそへて思ひのかぎりこへかぎりなく音はすまのうらちどりなみだにひたす袖袂(二世のしやうこ)がわしや見たい

すへをわたしは待かねがふち「八百万」(五百ざき恋しすみだ川二ツならへし枕ばし其しゆびの松まつち山そふてみのわとあけくれに日本」(十五才) づゝみの神さんへむりなねがひも恋のちゑあさぢが原じやないかいな(はやく中よくめうと石

しらぬわたしをなぜ惚させる」しのぶうり」(すぎにし梅の花見月めみへはじめと手をついてふつと見あはすかほとかほ(来たのがおまへのあやまりさ

富本

いるじやいるじやとわけしらいとの「あさま」(そめて悔しきなれころもありしながらのひとつまへ」(十五才)「づつまそるへてしどけなく(ひざにもたれて愚痴ばかり

じつと抱しめ顔見合せて「にいな」(ぬれているますからさきのまつ夜はつらき床のうち(下になる手のいたいほど

たかいおかたに惚まいものよ「まつ風」(かはるまいぞやかわらじとあふせうれしきいらへさへ」(ごめんあそばせむぢまくら

いけんいふのはおまへのやばよ「おきく」(まことをいはずこのみちは「十六才)親のまゝにもならぬがならひ(義理もせけんもいるものか

たまに来てさへそのすねことば「忠のぶ」(宵に寝よとはきぬぎぬにせかれまいとの恋の欲)花にしらむがじれつたい

どんなうはきをしようもしれぬ「まつ風」(この心はあすか川ふちが瀬となりてりふりしれぬたとへ事(一日あはねば胸さはぎ

おもふにまかせぬ山ぶぎいろよ「むしうり」(われはおよばぬみのむしなれば父よとなかで」(十六才)恋に身をやつれはてたるきりぎりす(きつと思案をせにやならぬ

深くなりやふかくなるほどまゝにはならぬ「かぐらじ」(くどいふのがおまへのくせかなんぼそのよにせかしやんしてもあふにあはれぬあだ中をど

ぶがなしゆびをこしらへて(むりなあふせがなほたのし

したゑだのまゝなるはなはこゝろになくて「お七」(あいといふのも人めのむねにくよくよきをくばり」(十七才)そこかこゝかこゝろでははいまつわるゝふじの花こひにゆるしのいろならん(とどかぬ「すぢにくるうする見られ見らるゝ互のやつれ」(目もとしぼよるさりめんのふたへまはりのかゝ帯ついかたみとなりふりもわかばにくらきなつ「だちむぎぶくか

ぜもおつてかと行なやみてはたちどまり(袖もつゆけき旅「ころも中をせいたるあよしの川「ひなどり」(ほんにそれよくちでいわ」(十七

ウ)れぬこゝろのたけかねてしたゝめおくやまのしかのまきふでぶつじぶみこひし小いしくゝりそへ女のねんのつうぜよと(おもひこめたるいもせ山

二世も三世もそのさきの世も「まつ風」(かはるまいぞやかはらじとおふせうれしくいらへさへどふいふてよかるふやらおもひなをせばかこつ身をいのれどさらに神さんも(せうちでむすんだ縁と縁

そでのうつりがさて忘れぬ」(十八才)「白ふじ」(いかうへこそでかけ香もつとめの内のかざりやくいきぢたてことさみせんといしとのこに打つけ

て(いふにいはいれぬむねのうち

たまさかあふ夜はしみじみ嬉し「小むらさき」(ほんにしみじみうちあけていはねばすまずいへばまたやしきそだちのこのやほにまだゆゑうめのかこのこり(そでにあまりしはづかしさ

なんぼ此身があまじやといふて「松かぜ」(わらはゝわらへちつともそつともだいいないハゝ」(十八才)「エ、だいいないものをぬれてそひねの恋」る

もそも此ほどのおん情(おもひきられる義理かいな

こがれこがれてくらせばとても(かはすことのはむつましくありしそひ寝のいもせがはうきよをわたる花いかだはなればなれになるとも(すへはひとつになるはいな

ねがひかなひて気もおちついて「うすゆき」(こゝろせかれてたびだちに田のよしあしもないころもうらなきこひのま」(十九才)こゝろいつか女夫と

ならさかや(はやくもちたやしんぜたい

おもや思ふほどまゝにはならぬ(むしつり(すいなつき世のなんんなかをやばにくらしてまちまちのとくぬをまはるかげどう籠(る(なれもこひぢに身をやつしこと(野べになくむし身をこがす

女(ころのたゞトすじに「おなつ(むりなくぜつにわしやひかされてねがひかけたるあさくさはえんがあさいときにかゝり硯(十九ウ(ひきよせかくふみもなみだにうすきすみだ川(くるうするのも親のばぢ

わけもしら藤はひまつはりて「おしゆん(もとこのこひはわたしからしかけぶんこのうちあけていふたりやおまへもがてんしてねやのすまふの初(にい(まくら(しめてうれしくからむ憂

まゝにあふみはかた田のうらよ(にいな(うきが中にもたのしみは初会にほれてうらみわびほさぬそでだにあるものをかたいやく(二十オ(そく石山のそのつきだしのはじめから(あはづにつもりしひらの雪

あきの夜かぜが身にしみみと「黒木うり(いろをねがひのはなすゝきまねけばそれとおもひぐさくさかり笛にあらねどもきみがいる音にさそはれて妻こふしかのよるとだに(すへをまつ虫ねもほそく

どふあきらめてもあきらめられぬ(三かつ(あけくれおもふていまずるときいてとびたつうれしさに手をあは(二十ウ(すればその手をとりおもふことまゝならぬうきよなれ(むりなねがひもこひのよく

すぐるたもとをまたふりはらひ「伊左衛門(さりとは紙子ぎはりがあらいいらいひげばやぶるゝつかめばあとにしはすらう人むかしはやりがむかひに出るいまはようようなきなたのそうりをぬいであみがさの中のざしきにとふりける(かはりはてたる人(ころ

しらぬよそめにわらはゞわらへ(二十一オ(かみぢ(ぐちなおな(こにみれんなおとこよくあいほれのじつくらべよいはひぞりて夜中のくぜつないてしのぎのかうがいもをれてわかれのきぬぎぬに(ぬしとあさねがして見たい

あきのあふぎと身は捨られて「小まち(つらみながらまいとしさを深くさのはなすゝきつゆもおきいにわすられずこれまでまはりさむらぶぞや(つらいい恋ぢにくらうする

ほんにおもへばおまへとわたしや(二十一ウ(「おきく幸介(そのみづぶきのふでのいのちげをしからぬころのたけをかきくもりあとやさきなるふみのあや(きるにきらぬ身のつまり

つらいぐがいももう「二ねん「高尾(じつととめきのうつりがもなつかしうはないかないなつらいぐがいは夢のうちねんがあいてのたのしみは(いまのくろうをはなしぐさ

まよふ恋路に手をひきあふて「うめ川(いたはる身さへゆきかぜに(ゝゝゝゝる手さきふところへあたゝめられつあたゝ(二十二オ(めつ石はらみちをあしびきのやまとじさしてゆくそらや木々のこずへも紅葉して(ともに落葉とふたり連

見るもねたましそれのすがた「くらまじ(たれとねてきたみだれがみどこのいはとのむつごとをきかまほしやとよりそへばもとよりきやうきのうろつと(なさけしらずめにくらしや

清元

いろをあらためなかうど入て「(二十一ウ(くはいらいし(蓬らしいの島はめでたいしまでのこがね升にて米はかるしやのはかるしやのはかましやのはかまよの(ト今じやまじめなふうふ中

七ツ七ツにやかへさにやならぬ「まち人(ついてくりやるな八まんがねよかはひおとこといちやつきはむまいなか町じやないかない(おたなものかやぜひもない

これもやくそく惚たがむりか「おはん(はじめてこわいはづかしいあとでうれしい枕して(ねがほ見つめて肌とはだ(二十三オ(

梅にうぐひす中よきゑにし「くはいらいし(媒(なごど(をいれてしうげ

んも四海なみ風をだやかに(家内そろふてむつまじき

ないて心でこがれてゐるに「おはや」(つわきうぐひす梅をばすてとなりあるきのされごとに)実のないのもほどがある

にくらしいほどなせ此やうに「明がらす」(あふた初手からかわいさの身にしみじみとほれぬいて)こゝろでこゝろがぐちになる「(二十三ウ)

いやにからすが鳴てもくろう「(こん八)」あいた見たさはとびたつばかりかこの鳥かやうらめしや(たよりきくまで癩の種

異見いはれりやいはれるほどに「明がらす」(どふした縁でかの人にあふたしよてからかはいさの身にしみじみと惚ぬいて)おもひきられぬ恋のいぢ

金がものいふうき世のならひ「同」(きのふの花はけふの夢いまはわが身につまされて)ばかにされるが口おしい

ぶちつたゝきつせつかんせうが「(二十四オ)」「同」(すいた男にわしや命でもなんのおしかろぞつゆの身のきへば恨もなきものを)これぎりあはずにゐ

られふか
明のからすもかわいて鳴ば「おちうど」(とまりとまりのはたこやでほんの

旅寝の仮まくらつれしい中じやないかいな)はなれがたなき肌とはだふじゆがちゆへまこともしれる「同」(やばないなかのくらしにははたも織

候ちんしごと常の女子といはれてもとりみだしたるしんじつが「(二十四ウ)」「ふうふたがひにともかせぎ

こゝろ閑屋にひとめをしのび「おそめ」(つばみの花のふり袖も内をしのんでよふよふとこゝでだがひのやくそくは心もほんにすみ田川)みやこどりさ

へめつとつれ
実もまこともつくしたあとは「おはん」(あすまたぬ身の何かせんでうめい

寺ともたのまれぬよはうし嶋のうきよぞとはかなきことをかこつにぞ)なみだばかりで声もです「(二十五オ)

かうなるからにはわたしもげいしや「小きく」(しかもそのとき此うちでは

じめてあひの手も)ひくにひかれぬ意気ぢづく

肌と肌とをひつたりよせて「同」(しめてむすぶのゑんならでとけぬおもひとみ糸のをび)まはす手くびは襟とゑり

なみだもろきは女のこゝろ「(こん八)」けぶるやなぎのたばこぼんたがひに引あいかほそむけ身をそむけたる風見草「(二十五ウ)」「わざとすねるとしりながら

梅にやどかるうぐひすならで「同」(すいなゆかりとわれながらわがつま琴にかきならすおもひのたけの尺八も)ひとよぎりとは気にかゝる

しのを束(たば)ねてつくよな雨に「おそめ」(つちをしのでよつよつとこゝでだがひのくそくは心もほんにすみだ川人目つゝみの川ぎしをたどりた

どりて)きて見りやさほどのこともない
かはりやせぬぞへ若葉のみどり「(二十六オ)」「小しう」(松のくらいを見

かへりの柳さくらの仲の町いつしか花もちりてつとんと見せずがゝきの風かほるすだれかゝげてほとゝぎすなくやさつきのあやめ草)ぬれるたびたびい

ろをます
うれしさをふりの袂につゝめどあまる「(三ばさう)」「初にそいねのにいまく

らかはすことばもなんとゆてどうしてよいの口と口たがひに手さへとりかねの声がとりもちやうやうと明ゆくそらを月にして「(二十六ウ)」「くもと雨と

の床のうち
こひしさがつもりつもりしわがむねのうち「?のふじ」(まちはゆかしき

いろのかほよばな見るに心もふかみぐさぬれておもひはゆきの夜も)とけてうれしきとこのうち

土手を見めぐりあれ都鳥「梅のはる」(きみにあふ夜はたれしらひげのもりこへてまつちの山といほざきの其かねがふちかねことまたのしい中じやない

かいなおもしろや「(二十七オ)」「めうと中よくすみだ川

けふのあつさとゆふすゝみ舟「おさん」(ゑんのはしまであひそめてほかの

おきやくはなんのそのあきの七くさならねどもはなのいろかとそやされて
みづにあはずにぬられふか

なじみかさねていとしさまさり「おはん」(ほんに思へばきのふけふちいさ
いときからおまへにだかれ手ならひせいといはしやんしてお手ほんかいても
るふたる)「いろにいのちをちらしがき」(二十七ウ)

しのびのびてきた山しぐれ「やよひの花」(ふられてかへるばんもありそ
れでおやどのしゆびもよくとかくうき世はまにはならぬ)ぬれてしつぽり
夜の雨

むすんだゑにしがどうとかれふか「おはん」(みんな女子はいつしやうに男
といふはたゞひとり二人とはだをふれるのはどんなほんにもとどしのくさ
ぞうしにもないことをよふ見て聞いていたづらな)うき名たつのもいとやせぬ
しのびあひしはまだきのふけふ「二十八才」(おかる)「こんなゑにしがか
らかみのおしのつがひのたのしみにとまりどまりのはた「やでほんのたび寝
の飯まくらうれしい中じやないかいな)かけしちかひは二世三世

どんなき菊かしら菊なれど「おまつり」(初の一座のつれの内おもしろそふ
な口合にすいたがいんぐはすかれたも心に二ツはないわいなそのときあいつ
が口ぐせに)おもひそめ井のいろふかく

三すじよすじに世はわたれども「月雪花」(ゆき見に船と朝またき「二十八
ウ)うかれがらすにおこされてねむい所をきめつとはせじとつとめにゆがへ
りのあしだもけがにころはずやむぎなげいしやと立とふす)「ころろひとすじ
思ひつめ

はつの恋風身にしみわたり「小さん」(まだかたあげの三とせ跡ふねのうち
なるおなさけをわする)ひまもなまなかにませたやうでもどこやらにおさな
心のおもなふ)あけくれこがれてゐるわいな(二十九才)

川竹の身にも立たるくがいのまこと「よしはらすとめ」(ねんがあくのをま
ちかねてやつぱりしたばとよばれたく男ゆへならたのしみにくがいする身を

立るとはぎり一ツペんのあだつきはけつく心のもめるたね)すこしはぶびん
とおもはんせ

思ひつめたる気はひとすじに「喜せん」(わたしやおまへの政所いつかくは
ほつも一もりとほめられたさの身のねがひ)(二十九ウ)千代のすへまでと
もじらが

恋にや貴賤の別へだてなく「せんどう」(ゑそ松まへのおかたでもまたはあ
づまのわつちらでも心にふたつはないわいなこれもひとへにみなさまのおか
げで小いろも土地がらで)あだなうき名がまたうれし

三味せんの糸もみだれて只ひとすじに「京のさみだれ」(じたいわたしは深
川へげい子になりしはじめから店のおかたの出ばんにもよばれて一度二けん
ぢや「三十才」(屋しかもそのとき「のうちでぬしにはじめてあいの手も」
ころのこまのくるひぞめ

およばぬ恋とはしりつゝ惚て「袖がうつら」(こひのいろはをたもたらそで
へたのんでいゝかはし二世も三世もさきの世かけてちかひし中じやないかい
な)おもひきられぬ身のいんぐわ

いさみはだかは男のきをひ「さしうり」(はでなはつびのはづくるひしまの
もゝ引はいてくりややぶかならねど「三十ウ)さし売と見けなされてもし
やちほこをにらんで生れ玉川をぎゆつとつぶゆのあつまつ子)うでにやいの
ちのいれぼくる

はるさめにぬれてかはかぬわがこひごろも「安な」(ぬしはわすれてごん
せうしかも去年さくらどきうへて初日の初会からあふての後は一日またより
きかねばきもすまずうつらうつらと夜をあかし)「そらも心もくもりがち」
(三十一才)

むりなねがひもかなふてほんに「山がへり」(四ツ谷ではじめてあふたとき
すいたらしいと思ふたがいんぐはなゑんのいと車めぐりめぐりて大山もせき
そんなまのひきあはせ)うれしかるぶじやないかいな

いまはたがひに手いけのはなの「くはいらいし」(それとお七はつしろから
見るめかはゆき水仙の初にねじめのうれしさに恋といふ字の書そめを湯しま
にかけしふでつ花) 咲もそろひしいるざかり」(三十一ウ)

むらくもをまれていでたるあの月さへも「玉つさぎ」(ういたなみとよさん
やの小ぶねこがれこがれてかよはんせこいつはおもしろおれさまとしやれる
したよりぶつぶつのうのうこれはもなきつゝら(千ひろのそこまでうつるか
げ

じつにつれない人目のせきや「江戸ざくら」(恋のかなめはあふよのしゆび
よそつと二かいの九ばしごすいがらの火で顔を見るはかないが恋ぞつじやい
な) わかれかねの音あげがらす」(三十一オ)

ながれわたりの世は気さんじや「雨乞小町」(女たいふと夕立のはれまいと
ふてとり出す身は三味せんのかはゆらし月待日まちだいまちや其町々をかど
づけも) あだな世わたりばち当り

よくよくな深い糸にしかおまへの事は「おそめ」(ちいさいときからなまな
かに手ならひまでも一ツと何やらさうしへかいたのをそなたに見せてとふ
たれば恋といふ字といふたのを) わするゝときはないわいな」(三十二ウ)
男ごゝろにあき風たちて「やす秀」(あだにくらしいなんじやいなおきよ所
のくらまぎればんにやいのとみゝに口むべ山風のあらしほどぞつと身にしむ
うれしさも) いまは野すへのかれ尾花

たとへ一チねんあはねばとても「二人奴」(そもや二人が中々は心でこがれ
まち明しあふて嬉しきもどりが互ひに胸をうち明てきも合はれのすいたど
しかはるまいぞと云しでのかみがみさんへちかひにかけ」(三十三オ) すへ
はめうとゝなるわいな

しつぱりと降夜うれしき此さみだれに「四季さんば」(きみがゆかりのいろ
見ぐさうつるふみづにかきつばたいけのみぎわにつるかめの氣にしうれしき
おどりばな) ぬれているますあやめぐさ

松と竹とのよろづ代かけて「栄のはる」(むすぶ糸にししいもとせも命なが
かけもろしらがまでかはらぬ中とむつまじ月のだて小そで) 恵方まいりも
うとづれ」(三十三ウ)

長唄

ふみじやたがひにたりない用事「あたか」(笛になりたやしのがよのふへは
おもひの口うつし) あふたらはなしもあとやさき

初手の氣やすめまうけにうけて「江のしま」(こちは姫貝ひとすぢに女)ゝ
ろはさうじやないわいな) 当座の花とはあんまりな

ひとめはゞかり時たまさかに「まつ風」(あふた其ときやついころびねの帯
もとかいでそれなりに二人がすそへ」(三十四オ) かりぎぬをかけてぞたの
む睦言に) かはひがらすのなくまでも

いとらしいと思ふたよりも「かむる」(こひのたねまきそめしよりいと
いふことばはいづれ此さとにまことこもりしひとくるはまるいせかいやすい
のよに) ぐちにうらんだ神仏

青柳の風にみだるゝあのあらひがみ「汐くみ」(いつかうれしきあふせもと
きみにやたれかつげのくし) (ママ) (三十四ウ)

氣づよいおまへに心のたけを「正札付」(やばなちからはおくの間のうはき
らしさのしんきぶし女子のぐちなしんじつがとゝかぬことかまつよはもぶと
んかさねてきたへの枕の土ひやうけせうがみ) ゆふてしまだのもつれがみ
のほりつめたるわたしが心「あたか」(しのゝめはやくあけゆけばあさぢい
るづくあらち山けいのうみや居ひさしき神ぐきやまつきのめやまなをゆ
くさ) (三十五オ) きに見入たるは(こひのとぶげをこへかねる

むりなねがひのしほだち茶断「小原女」(こひにはやせの里そだちのきのす
だれのゆかしさは玉たれがみをとりあげてたれに見せうとてゆふげせう) (み
んなぬしへのしんぢうだて

きてはちらちらすがたを見せて「あづま八景」(はるかあなたのほとゝぎす

はつねかけたか羽ごろも松はてん女のたはむれを三保にたとへてするがの名あるだいのよせ」(二十五ウ) いのいや高く見おろすきしのいかだもり) みづにくらせばあきらめる

こひにこがるゝわたしのこゝろ」さぎむすめ」(えんをむすぶの神さんにとりあげられしうれしさもあまるいるかのはづかしやすまのつらへで汐くむよりもきみの心はとりにくいさりとはいじつにまことゝおもはんせ) ちつとはさつして見たがよい

そもおぼるに月かげさして「まひ扇」(梅がへはるのこゝろや花のかを見せつ見られつ」(三十六才) その口より千代もおふせのひめにまつ三度もくどうかへすがきおもひのおくじやないかいな) まつに來ぬ夜のじれつたさこひのやみぢにふみまよふ身は「もゝよ車」(百夜かよへどゆぶづきのかさにふるゆきつもるゆき恋のおもにとうちかたけなみだのつらゝとけやらぬきみのこゝろはつきよ川) よるべなきまであこがれる

見やしやんせあれ驚のかたことまじり」(三十六ウ) 「あはしま」(きみははるさく梅の花かほりゆかしきねやの戸にはて恋じやもの小六小六ろくついたり竹の杖もとは尺八なかはふへ) ゆかしいねいろじやないかいな

ついちやみられずエゝじれつたや「けいせい道成寺」(まぶの男はつらにくやだいてねたときやわれならで外の女郎にやあはぬといふてたましくさつたがくやしうてならぬ) つとめの身なればまゝならぬ

いろのいろはをかきそめてより「京がのこ」(恋の手ならひついい見な」(三十才) らひてたれに見せふとてべにかねつきよぞみんなぬしへのしんぢうだてヲゝうれしうれし) かたときわするゝひまもない

わかれりりやあふ日を又まちなかて「よし原すゞめ」(ふみのたよりになアこよひごんとそのうはさいつのもん日もぬしさんのやばなこじやひよく紋はなれぬ中じやとしよんがへ) そはぎやむまい此くろ

千代もかはらぬいろふかみどり「老まつ」(まつのお太夫のうちかけは」(三十

七ウ) つたのもやうにふぢいろのいとしかわいもみんなみな男はいつはりじやものすねて見せてもそのまゝよそへあるよひそかにつき命の) まつとしらぬがさよあらじ

しらぬわたしにおまへの指南「花ぐるま」(はつこひの人めはづかし花もみぢしのぶの山のしたもみぢうすいはいやよこひごろもむすぶ象にしは神さんの) おしえさんしたさゝめごと

いろといふ字をおぼへてからに」(三十八才) 「とも奴二上り」(おはもじならざるかたへほのじとれの字のなぞかけてほどかせたさの三象のおびとけてねた夜はゆるさんせアゝまゝようきながどふなると) かたときあはずにあられふか

まよふわたしに気やすめばかり「おかね」(こよひかたゝにおいそのもりとへんじしがらぎまたせておいてまだなこじやと心でわらひつそをつくまのあだにくらしい) みんな男はつみつくり

かたいかたためも年にはませて」(三十八ウ) 「外記さる」(これはなにはにうき名もたかきかわらばしとや油やの一人むすめにお染とて年も二八の恋ざかり内のこがいのひさ松としのびしのびにあぶらを) しめてむすびし象んのつな

わたしやかた田のかたおもひにて「ふぢ娘」(おとこ心のにくいはほかの女子に神かけてあはずと三井のかねごともかたいちかひの石山に身はうつせみのから崎やまつ夜をよそにひらのゆき) あはつにこがるゝ矢はせげね」(三十九才)

よくもそろふたふたりが象にし「した出しさんば」(さてこんれいの吉口は象んをさだんの目を象らみくるにもつはなににやるなるりの手ばこにさんこのくしけたまをのべたるながもちにかずもてうどのいさぎよく) 千代をことぶくまつと竹

あはぬ日はふみのたよりが心のやるせ「門けいせい」(かけてもほんにかは

るとはいふてもおくれなつくづくとおもやつとめのつれしい氣にし「こゝより
ほかでぬしにいつ」(二十九ウ) あはれぬなにかきかはすうゑ様のち
わぶみも(ふでの手まへも恥かしや

かはしたきせうはありやなんのため「高砂たん前」(たとへ万里はへだつと
もしたふ心はそりやいわんすなあさなゆふなに空ふく風もおちばこるもの袖
ひきまとぶおもふとのごはつれなの身にし「わたしばかりはかりやせぬ
おとこ心はつれないものよ「はま松風」(うらみがほにもなんにもいはずみ
ぶのたゞ見はきをはるみちのつらきつきみに」(四十オ) おほ江のちさとた
とへどなたが水さそつとも) おもひきられりやほれはせぬ

あだし枕はつとめのならひ「しう着じ」(あさなゆふなにうつすかゞみの
よい金性とわしは水性でおまへとふかいそれをつたがふことかいなさりと
柳にやらしやんせ) すゑをたのむはぬしひとり

つもるはなしは又なくなねよ「二人わん久」(ほさぬなみだのしつぽりと身
にしみじみとかはゆさのそれがこうじたものぐるひとてもぬれたる」(四十
ウ) やみなりやこそおやのいけんもわざくれと(いまはふたりが身のつまり
むりなしゆびして人めをしのび「汐くみ」(あふたそのときやついこるび寝
のをびもとかいでそれなりに二人がすそへかりぎぬをかけてぞたのむ睦言
に) こゝろもつけてはだと肌

ふゑやたいこで其日をおくり「越後じ」(うき世をわたる風雅ものうたふ
もまふもはやすのも一人たび寝のくさまくらおらが女房を」(四十一オ) ほ
めるじやないがまゝもたいたり水しごと(くれるまもなくよひまつり

もしやさうかと顔さしのぞき「あさづま」(そりやいわいてますまぶぞへす
まぬくぜつのいひがゝりせなか合せの床の山こちらむかせて引よせてつめつ
て見てもこぐ船のあだしあだなみうはきづら(しやくがとりもつ中なほり
かわい男はなせまゝならぬ「鬼? 拍子まひ」(そついわんすりやおまへひと
りがしんじつでわしが」(四十一ウ) こゝろにあるとあらゆる神かけてかは

るこゝろはないものをおまへはうそとおもわんすそれでもわしやなをかわ
ひ(しぬほどほれたが身のいんぐわ

つゆのなさけにこちやぬれそめて「諷まつ風」(月のくぜつかほたるのりん
きもつれもつれてとけかぬるきみがひと夜のなさけはつらやけつくおもひの
ますかゞみ今ははづかしみだれがみ(みだれ心にものおもひ

ひとり寝にうつらうつらと」(四十二オ) みじか夜ふかし「きく慈童」(恋の
いのちははつほとゞぎす月のかげさへそらなつかしき二度のあふせはしくれ
のもしみ見れば其まゝかほに火がたかいもひくいもいるのみち) なかぬむし
さへ身をこがす

きみのためとて身はやつせども「くはんじん帳」(人のなさけのさかづきを
かけて心をとゞむとかや今はむかしのかたりぐさあらはづかしのわが心一度
まみへし女さへまよひの道の関こへて今またこゝにこ」(四十二ウ) へかぬ
る(むねとせきとをあけかねる

都一中ぶし

おまへばかりが男じやないと「あさま」(千も二千も三千もせかいにひとり
のおとこじやとたのしむ中のわかみどり(いふて心でないてある

雲間がくれの三日月ならで「ゑのしま」(すがたは見せずほとゞぎすおもは
せぶりは誰やらが恋のこゝろをうつせ貝」(四十三オ) ひとりくよくよもの
おもひ

のかずは出世のお邪魔になろう「同」(おもはせぶりはたれやらが恋のこゝ
ろをうつせ貝) からかひづらもほどにをし

ちわがつのりてくぜつの果の「よし原八景」(あらしははれてひとしぐれぬ
れてあふ夜は寝てから崎の(まつたかひなきあけがらす

にかいせかれてかなしさつらさ「同」(ふけて青田にこがるゝほたるれんじ
まで来て蚊屋の外」(四十三ウ) なんてこんなに迷ひした

泣てわかれて又やくそくを「けいせい」(夜)とにくもるとうろつきのきへぬ

はしんきともし火をけして寝たときをびひもを（むすぶゑにし）のうらざしき
ばかよたはけとそしられながら「よし原八景」（いろのもなかのすがた見も
てる月なみのもん日とてやくそくかたき石山や鳩のうき寝の身ながらもあだ
に粟津のせいらんとこゝろでとめしみつゞけに）（四十四才）かよひ出して
はやめられぬ

とても女夫になられぬならば「黒かみ」（所詮この世はかりわけの恋にうき
身をなげしまだかくごきはめし心をばぬしになにとぞつげのくし）はやくあ
の世であらせたい

こゝはどどこだとかご屋さんに聞ば「よし原八景」（日本一の大門口）はるか
に見ゆるは秋葉さんの常とう明

どゝ逸大成文句入前編了」（四十四ウ）

（広告）

歌沢能六斉輯

新古葉唄集 中本

初へん 二へん 三へん

近年の新唄ならびにかへ唄のあだ文句を多く載たり

度独逸大成

拾遺前へん 同後篇

文句入とも前後の前後合して四冊の外に猶おちたるを拾ひ集めし也すべて六
冊の横本に載る所の文句凡一万余章の大集なり

東都人形町通

品川屋久助板」（裏見返し）

東京都立中央図書館特別文庫東京誌料本（東ノ5644ノ132）によつて
翻刻する。翻刻にあたっては、東京都立中央図書館（館長・松田芳和）の許
可を得た。パソコンで出ない文字は「」とした。判読不能文字は「？」と
した。

度独逸大成」（表紙）

古歌にあはれけに憂時つるゝ友もかな人の情は世にありしほとと聞へしは実
に人情を穿てるかな僕（やつかれ）近頃薄情（うたて）き妬婦の暴行（あら
ひ）に遇て禍鬼（まかつみ）一身にかゝりければ術（すべ）なく旧き栖（す
みか）をうしなひ名も相応（ふさはし）き甘口の安倍川街に萍流（さすら
ひ）つゝいとつきつきしき埴生（ロノ一ウ）の小家（こや）に独（ひと
り）侘しく日を経るにぞ嚮（さき）に浅草なる広小路にともかくもして在け
る頃は日ことに訪（と）ひ来（き）し人々さへひとりとして見かへらず就中
そのころ東川てふ人あり其友の作なりとて見せられけるとゝいつゝをなし流
にさて住ながら鷺は居？る鵜（ロノ一ウ）は（あさ）る「よく人界にお
よぼしたる譬喩の秀作といふべし是（こ）は前集よそへ唄の部に出すへかり
しを緯（こと）に紛れて漏しつれば愚痴のあまりに書つけしははしがきなら
で恥かきならまし

安政六己未のとし」（ロノ二ウ）

霜月の寒風にかじけて一句あり
妻子より今はたのみの炭団かな

隆興堂主人（りうかうだうのあるじ）

鰥寒翁（くはんかんなう）

歌沢能六斉 誌」（ロノ二ウ）

目録

新内入

唄員七十五章

雑 はざり也

全二十三章

六、『度独逸大成後集之後冊』（東京都立中央図書館特別文庫東京誌料）

上るり入り 哥沢入 ことば入

馬子うた うたひ はうた

すちやらか こはいろ

せんさよう くどき

そらふし ちよほくれ

からくり口上

歌沢入 全五十三章

前編遺漏

名所地名 全十二章

新吉原八景 全八章

東海道五十三駅 全五十七章

通計 一百七十一章(口ノ三才)

(絵)

この図は天明元年の印本絃曲碎弁当(けんきよくすいへんたう)といふ哇

(はうた)の草紙に載る所の摸(うつし)なり哥沢入の文句に因(ちなみ)

て出せり(口ノ三才)

度独逸大成後集之後冊

歌沢能六斎輯

文句入の部

新内ぶし

やほなことだが見そめた姿(くはんこう)(娥々たる玉顔に香粉をよそをふ

希(こひねかは)くは軽羅(れいら)と成て細腰に着(つかん)(トマアど

うぞ思ひがはらしたい

貞女たてたり気がねをしたり(白藤けんだ)(いとしとおもふてこころから

三とせ此かたこなさん覚へがござんせういけんがま(一才)しい事とては

ついに一度もいはぬのはひよつとこころにさはりなばあひそがつきたらど

せうと)人にやこけだといはれたり

つらいうきよのなりゆきじやとて(明からす)(身はいましめのつたかづら

ふりつむ雪にとぢられて(いつそしんだかましだるふ

あはぬむかしが日にますおもひ(つな五郎)(いふは今さらすぎしあさはつ

の一坐のつれのうちおまへのなりふりめいさつが(一ウ)(こひしゆかしで

此くらう

人はあはぬとさめるといふが(音羽のたき)(いとし男にまた相の手よかは

るまくらのおかしさはしよてはたがひに客であひそれから後は色であひ今は

しんみのめうと合あきもあかれもせぬ中を(わしはあはぬとなをつのる

ぬしとふたりでせたいをもてば(いだ八)(手づからわたしがまゝたいてう

ちのものよこちの人あすはどふしてこふしてと(二才)こんなくらうもい

とやせぬ

川竹のうきふししげきをいとひはせねど(こひころも)(ゆふべはさぞおた

のしみそりやそのはづさ深川の小さなとやらいふけつかうなお女郎さんわし

やとふからしつてゐるぞへホンニあつかましいドレかほを見て上イせう(夜

ごとあはぬをうらみごと

はでやうはきはそりやもとの事(つな五郎)(あけくれこひしゆかしいの心

がつうじておまめなおかほふしぎな所で悲(二ウ)しいおすがたを見ます

るといだきつく)しんのはなしもつもる雪

まつわか木にあひをひかけて(ふじかづら)(はなさそふ蝶はかすみの野

辺をまつわかげの松は花を待人は情のよすがらにふたつまぐらのはなをまつ

ほんに浮よはまゝならぬ(ふたりゆくすへもろしらが

とかく男をうはきといへど(らんてう)(ひよつとおくのきやくがいきなや

つでそなたのきがかはるつかと(三才)きやくにもしやとあんじられ

たうざまかせに切るといへど(同)(おみつさんへぎり立て此世でそはれぬ

そのかはりみらいはわたしめうと(口とこころはうらおもて

あいたみたさとはびたつおもひ「仇くらへ」(ねまきのまゝにわかくさは床をぬけ出明べやにしのびよりていの？のすがた見るよりすがりつき)人目いらふかまたくらう

忠義ゆへとて心はふかく「三ウ」「谷」(人の見るのもはづかしと御くびをかきいたきくもりしこゑをはり上て「これそなさけのいちの谷

きすい気まゝもていしゆとおもや「らんでう」(おまへのそふしたかんしやくはつねの事とはいひながら「けられなからもわしや嬉し

人の男をわがものがほに「三かつ」(おそのといふていゝなづけのによつほがある)いろいろのよくでもふにんじよう

人目のんでしゆひするつらさ「つな五郎」(かくれいかよぶよること)「(四才)しゆびしてあふたかへすよは「かうもくらうなゑんかいな

どふした縁やらかうあくまでも(なにのいんくはにそのやつなきじよいおとこかわしやかあいゝ)こゝろで心がわからぬい

おやけうたいから親類までも「わかれしも」(たのみもきれてゆくたこのおちつくさきもなきくらし「ぬしたゞひとりがつゑはしら

たづねまはりし其かひありて「あはしま」(さぞいひたいことがござん「(四ウ「せうわしもきゝたいことはやまやま「めくりあはしま神むすび

おなじ女にうまれてきても「らんでう」(わたしが身をうつて其かねを又こなさんにみな入上「いりあけ「られマアうれしかるふかよかるふか「こひも

つすいもゑんしだい
ぎりにうはべは切とはいへど「同」(もつしおみやさんなるほどおもひぎり

やせうだんだんのおはなしをきいて「かはしたきせうは胸の中」(五才)
つとめする身と女房のこころ「同」(せたいかためてやれうれしやと思ふは

一日もないそりやたれゆへじやみなこなさんゆへ「うはきされるになをくらう

くろうかけるとわしやしりなから「たきがしは」(いんぐはなものになれそ

めて思はぬくろうくるしみをかけるもみんなわたしがわざ「一日」(ひとひあはずにぬられふか

いろにや姿もつくるふものを「あはしま」(きのふにかはるありさまはこひしき人には「五ウ」しまのすかたとなりて「ゑんもつすきの恋ころも

女房かつのりやゑごぢでなほまたかよふ「らんでう」(女房のつかはへたら見せものにして大かねまうけそれしやまたおこられやすは「とかくりん

きもときがある
つきみやつして此いろのみち「はつもん日」(升酒屋の小七とてやしきかよ

ひのやさ手代正月中はやくそくの「心よしはら大もん日
せまい心は女のつねよ「六才」(恋ころも「わたしはおもふにはんぶん

もおまへのこゝろにあるならば「かうした歎きはありやせまい
おさな心にまこともあれど「明からす」(わたしはさむうはなけれとも時さ

んがあのやつにたゝかれさんしたのかおまへはさそくやし「いざりませう」
とかくうき世は不人情

きるをいとふはゑにしの糸よ「同」(とびたつばかりおもへども身はいまし
めのつたかづら「六ウ」ながい年季をさるつなき

男ばかりに気まゝをさせて「らんでう」(みせへいづもの神さんもかたひあ
きなるゑんむすび「ほんに女はなさけない

毒としりつゝあはれぬつらさ「きくの井」(ふかないなしみとならしばのもゆ
るおもひをひやぎけに「しばしわするゝうさはらう

つらいくかいのうきめの中を「同」(おもひもふかき川竹のながれよるへも
さだめなき「七才」ぬしにあふのをたのしみに

死なざやむまいたがひの迷ひ「ぶぢかづら」(コレはやきぬけふまではいろ
いろとしゆびしてはきたれどもこよひがそなたも見をさめといふかほつくつ

くうちまもり「なみだばかりで声もでぬ
まことむすびしわがこひころも「はつもん日」(外のつとめはいやましと思

ひをふかくそめこみしはだぎのもんにしんじつ(い)だきあふたるひよくも
ん(七ウ)

までど来ぬ夜は人しらぬ火や「ふちかつら」(な)つこのよのかやりのあとのう
たゝ寝にぎしきくもしづまりて(も)ゆる思ひは胸の中

死んたらさぞかし歎もせうに「恋(こ)るも」とかくによつばにはさせぬたつ
てさうしたいといはゞ子をひとりないと思へはすむとつてもつかぬつゝや
う(口のきゝ様)よ(も)なきの種

たかひに莞爾(に)つこり(う)れしいゑがほ「うた入」(ま)つこちへおじやと
このうちしばしもの「(八才)をもしはざりしが(猫の水のみ鼠なき

家業つくとて舌さへかろく「同」(一)ばいぎげんのちよき介がきさくにまか
せへらへらと(の)せて引こむくちぐるま

茶だちするのも人目をしのび「はなの井」(す)へのゑにしをまつち山せうで
んさまにぐはんかけてたばこを三とせたちまちや月まち口まちだいまちや田
町にござるほかいんさんのまもりお札もいろいろと(「(八ウ)そふて見たさ
の神だのみ

うちにある間もめさきに見入て「はなの井」(こ)ゝるもつてふてんまやの
きに立よりうかゞへば(か)ほは見へねどはなし(ゑ)

ぬしとくらしあの小なべだて「いだ八」(た)とひわたしがうけだされ御し
んぞさんのかみさんのと(栄)耀にのぞみはありはせぬ

かさぬとは八重なでしこの名はやさしいが「きぬ川」(アイ)そのつとめする
ものはてうどいわ井半「(九才)四郎のやうじやとつはさでござんす(実)が
うらみの種となる

ふみのたよりにとびたつ思ひ「いだ八」(し)ゃんとひとこしなでがくのどの
のとれたるゑもんざか五十けんみちいそいそと(い)そぐ心はさきにゐる

つなもおよばぬゑにし(い)とは「つな五郎」(その)心をきくからはちつとも
はやくつれてのきそひとげずしてとらへられかばねを「す」へにさらすと

も(「(九ウ)はなれかたなに切はせぬ

人はまことゝたゞひとすじに「日高川」(き)よひめくはつとせぎのほしさて
こそ(こ)がれこかるゝ日高川

ぬしを思へばつるきの山も「す)かはら無けん」(御)ていのためにする命む
けんのかねをついてひるのちこくにつつはつてもかまはぬく(お)にのちこく
もいとやせぬ

たとへうはきがあるふとまゝよ「同」(し)んからほれぬいたこのこじやと思
ふてくらすこのみじやもの「(十才)親をすてゝも退はせぬ

としはちがへどかはらぬいろに「かつら川」(む)すぶをびやのきののはやこ
よひかぎりに用そひしつまになこりもおしこふし(う)き名ながすやかつら川
ついたことから切たるのちに「ふたへがさ」(い)づれのかたみとちぎりお

かましおとづれのしばしとたへてなきあかす(す)ぎしちぎりを思ひだす
かはらぬしと引よせられて「明)からす」(う)れしう「ござんすかた」(十
才)「じ)けないといだきしむれば」(た)かひに冷たきかほと顔

金をつくしてかよひし中も「同」(い)つまでかふしてるとてもかぎりなき
ふたりが中(こ)ゝるつくして身のつまり

まこと見るよりついのりかきて「恋(こ)るも」(そ)なたをによつぼうにもたい
ではいきてゐてもなにしたのしみ(い)けんいふやつア気がしれぬ

あすか川ふちか瀬となるうき世の中に「(十一才)「ゆ)ふぎり」(その)ぬしは
かはらねどかはつたはおれが身のうへ(た)づねてくれる人もない

今はすまひもなくなくをくる「つな五郎」(う)きかんどつにあいなれしかの
はなさをたづねんと身はうらなひのうらおもて(ゑ)んも月日のなさをけなや
あふかあはぬかみのうへしらず「同」(お)のれにあふてこのうらみいはい

はふとひとすじにおもひついたらるをんやうし(す)へをあんじる人「こ)ゝる
(十一ウ)

しみる思ひはあの人ばかり「同」(は)なさは心にそまぬ男にうけだされ浅

くさへんにかこわれて（人にヤウはきといはれても

みへもかざらではだかと裸「たきかしは」夜「と日」とのかはいさはしだいにつもるふじのゆき」とけてたはひも夏げしき

かんしやくは心やすだてそりやうれしいが「つな五郎」(おまへにしんぜた此からだうちうたるゝはいとはねど今いわんしたが「十二才」しんじつなら「うわきツされては腹がたつ

たとへ此身はくらかへしても「三条かはら」(身をきりうりにしても此なきをすくわんとしあんをきはめ「ぬしにしんせた此からた

なさけしらかの天窓ふり立て「あけからす」(あまりしげしげかよはれてはおやがくわないかんどううけ「おためこかしのこはいけん

二世も三世もむすびし彖にし「同」(かねてふたりがとりかはすきせうせいしもみん「十二才」(なあたどぶでしなんすかくこならさんづの川も此やうにふたり手をとりもるとも「たとひぢくくのそこまで

はつにあふたることはのはなも「あたくらへ」(おまへのまねことがくせになりわらはれぐさのつゆならでひろはゝきへんこゝろねを「今しやみとなりしけり草

ひと夜つまとはながれの呼名「しら石はなし」(いやなきやくでござんすとわるくいふのもほむるのにもへなきしん「十三才」(ぞうのこせうらく「よ

いもわるいも縁による
つくすまことの情のはては「たきかしは」(それはれぬこのよを思ひきり「しよにしんであのよにてながうそふのがたのしみぞや」(無分別なるくさのつゆとほいくから仏のちかひ「あはのなると」(ちゝはゝのめぐみもふかきこかはでら「めぐりあはせるたのもしさ

あだなくせつをわらはゞわらへ「らんでう」(まアしたにおいんなんしア、いたいわへエ、この「十二才」(きちげへめさあこぶどつさりとすはつたかさいこのすけ「ほれたとぶしはつねの事

ともに思ひは日ましにつる「ふたへきぬ」(あふたそのよのおもしろさしよてはうはきてあひほれのゆびにたがひの名をほり合「いろもこくなる腕のすみ

かほいろかわるいと人にいはるゝつらさ「はつもん日」(せきせかれあはれぬやうになりしよりよるひるわかすくよくよと「十四才」(ないとくらせしもの思ひ

きづよいがなんぼ男のつねじやといふて「日高川」(それほどいやなみつからを女房にもとふとなせいやつた「それじやあんまり不人情

ぬしにわかれて何たのしみに「たきかしは」(そのしんちうのまことをはしつてはまりし恋のふち「しづむかくこにきはめしか

このあしをふむはみれんとわらふてあらふ「タきり」(いつそあはずにかへるう「十四才」(かあはずにいんではこのむねが「すまぬ心にたちもどる子を思ふおやほどおやを思へといへと「しろ木や」(おもふにわかれおもはすもよびかはされしおやのうち「なさけあるのかなさけない

わたしの心がまたしれないか「あだまくら」(そのうらみはみなもつともながらこいふもそなたの身を思ての事「そんないひわけ聞はせぬ」(十五才)

あまい親じやとわらひもせうか「三かつ」(せめて一日ぶつふにして此世のねんがはらしてやりたさ「わしも若気で出来た子た

かんがへりヤかんがへるほど世間へたぬし「わかれ」(ふつゝりおもひきるふぞとたしなんでみてもなさけなや「りひとめもむぢやになる

やつれさんしたおまへの姿「たきかしは」(いんぐはなものになれそめて思はぬくろうくるしみをかけるも「十五才」(みんなわたしがわざ「身を粉にくだいて恩がへし

雑の部

やつれすがたを見るたびごとに「清元ごん八」(なみだでもんでそりおとす

むかふかゞみに山むらさき(「しん内いな川」)うつせばうつるかほとかほ(わたくしゆへじやくやみ泣)

いつもながらのむりとはいれど「義太夫おしゆん」(そりやきこへませぬ伝へ系さん)「常はづおはん」(ちいさいときからおまへ)「十六才」にだかれ「清元おその」(手ならひまでもひとつこになにやらさうしへかいたのを)

(歌丸さんのふでのあや)「義太夫廿四かう」(めいぐはのちからもあるならばかわいとたつたひとこと)「さりとはつれないきれことば

はでに見せても心はじみよ「義太夫あさま」(いやなきやくにもひよく)「おもふおとこはやまどりの」(清元おちつじ)「やばないなかのくらしにははたもをり候ちん仕事」(十六才)「うた沢」(ほそたに川でぬのさらし)「やがてくがいをあらひはり

ちよつとこつしで鶯宿梅は「ことば」(ヲヤ次郎さんじやアありまへんか)「ちよつとまがきへまはつてくんまじヨ」(コウおしらん此ころはてへぶこざりんじやアねへかおじやまになるからおとといこよぶ詞「なんさますとへんぢらしなマアいろいろはなしがありんすからサアアへぢれつてへヨ」…)

(…)(いつもはつねのぬしのこゑ)「たびは道づれそでふりあふも」(十七才)「うた沢」(のぼり下りのおつとら馬よさてもみごとなたづなぞめかよナアアまじしゆのくせかたかへでおまへさんとならばどこまでもヲヲ…引)「ことば」(ヤイうぬどふしやアがつたのだおんなうまベイ見やアがるとまめベイねらやアがつてはらでへこのふつらばりやがるあるきやアがれドウドウドウ)「えんはいなかでめくりあひ松にからみしあの薦かづら」(うたひ)「たかさ」(やたかさ)「やこのうら」(「常はづ三ツのあさ」)「ふねじやアアへさむかる」(十七才)「きてゆかしやんせ」(「哥沢」)「なりとはきみじかないまをひしめて行わいな」(なまきをさくよなつき別

いなかそだちのやぼうくひすも「スチャラカ」(これでもおおくににあるとき

はおいねおいねとそだてられそれからはるお江戸へ出てへつゝいがしへとしたいもちかまや堀からむをとりふうふながよくまゝとなるすちやらかほくぼく)「こゑにかはりはないわいな

みやぎのゝ萩を(ママ)「(十八才)「こはいろ」(ころもさつきのくらきよにかたきをうつたはそかきやうたいこれはきやうたいこれは姉妹)めくりくるはの女郎花

つゑにはなれた身はめなしどり「あんまはりイ引」(犬)「わんわん」(「そばイウ」…にうめんしつほく)「あんま」(そばやさんなどきだね)「そばや」(もふ七ツをうちやした)「あんま」(それしやアもふよあけがちかい)「犬」(わんわんわんわん)「あんま」(「えへちくせつめよくほへやア」(十八才)「かゝないてあかしの神だのみ

まゝことであそぶうちついとけあふて「さく?」(おめ)「えへおめ)「えへほつちり毛がはへだいいのところがちよいとなで」(おほ)「心にぬしのつまなれぬかまどもおまへのためと」(せつきやう)「よいにゑました麦めしもしたぢがのふてはたへられぬトロントロン」(たらぬながらもきはたらき女房もちでもしあんのほかよ)「くどき」(はるははなさくあを山)「十九才)へんにすゞきもんどゝいふさむらいのつまや子どものあるそのなかでけふもあすもと女郎かいはかり)「すいも恋ぢやぐちになる

ぐちをいやなどふなるとても「こはいろ」(とはれてなんのなにがしとなるような町人でもござりませぬしかし生れはあづまじに身はすみなれしすみだ川江戸でうはさの花川戸所に古きばんづいの長兵衛とてけちなやろつサ)「(十九才)「おれも男だそひとける

とふせおよはぬ主)「しゆう」(とはいへと)「そゝりぶし」(これ久松よくよく主がけらいに手をさけてヲ引たのまにやならぬ事があるまはるまはる)「恋に上下があるものか

いやなお客のついしやうよりも「せつきやう」(御いたはしや安寿ひめお

とつち王もろ共につれなき人にかひとられひるはしほくみたきとり

「ことば」(「れつち王わしはぶでもみいけれど年はもゆかぬそなたまで」(二十才)ぬしのくろうがわしや嬪し

気さんじなやうに見ゆれど心のうちに「ちよほくれ」(やれやれみなさん聞てもくんねへわつちも生)うまれ)とふとい身なれといろのいのじ見やう見まねにかねやおせゝをちよいとちよんがれやれやれそだぞ(いふにいはいはれぬものあじ

おぼこすかたのあのいろわかしゆ「ちよほくれ」(さればとつざいはゞかりながら因州たち出ごん八さまが花のお江戸へまはらんものと東かい道へ」(二十才)とさしかゝるしまだかなやのやどひき女ごんはさんのすがたに見とれ)めかほでしらせ恋のひ?

はれてそはれぬあくゑんならば「馬士うた」(おまへさんどならばどこまでもよい、エ、ハイハイあんたこんちきしよつめよるもひるも豆ばかりくひたかりやアがるは)このとちはかりは日はてらぬ

義理てしははわかるゝとても「こはいろ」(われをたれとか思ふらん関八しうにかくれなき犬かひ玄八のぶみちが」(二十一才)うつ手に向ふ上からはたとへくもきりかすみのなか)たづねて一トをはなしたい

しやうじひとへも百里のさきも「からくり口上」(あいの金からやみをそよとあけてひさでチヨイトついて目でしらせやわたしはほんこつへゆくわいな)あはぬその夜はおなじこと

ほれられたのかおまへのふせう「はうた」(むせうせうへうぶのかげでいたしませう何う)ねむかるうとも中なほり

にならしやんせ

きげんなほしてマア寝やしやんせ「上るり」(さよふけて)「ことば」(そばイ引にうめんそばイそばイ引)「二十二才」(上るり)「ハツか」ボロン

「ことば」(あんまア)「犬」)ワンワンワンワン)「同」(そばやさんなんどきだネ)「上るり」(七ツか)こけつかう)あけむつの)かねがたきの世のならひ

歌沢

人目おほけりやものかずいはず「羽をり」(どふでもけふはゆかんすかといひつゝたつてれんじまど)あけていはれぬむねのつち

今はどふいふ心であるか「二十二才」(ト声かへうた)はなしのやうすにかくふみを)とゞけておくれよたよりやどん(ことばすて)

なくかわらふかあの鶯は「はつね」(人のこゝろもしら梅のかごとかましくうれしなきエ、じれつたい)どふすりやあはれる事だらふ

思ひつかれてついとるとと「花せうぶ」(いとといるますむらさきの)さめてくやしき宵の夢

雨ふり風間いとほかよひ「小町」(九十九夜さてこさんせかおふせにおよばぬそりや)「二十三才)そつでなうてかいな)今はたがひに身のつまり世間でもほめてゐられる身を持たながら「ほんに思へば」(人のそしりも世のきりも思はぬ恋のうつせ川)魔でもさしたか此しまつ

からかひに腹も立ぬにおこつて見せて「玉川」(つもるくぜつの其うちとけししまだのもつれがみ)なかせてそれから中なほり

心がからうき川竹の「二十三才」(身はひとつ)ながれによどむうたかたのとけてむすぶの飯まくら)男ゆへならぜひがない

五月人形ならへて見ても「きんとき」(ぶじのすそのゝかりくらやよしつね弁けいわたなべの綱からの大将あやまらせ神功皇后武)たつの(うちのしん)ぬしにみかへる顔はない

青柳の風のまにまにふかれてゐれど「恋すてふ」(なみのよるよるいざり火
のもゆるおもひのくるし)「二十四才」にきゆるいのちとさつさん世をう
ぢ川のある木や「水にくらすがもの思ひ

人目つくるひこよひの首尾の「むらさき」(まつに「ぬ夜はふでのさきつら
みかさねいのち毛もすりの海にはまるほど深いあさいは客とまぶ」(氣は
かりもましてじれつたいよう引)ことばずて)

じつとよりそひ顔見あはして「かねはより」(此手がしめた唐じゆすのいつ
しかとけてゆく)「二十四才」(らしい)「ふかくなるほどぐちになる

わかつまばしとはゆかりのよひ名「花のくもり」(中をそよそよふくはる風
にうき寝さそふやさゝなみのこゝはかもめみやこ鳥)今におの字をつけて
やる

たまさかにむりなしゆひして人めをしのひ「ふけてある」(たがひに見かは
すかほかほめにもつなみだそでぬれて)「わかれりや思ひがなほまさる

中かよすぎてちはからくせつ」(二十五才)「うちかのこ」(いろもかもある
すいたどしすいなうき世にやばらしい)「すねずとこちらを向しやんせ

みれんらしいが寒うてならぬ」(中くつし)「よつでのたれをおうしても又
もなきゆく明からすゑりに風しむゑもん坂」(見かへるやなぎもふねまねき

くぜつつのればうたかひぶかい)「げいしやせうばいはじめからとくしんづく
てこうなつて今ではじみな女房きを」(二十五才)「こゝろのそこまでしりな
から

かうもあひたくなせなるものか「なのは」(かあいといふことをたがはじめ
けんほかのざしきはうはのそらもとさままいるとしめすこゝろのあどなよ
うへうへさまのちはぶみも)「すこしはなれりや筆のあと

どふせかたぎにやはだへがあはぬ」(かまくら)「本町二丁目のナア、ヨヲ、
ヨヲ、本町二丁目の糸屋のむすめあねは廿一いもとははたちいもとほしさに
ナア、ヨヲ、ヨヲ、いせへ」(二十六才)「なつたひくまのへさんど」(女なが

らもかいばをり

うわ氣ヲされてもわしや捨られぬ「書おくる」(だいてねよとのかね)と毛
岩にせかれてちる浪の雪かみそれかみそれかゆきか)「つもる思ひは恋のつね
?やく?とは思入ともし又さうかと思ひ」(こひこひし)「むねにさしこむ
窓の月いまやくるかと待身はしらで」(かはつてみたなら何とせつ)

とんな事されても」(二十六才)「わかれぬ覚悟であれば」(わか浦)「天のはし
立きれどのもんじゆ文珠さんはよけれどももきれるといふ字が」(氣にかゝると
は浅はかな

腹を立たりたゝせて見たり「みしかよ」(のこるくぜつの朝なほしむかひの
ちよきはすてをふねそのまゝけふも居つゝけとたがひにつのる恋の情)「ほん
にたのしいきまゝ酒

つくひすのひとりきけんに朝寝を起し」(二十七才)「はる風」(梅がかほれ
ば君を待心のたけのうれしさにはつ音の夢を身にそへて)「むねにつかんでね
ずみなき

思ひすこせば氣ばかりもめて「目はな」(ねぬ目にかいたあすのふみはなけ
らしいと心にとふていつて長者になる氣になつて)「あへは男の口くるま
むかし古風なよし原かよひ「浅くとも」(とんでゆきゝのあみがさをのぞい
てさた」(二十七才)「かぬれつはめ」(ねくらかさぶか仲の町

まてば待ほとしんしんふけて「かれの」(こゝろかさへる夜はほの月田面に
うつる人かけに)「もしやそれかとのひあかり

朝やりにちよいと氣つけと一ツはいつけて「けさの雨」(又あつゝけになか
の目をみしかうくらすとこのかみをひきさき眉毛をかくし申こちの人エわた
しかかへ名はなんとせうアレ寝なん」(二十八才)「すか起なんし」(ひとりね
るとは実かない

やつれ姿のわか影見ても「はききけう」(月のすへに草の露君をまつむし夜
ことにすたくふけゆくかねに雁のこゑ)「人にやいはれぬため涙

おたかひにほれりや思ひもふか草ならて「わかもの」(いもかりゆけは冬の夜の川風さむく千鳥なくまつ身はつらき沖の石)かはくひまなき袖の露」

(二十八ウ)

をつなくせつでたかひにとけす「むつとして」(くもりしむねをはるさめの又はれてゆく月のかけ)さしてもつれたわけじやない

むりなくぜつはからかひづらか「ト声」(いつしかしらむみしか夜にまだねもやらぬたまくらに男こゝろはむごたらしい女子こゝろはさうじやないかた時あはねはくよくよと)くちな思ひであいてゐる

そで萩の垣にからまるあの朝がほも「二十九才」(朝かほ)「つゆの命のはかなさはほんにあるやらぬないやらひとめ見るにも恋のやみ」(こひのやつれもこゝろから

とても来まいと思ふちやゐれど「おきてうつ」(蚊帳のひろさに只ひとりかをやく火より胸の火の)もつてなみたのわくばかり

ほれたおかたにいひよられても「たつた川」(またつら若きむすめ氣のどぶいふてよかるやらしんきまぐらのそらねいり)「二十九ウ」(きのかほばせさくらいろ

氣さんじないなかずまひは人目もとほく「いろけない」(田うへもどりに袖つまひかれこよひあをふと目づかひにまねく相図の小むろぶし)いろのうき世じやあるまいか

きゝわけがないとわが身でしつてはゐれど「思ひをば」(毛ほど思はぬぬしさんになほますかゞみにくもらぬといふたがむりじやないかいな)思ひきられぬ恋のよく「三十才」

思ふやうにはならぬがうきよ「花になく」(おもひはおなじあいたいの雪のまがきのいざりぶねながれしたいは風しだい)ゑんと時せつをまつがよい茶だちしほたち願をかけて「あふたひ」(せん里の道もなんのそのいとはでかよふとらの門)かど)すへのゑにしをたのしみに

氣やすめとむねに思へどうれしいことば「トこと」(わすらり)「ママ」(ぬものかわしらぬかそふもいふ)「三十ウ」(たをじつにして)はやくもちたいあらざたい

まだ嫁とならぬふたりが此身のうへを「うきな」(むねでのろけてしらぬかほうはきするさへならぬとはほんにつるさい人の口)せけんしつとがやかましい

しのぶ恋ぢはさてはかなさよ「其ふし」(こんどあふのがいのちがけなみだでよこすおしろいの)かほをかくしてむりな酒

むりな縁じやとしりつゝ惚て「三十一才」(あれ雪)「うき名をいとふ恋の中みだれしまゝのびんつきや義理といふ字は是非もなく」(氣からもとめてくろつする

たまに来てそけないおまへ「さみだれ」(ふけてトこゑなくほととぎすアレきかしやんせ是もうし)もう寝なんすのかじれつたい

梅も柳もみなそれぞれに「天の戸」(おもひのたけをいふふしもすぐな)ゝろのひとすじや(恋のいきぢのあだくらべ)「三十一ウ」

女こゝろはたゞトすじに「ゆかり色」(ぬれているよし雨のふぢそのあださきも君ゆへとすがたつくろふ水かゞみ)あかれまいとの身たしなみどふもあはすにヤト夜もこせぬ「?から」(恋といふ字にひかされてひとり雪のよしのんできたに)さきしやきほどの顔もせず

まつ人はたまにまたないおきやくはしげく「しかのからさき」(夜こと夜ことにとまりがらすがむれくるをあを「三十二才)とうれしなみだのかはく間もなく)又もわかれのためなみだ

しつに思へはわけない事を「竹すゞめ」(さてとまらぬは色の道わたしばかりがじようたてゝおもふおかたのつれなさよ)思ひす「してくろつする

おまへと一生くらされるなら「其ふし」(深山のおくのわびずまひぬひはりし事系ぐるまほそたに川の布ざらし)柴かる手わざもいとやせぬ「三十二

ウ)

わけもない事に？をすげたがひにすねて「くぜつして」(おくのぎしきのつめひきがつい中だちてそれなりにみだるゝかみのつげのくし)もはやわかれの鳥がなく

ちよいとした気まづいはつみでゆては見たが「ゆきと雨」(屏風を恋の中だちにてふとちどりのみつぶとんもと木にかへるねぐらどり)まさるつら木があるものか

雪のはだへのとけぬが花よ「(三十三才) (おもひのたけをふりつもるそつと身もよもあられふものか) おほこ心のはづかしく

前編遺漏

名所地名

よひよひに夜つゆあてゝもまがきにやならぬ松のはちうへ仲の町
住よしの松にきもせで恋わすれ草それでうき名は高とろ

どてのもみぢに目黒の董「(三十三ウ) 万事なしとは誰がいふた
咲ものこらす又ちりもせずけふか飛鳥の花ざかり

忍ばずにはれてともねが下谷といふはをこつた上のじやないかいな
夜が昼より明るい郭(くるは)みそかの月でも出してみしよ

手とりと手とりは龜戸の祭りうそとうそとをかへがへに
銭塚にせにのわいたる浅草寺にいまもわきたつ人くんじゆ

おたがひに和歌の浦でもこゝろはじみに「(三十四才) さかり松葉のめつと
づれ

うきな高縄ふたりが中をどこのやつ山ふれあるき
かたい約そく石山なれどかげじやわたしを秋の月
逢も見もせざこがれもせまいなまじあふみの水かゞみ

新吉原八景

大門の夜雨

をくる別の大門口はこひのやみぢの袖の雨

中町晴嵐

竹むらの軒に？らでもうそふきさうな「(三十四ウ) ひよりあかりの荒い風

揚屋夕照

豆腐のもみちは今ではないか夕日こかるゝ揚や町

夜郭秋月(よるのくるはのあきのつき)

月もやどかれ花咲みだれつゆも玉やのそらまがき

田類(ぼの)落雁

雁の玉章(たまづさ)おとすな禿しのぶふたりが中たん甫(ぼ)

封疆(どての)暮雪

日は暮ながらも出茶やのあんとしはし忘な土手の雪

道哲晩鐘

これもつとめかよし原道か「(三十五才) どのお寺のかねのこへ

今戸帰帆

内でも大かたさぞまつばがしいまどのり出す朝がへり

東海道五十三駅(つぎ)

日本はし鏝はふれふれさせていさましてんきあがりのお江戸だち

恋のみなとや品川あそび日々におもひはますもと屋

大森をこして今またさて大もりなめしのながいに万年屋

こひかてきたよかな川宿にのぼりつめたるたきのはし「(三十五ウ)

足のぐあいもよい程がやとまはる金沢しようめうし

かまくらすましてはや糸の嶋よしやれてかはゆひ貝づくし

けびぞうといはゞいはんせあのさかひ木で「詞」(ぼたもち四五くふたつ

ちおつれさんはさきへおたち「上るり」(きもとつかはとよし田じゝすゑの

ふでによるのふじ)みちは石だかはかどらず

あとにおくれし足よはつれのくるましばしと遊行寺

朝はこさむい花みつ橋でくさめ三ツ四ツ七ツたち

こゝろなき身は嶋立沢に」(三十六才)しらぬ飛脚が大磯ぎ

小田原の外良(ういらう)くゝんだその口よりもはやくまはるよわしが気は箱根七湯にまはつてみたが恋の病にヤキゝはせぬ

三嶋ごよみを見るような文はいづれ日からのたのみ状

千本のあれは松原この治(ち)のむかし(さるほどにこゝにまたたかをもんがく上人は六代ごぜんのいのちごひ馬をとばせてひとはしり)茶さへのま

ずにかけて来た」(三十六ウ)

けふもぬらくら又ながやすみまつはうなぎでかしはばら

思ひだしたよし原宿でてうのなじみのふじびたる

田子の浦うち出でみればテモしろたへにじゆよばんそろへてふじまうで

さつたたふげは嫁りにヤいむがゆきのしろむくふじの山

興津女郎のあのしつこさに江戸の女をしてみたい

名さへきたない江尻の宿は馬のおならとうしのくそ

ざりからまん心の竹をやへにくんだるかごぎいく」(三十七才)

一丁町すぐに出てきてまりこの宿でちよいととろゝで腹直し

鳶のほそ道なにくらかるふ恋のやみぢにくらへては

あつま屋のしそのつけもの此藤枝のいろのゆかりの小紫

川こしにすへをかけたる嶋田の女郎おなじはちすのれんだいに

馬でもこされぬあの大井川神のようごかやすくこし

しげつた所がアリヤむけん山(いかにならひじらうとめ」(三十七ウ)じや

とてもいやな客にもあはねばならぬ)金がほしさや三四百

わちは命もかけ川なれどぬしはふたみちふたせ川

袋井にいれた鼠はにがしてやんな殺すもどぶやらかわいばし

天龍川でもとめればとまるとゞめかねたるなみだ川

遠州はま松赤いようでくるいほねはずみぬりひめぢうみ

鳶は舞坂てんきもしづか名のみあらゐのわたし舟」(三十八才)

雲のなみまにはまなの橋のあととはかすみの一文字

さきはなんにもしらすかなれどかはゆひめもとのしほみ坂

よし田ぼくちもまた一里半ちよつと一ぶく火打坂

よし田とほれば二階からまねぐしかもあのこのふりのよさ

腰をかけたまで今たてました御油るされませすゞ通

げにも赤坂いなかの女郎みんなけだしはひぢりめん

これもゆかりの藤川なれどむかしの男のさたはこい

岡崎女郎衆はよいかはしらす」(三十八ウ)

ときもハツはしはるばるきぬるつまらん古跡もよいころに

女にはいつもかうかう養老しほり買てなじみへとゞけさせ

鯛屋にとまつて子はするかやでよんでどゞいつ宮のしやれ

七里ねむつてはや横まくら夢の間につく桑名ふね

四日市しやもひとりはねすにひるもひなかをのみくらし

よほどいなかに又なりましたかたい豆腐の名薬し

庄のないのはこゝらの宿よむだもいはずいとねり」(三十九才)

?ぬれぬれ亀山あたり泥にも尾をひくやれわらし

関の地藏のふんとしならば「てたらめ上るり」(いもがむすびしたひもを

かへる日迄はとくまいと万葉ぶりのばかりちぎ)ふるにゐるときアなんとせ

う

あけぼのゝはながかうばしめくらのこひじ水にあふのかつちやまの

をたの水口つまよぶかはつかはひかはひとなきわたる

石部金吉おともちなとてもあたではきがもめる

草津ても鯛といへとも」(三十九ウ)もう此へんはせたのしゞみにあふみぶ

な

ひはの海よりこちやさみせんの川らぬねしめかいつもすき

大津絵のげほうあたまをあの大こくが「新内」のぼりつめたる二かいのは
しごおやにさかるふこのみのうへ）アレサ七福神には親はない

たゞ今京都へ三条の橋ながのみやこぢさはりなく

度独逸大成文句入後編了」（四十才）

（広告）

歌沢能六齊編集

哇（はうた）松の声

五編 六編 七編

はうたは古くよりつたはりし文句多く又近年の新唄といへども伝聞の誤且三
写の錯ありて文句の義理をなさぬものありけるにそを心づかであつとふもの多
かりさては声うつくしく節たへなりとも片ことをのぶるときは其人がらし
はかられて恥かしからずや通士よく是を思へ」（四十ウ）